

札幌市文化財調査報告書

V

1 9 7 4

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 V

N 162 遺 跡

1974・6

札幌市教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和48年6月23日から7月20日にかけて実施した日商岩井琴似マンション内に所在するN162遺跡の発掘調査報告書である。地番は、札幌市西区琴似二十四軒2条4丁目である。
- 2 本調査は、札幌市教育委員会文化財調査員上野秀一が担当し、加藤邦雄、羽賀憲二と共に、この3名が現場の仕事を遂行した。
- 3 本書の執筆は、上野秀一が編集を担当し、上記2名ほか発掘調査に従事した下記の者が、各項目別に担当し、文末に文責を明記した。
- 4 発掘調査、整理において、下記の人々より助言と協力を賜った。
北海道大学文学部教授 大場利夫
札幌市文化財保護委員
札幌大学助教授 石附喜三男
北海道教育委員会文化財保護主事 藤本英夫、高橋稀一、福田友之
北海道開拓記念館学芸員 野村 崇
北海道大学理学部助教授 吉崎昌一
北海道大学文学部北方文化研究施設
- 5 発掘調査には、下記の人々が従事した。
内山真澄、大原勢司、笠井衛二、長谷川克浩、伊藤加代子
北海道大学、北海学園大学学生
- 6 遺物整理、挿図浄書、原稿浄書には、下記の人々が当った。
森本雅子、佐々木裕美子、長谷川克浩、吉嶋ひな
(以上順不同敬称略)
- 7 炭素による年代測定は、学習院大学の木越邦彦研究室に依頼した。
- 8 発掘、整理、報告書出版の過程で、日商岩井、長谷川工務店、岩田建設には、たえざる御協力と御理解を賜った事を記し、深く感謝の意を表する次第である。

凡 例

- ①挿図の住居跡実測図縮尺60分の1，住居跡カマド実測図縮尺20分の1，ピット実測図縮尺40分の1，30分の1，20分の1，10分の1。
- ②挿図の完形土器及び底部実測図縮尺3分の1，土器拓影及び石器実測図縮尺2分の1。
- ③写真は，完形土器縮尺3分の1，土器縮尺3分の1，石器縮尺2分の1。
- ④遺構実測図中，セクションで網をかぶせた部分は，黒色土AないしBが堆積している事を示している。
- ⑤遺構実測中，平面図の中の記号は遺物が出土した位置を示している。
内訳は以下の通りである。
 - 印：土器片
 - 印：石器及び石片
 - ×印：骨粉ないし木炭片

目 次

例 言

第1章 発掘までの経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 発掘調査の方法と層序	7
第4章 遺構及び出土遺物	8
第1節 住居跡	8
第2節 墓壙及びその他のピット	27
第5章 発掘区出土遺物	71
第1節 土 器	71
第2節 石 器	75
第6章 考 察	77
第1節 ピット群について	77
§ 1. ピットの形態について	77
§ 2. ピットの層堆積について	81
§ 3. ピット内出土の遺物について	82
§ 4. ピットの年代について	83
§ 5. ピットの分布とグルーピング	85
§ 6. 比較考察	86
第2節 竪穴住居跡について	87
第3節 土器群について	91
第4節 石器群について	100
結 語	101

挿 図 目 次

巻首図版

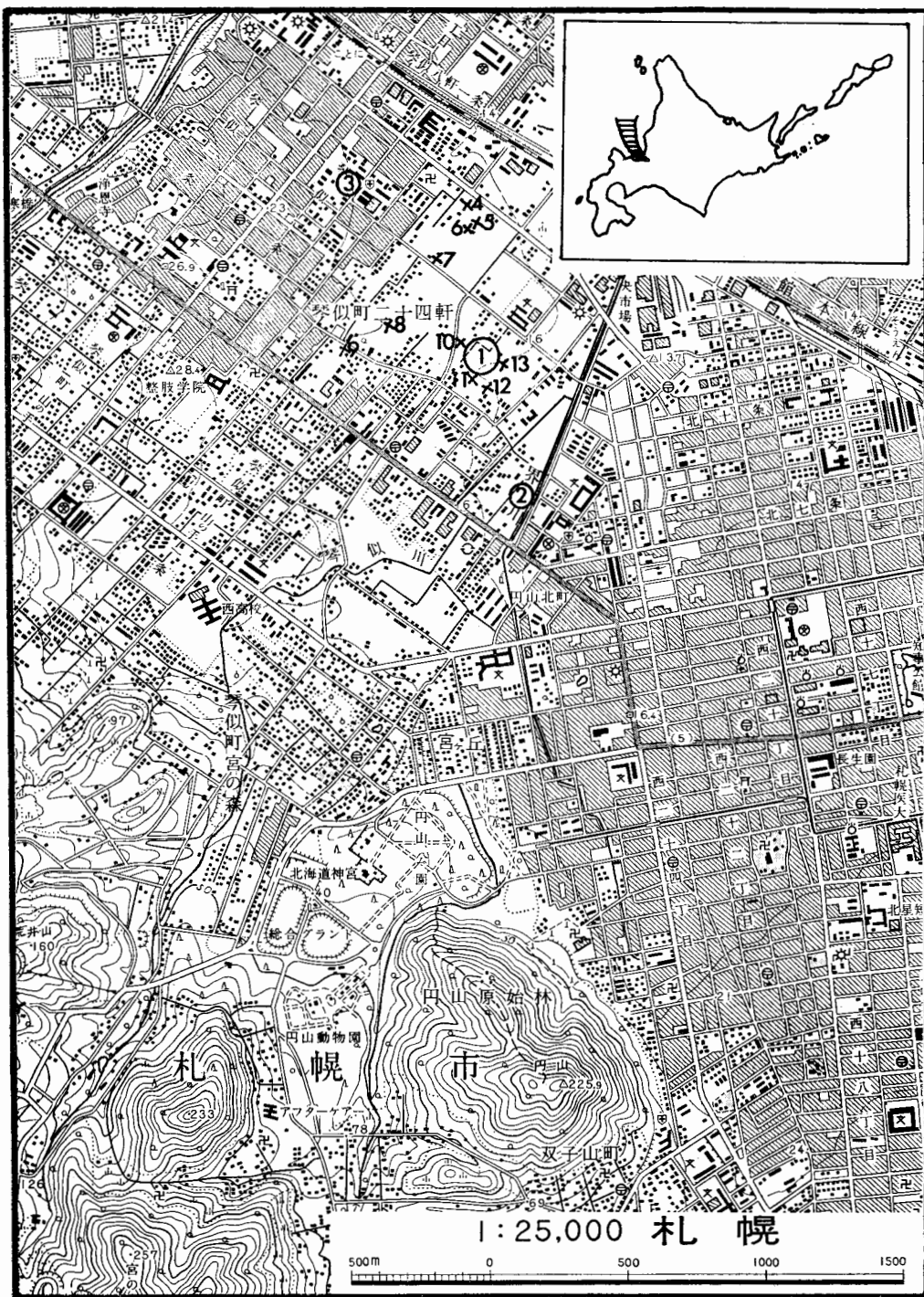
- 第1図 遺跡地形図
第2図 遺跡発掘区配置図及びピット関連図
第3図 標準セクション図
第4図 第1号竪穴住居跡実測図
第5図 第1号竪穴住居跡カマド実測図
第6図 第1号竪穴住居跡出土土器実測図
第7図 第1号竪穴住居跡出土土器拓影(1)
第8図 第1号竪穴住居跡出土土器拓影(2)
第9図 第1号竪穴住居跡出土土器拓影(3)
第10図 第1号竪穴住居跡出土石器実測図
第11図 第2号竪穴住居跡実測図
第12図 第2号竪穴住居跡カマド実測図
第13図 第1号(11~13), 第2号(1~10) 竪穴住居跡出土土器実測図
第14図 第2号竪穴住居跡出土土器拓影(1)
第15図 第2号竪穴住居跡出土土器拓影(2)
第16図 第2号竪穴住居跡出土紡錘車
第17図 第1号ピット実測図(1)
第18図 第1号ピット実測図(2)
第19図 第1号(1・2), 第4号(5), 第7号(3), 第20号(6), 第32号(4)ピット出土土器実測図
第20図 第1号ピット出土遺物
第21図 第1号ピット墳底面出土石器
第22図 第2号ピット実測図
第23図 第3号ピット実測図
第24図 第2号(1~5), 第3号(6~8), 第5号(t1), 第8号(9・10), 第9号(16~20), 第10号(12~15) ピット出土遺物
第25図 第4号, 第5号ピット実測図
第26図 第4号ピット出土遺物
第27図 第6号ピット実測図
第28図 第6号ピット出土遺物
第29図 第7号ピット実測図
第30図 第7号ピット出土遺物
第31図 第8号ピット実測図
第32図 第9号ピット実測図
第33図 第10号, 第11号, 第12号ピット実測図
第34図 第13号, 第14号, 第15号ピット実測図
第35図 第13号(1~8・12), 第14号(9~11・13) ピット出土遺物
第36図 第16号, 第17号, 第18号, 第19号ピット実測図
第37図 第17号(3・6), 第18号(2・4), 第19号(1)ピット出土遺物
第38図 第20号, 第21号ピット実測図
第39図 第20号(2), 第21号(1・3・4)ピット出土遺物
第40図 第22号(1), 第23号(2), 第24号(3)ピット実測図
第41図 第22号ピット出土遺物
第42図 第25号(1), 第26号(2)ピット実測図
第43図 第23号(6), 第25号(10・11), 第27号(1~4), 第29号(7~9), 第30号(5)ピット出土遺物
第44図 第27号(1), 第28号(2), 第29号(3)ピット実測図
第45図 第30号ピット実測図
第46図 第31号(1), 第32号(2)ピット実測図
第47図 第33号ピット実測図
第48図 第34号(1), 第35号(2), 第36号(3), 第37号(4), 第38号(5), 第39号(6)ピット実測図
第49図 第40号(1), 第41号(2), 第42号(3), 第43, 44号(4)ピット実測図
第50図 第41号(1~6), 第42号(7)ピット出土遺物
第51図 発掘区出土土器拓影(1)
第52図 発掘区出土土器拓影(2)
第53図 発掘区(F-I-10, 15区)出土土器拓影(3)
第54図 発掘区出土石器実測図
第55図 ピット形態別分布図
第56図 ピット時代別分布図
第57図 札幌市北大第一農場出土土器実測図

図 版 目 次

- 1 A 遺跡遠景(南東より)
B 遺跡遠景(北西より)
- 2 A 第1号, 第2号竪穴住居跡(北より)
B 第1号竪穴住居跡(北北西より)
- 3 A 第1号竪穴住居跡カマド(発掘前)
B 第1号竪穴住居跡カマド(発掘後)
- 4 A 第1号A竪穴床面の土器出土状態
B 第1号A竪穴床面の木炭・土器出土状態
- 5 第1号(1~4), 第2号(5)竪穴住居跡,
第1号(6)ピット出土土器
- 6 A 第1号A竪穴覆土出土土器
B 第2号竪穴住居跡(北より)
- 7 A 第2号竪穴住居跡カマド(発掘前)
B 第2号竪穴住居跡カマド(発掘後)
- 8 A 第2号竪穴住居跡覆土出土土器
B 遺構近景(1)(北東より)
- 9 A 遺構近景(2)(北東より)
B 遺構近景(3)(北東より)
- 10A 第1号ピット(1)(南東より)
B 第1号ピット(2)(南東より)
- 11A 第2号ピット(南西より)
B 第3号ピット(南西より)
- 12A 第4号ピット(1)(西より)
B 第4号ピット(2)(西より)
- 13A 第6号ピット(北東より)
B 第6号ピット及び関連小ピット全景
(北西より)
- 14A 第8号ピット(南西より)
B 第22号ピット(南西より)
- 15A 第27号ピット(北東より)
B 第42号ピット(北東より)
- 16A 第9号ピット(北より)
B 第10号, 第11号, 第12号, 第25号ピット
(西より)
- 17A 第16号, 第17号, 第18号, 第19号ピット
(北西より)
B 第20号, 第21号ピット(西より)
- 18A, B ピット出土土器(1), (2)
- 19A, B ピット出土石器・石片(1), (2)
- 20A ピット, 第1号竪穴住居跡出土石器・
石片
B 第1号ピット, 第1号竪穴住居跡出土
石器(1/2)
- 21A 発掘区出土土器
B 発掘区出土石器

表 目 次

- 第1表 第1号竪穴住居跡柱穴一覧表
- 第2表 第2号竪穴住居跡柱穴一覧表
- 第3表 第5号ピット, 小ピット一覧表
- 第4表 N 162 遺跡ピット一覧表
- 第5表 ピットのタイプと時代の関係一覧表



本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭49道復、第51号

第1章 発掘までの経過

札幌市は、北海道を南北に大きく縦断する札幌―苫小牧低地帯の北側にあり、その札幌市の西部に琴似町がある。この町は、最初に屯田兵が入植した所としても有名であるが、また、それ以前の先住民の遺跡も古くから数多く知られていた。その詳細については、後藤寿一の「札幌市及び其附近の遺跡・遺物の二、三に就て」（『考古学雑誌』27―9, 昭和12年）、河野広道の『琴似町史』「先史時代」（昭和31年）に述べられている。

さて、札幌市も、人口急増とその交通網整備の一環として、地下鉄東西線敷設を計画した。その一部が、西区琴似二十四軒を通る事になり、その付近の遺跡群が、破壊される恐れがあったため、雪解けをまって4月下旬、この方面について遺跡の所在・規模を訪ねた。地下鉄は、西区においては殆ど既在の道路下を通るため、過去に破壊されている遺跡も多いと思われたが、それでも車輛基地敷地内のN 154 遺跡、乗降口付近でN 155 遺跡などがみつまっている。一方、地下鉄敷設に伴う関連企業の進出という現状を鑑みて、5月に入って、二十四軒を手始めに、西区全般に亘る分布調査を遂行した。その結果、琴似二十四軒一帯で、新たに14カ所の遺跡を確認した。今回調査した、N 162 遺跡もその一つである。

6月中旬、この方面の分布調査終了直後、日商岩井株式会社は、当地にマンションを建設するため、基礎の杭打ちを開始した。その中であって、調査員が、この情報を一早くキャッチし、今後の措置について、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、日商岩井株式会社の三者で協議を行った。しかし、既に工事計画の立案が終了し、基礎工事が開始されているという事で、本遺跡における建築の中止、計画変更は難しいという結論に達し、一時工事を中止し、昭和47年6月23日から、一カ月に亘って札幌市教育委員会が調査主体になって発掘調査を実施したものである。（上野秀一）

第2章 遺跡の位置と環境

N 162 遺跡は、札幌駅から西に約 3 km、国道 5 号線（札幌国道）の北東 500 m に位置する（巻首図版 1，図版 1，2）。南西には藻岩山，円山から手稲山まで連なる西南部山地が見渡せ，東に札幌扇状地，北西に発寒川扇状地をひかえている。

本遺跡は，琴似川扇状地の末端にあって，地形は，河川運搬堆積物からなる沖積低地である。この琴似川水系は，流域面積も狭く，水量も小さいが，みごとな扇状堆積物と，その異相が発達している。即ち，前者は，円山公園をのせる高位面で，後者は，前者の堆積物の異相で，豊平川運搬物も，かなり混入している可能性がある。表層は腐植の少ない埴土からなり，下層は壤土である。本遺跡は，この後者の層にのっている（小山内・杉本・北川1956）。

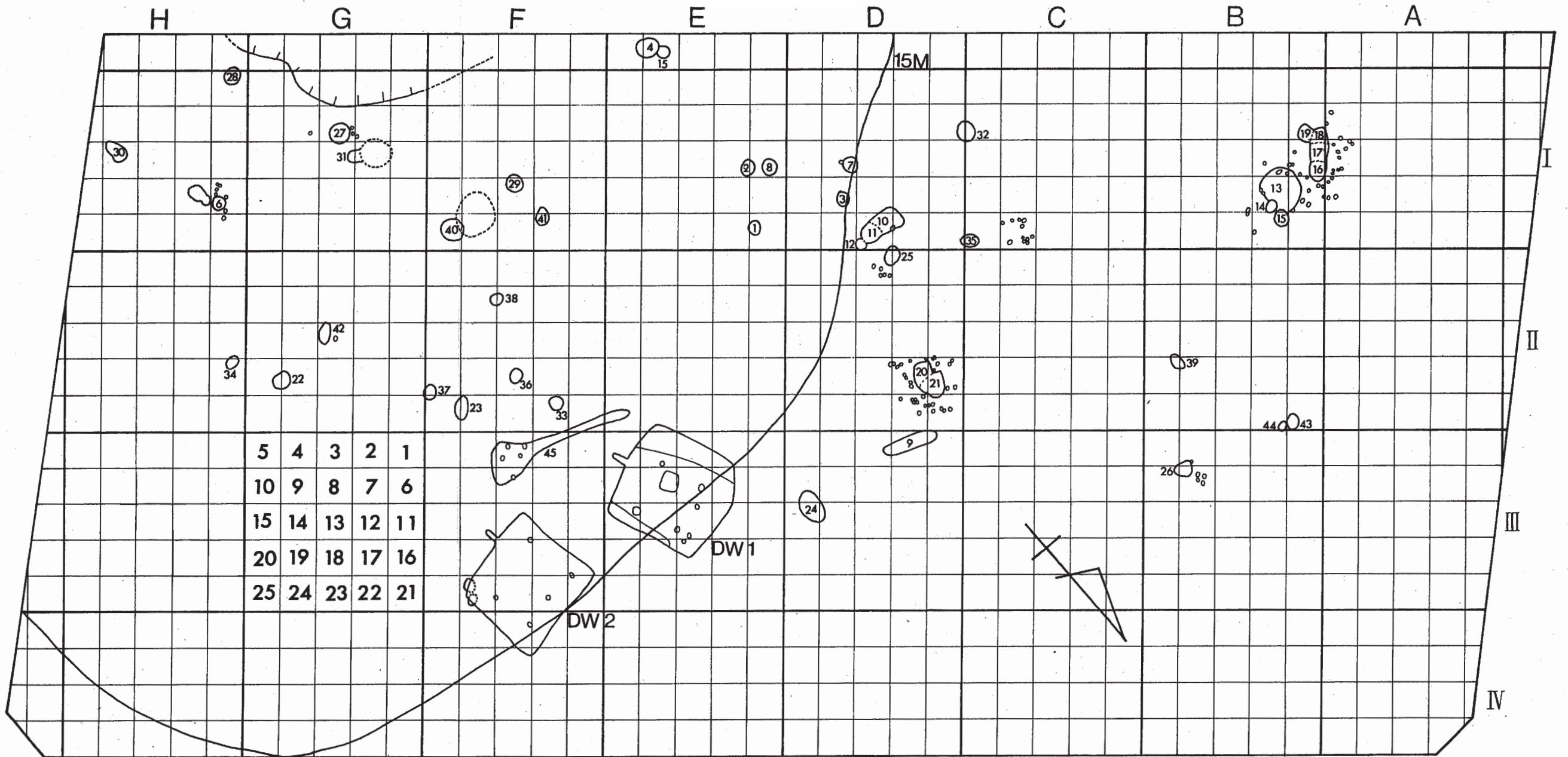
本遺跡の南東 300 m には，琴似川が流れ，遺跡の南東部には（4 m のコンタラインで示される）浅い小谷が入っている。この小谷に向って極めて，なだらかに下る傾斜面に本遺跡は，営なまれたものである。

所謂琴似川は，源を藻岩山麓（ハチャムエブイ，モイワ山）に発して，十二軒沢を流れるケネウシベツ川（ハンノキの川），ヨコウシベツ川（不詳），シセクシュコトネイ川（前を流れるコトニ川）などの札幌及び発寒の両扇状地の低い裾合に浸出する細流をみつめて，小きざみに蛇行して低湿地をゆるやかに北流し，旧篠路村に至って，伏籠川（フシコサッポロ川）に合流し，石狩川に流れ込んでいる。この川は，かつては重要な交通路で，丸木舟を使って旧篠路村の中島（創成川沿）付近まで，米味噌を運搬したものという（札幌市史編集委員会1958）。

本遺跡のある琴似二十四軒及びその周辺には，既知の現地確認されている遺跡だけでも約16カ所あり，『琴似町史』などによると，これ以外に，約6カ所の遺跡がある（札幌市史編集委員会 1956，岩崎・宇田川・河野・西野 1963）。これらは，琴似川—発寒川複合扇状地上に立地するもので，現地確認されているものに，N154（巻首図版 2），N157，N311，N170（共に同 3），N169（同 4），N167（同 5），N168（同 6），N158（同 7），N23（同 8），N165（同 9），N160，N161（共に同 10），N166（同11），N155（同12），N163（同13）の諸遺跡がある。おおむね，統繩文時代後半～擦文時代にかけての遺跡である。この内，N160，N161，N163 の遺跡は，本遺跡と隣接し，その一部をなす可能性もある。（上野秀一）



第1図 遺跡地形図



第2図 遺跡発掘区配置図およびピット関連図 (1:200)

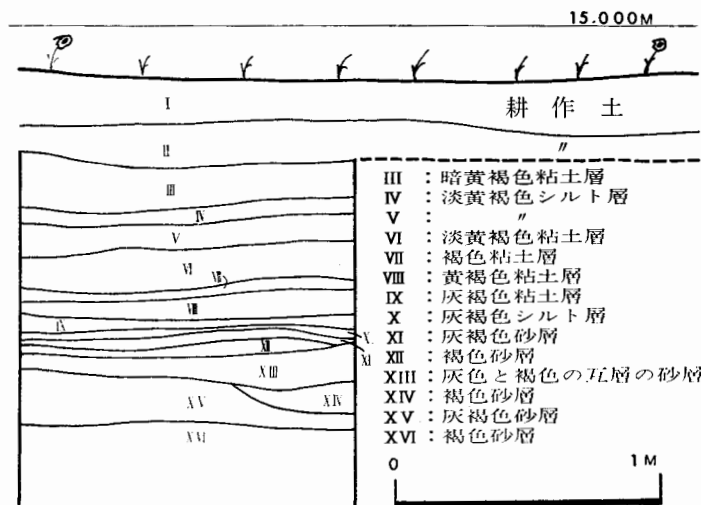
(註) 数字は、ピット番号を示している。DWとは、竪穴住居跡である。

第3章 発掘調査の方法と層序

今回の調査は、日商岩井琴似マンション建設に伴う緊急調査で、敷地が平行四辺形に長いので、調査面積は、北西—南東に長く80.7×40mの約3,300m²であった。

発掘区設定は、原則として10×10mの大グリッド方式を採用し、西側隅を基点として、北東側をO～Ⅳ区、南東側をA～H区とした。これを更に2×2mの小グリッドに分割した。小グリッドの呼び方は、第2図に示した通りである。発掘は当初、市松状に進めたが、小さな遺構が全面に亘っているため、全面発掘をした。

本遺跡は、かつて畑地であったため、包含層は耕作による攪乱が入っている。遺構確認面は、すべて暗黄褐色粘土層である。遺跡内の現地地表下16.26mまでのボーリング調査では、大きく沖積層と洪積層に分けられ、沖積層は、深さ2.70m迄で、大きく3つに分けられる。即ち、表土(暗褐色)(0～-0.4m)、火山灰質粘土(茶褐色)(-0.4～-2.1m)、細砂(茶褐色)(-2.1～-2.7m)である。洪積層は-2.7m以下で、青灰色シルト(-2.7～-4.6m)、暗青灰色シルト(微細砂)(-4.6～-6.2m)、茶褐色砂礫(-6.2～)に大別出来るという(東京ソイルリーチ1973)。第3図に示したのが、本遺跡の東西セクションである。第Ⅰ、Ⅱ層は耕作土、第Ⅲ～Ⅹ層迄は粘土ないしシルト層で、第Ⅺ層以下は灰褐色と褐色の砂層の互層となる。遺構掘り込み層は、おおむね、第Ⅲ層から第Ⅹ層であるが、遺跡の北西部は、これらの層が浅く、直ぐ砂層に至る地点もあり、遺構底面に砂層が顔を出している。(上野秀一)



第3図 標準セクション図

第4章 遺構及び出土遺物

本遺跡からは、三軒の住居跡と44個のピットが発見されている。以下、それらについて個々に説明していく。

第1節 住居跡

住居跡は、ピット群より少し離れた、遺跡の北東部に二軒並んで発見されている（図版2A）。

第1号竪穴住居跡（第4図，図版2B）

本住居跡は、耕作土及び漸移層除去の後、暗黄褐色粘土層上面にその隅丸方形の輪郭が確認された。

本住居跡は、改築が行なわれたと思われる痕跡が認められ、西壁付近は一段高くテラス状に張り出し、この面と対応する貼床の存在が確認されている。

埋没状況を、層序にて観察すると明確に2枚の床面の新旧関係がとらえられる。

一段高い床面をもつ改築された住居跡を仮に「A竪穴」、改築前の床面をもつ住居跡を「B竪穴」と仮称して以下説明を加えていく。

A 竪穴

規模は、東側壁にて5.7m、北側壁にて5.5mとなり、隅丸方形をなす。壁面は、かたくしまり、後述する一部掘り込まれたピット部分を除いて直立に近い。床面よりの高さは、南側壁にて25cm、西側壁にて26cmとなる。

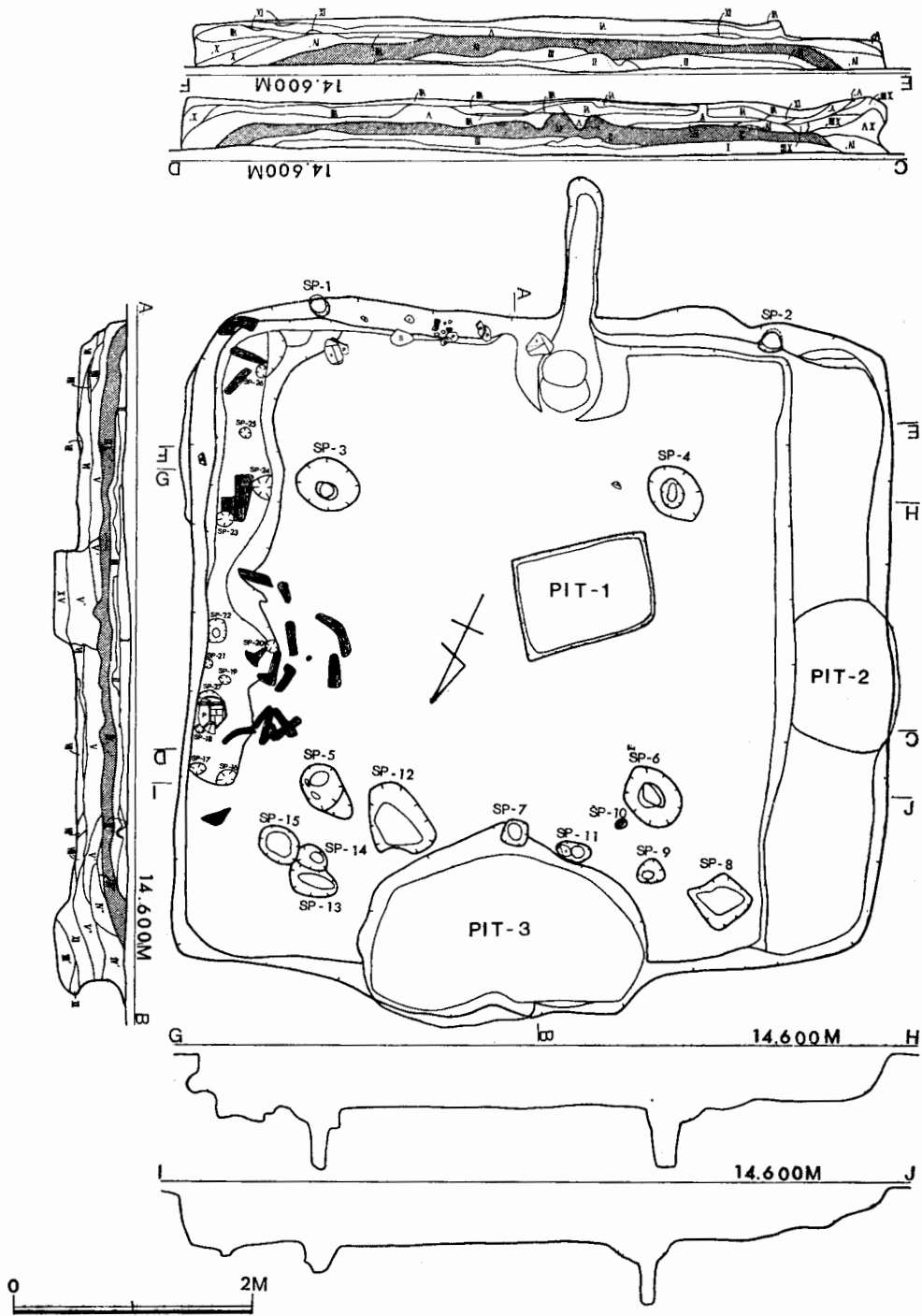
柱穴は、B竪穴の床面を確認した段階にて発見される。竪穴のコーナー部に1個ずつ計4個の支柱穴がみられ、かまどを有する南側壁に1対の斜めに掘り込まれた柱穴がみられる。他に東側壁附近の床面、北側壁附近の床面に規則的な配列はみられないが柱穴状の小ピットが十数個認められている（第1表）。A竪穴の床面は、B竪穴をうめたて貼床としているためA竪穴の床面での柱穴の確認はできなかった。前述した4個の支柱穴の断面を見ると2段になって掘り込まれており、2度におたって同一の柱穴を使用したとも考えられる。

貼り床を覆って焼土が厚く堆積している部分が広範囲におたって見られ、壁附近には炭化した木材がかたまっている。これらより見て、火災にあったか、意図的に焼いたかのどちらかが推測されよう（図版4B）。

遺物の出土数は多く、貼床上面に特に集中しており、壁直下には特に多いと云える。

B 竪穴

規模は西側壁にて5.0m、南側壁にて4.8mを計る。形は北側壁、東側壁がA竪穴構築のため明確にされていないが、隅丸方形をなしていたと推定される。床面より壁の高さは、西側壁にてA竪



第4图 第1号竖穴住居跡実测图

し穴床面まで 10 cm となり、東側壁に至っては遺構確認面まで 35 cm となる。壁の状態は、かたくまっっており、ほぼ直立に近く床面へと至る。床面は、平坦であり固い。東側壁際には壁に沿って 50 cm 程の幅で浅い掘り込みがみられる。

柱穴の状態は前記した。主柱穴で直径 40 cm 前後、深さは床面より 25 cm～55 cm である。北側壁附近、東側壁附近にて計 19 個の柱穴状小ピットが発見されている。直径 20 cm 内外で、深さも床面より 10 cm 程度である。殆んどが床面よりまっすぐ掘り込まれている（第 1 表）。

遺物は、B 堅穴床面を覆う人為的に埋めもどした地層中には全く見られず床面にも全く認められない。

まず、A 堅穴の埋没状況を層序にて見ると以下の様な堆積を示す。

第 I 層；耕作土

第 II 層；黄色の砂

第 III 層；粒子は細かく、白色火山灰が混入する黒色土。

第 IV、IV'、IV'' 層；黒色土。IV' 層は茶褐色土の混入がみられ、IV'' 層は灰褐色粘質土の混入がみられる。

第 V 層；A 堅穴の床面全体を覆う層である。木炭、黒色土が混入している茶褐色土で部分によっては、赤褐色を呈する所もみられるが同一の層としてとらえられる。

第 VIII、VIII' 層；焼土である。VIII' 層は、炭化物を含んでいる。

第 IX 層；炭化した木材である。

第 X、X' 層；黒色土混入の赤褐色土。X' 層は若干暗い色を呈する。

A 堅穴の床面は、A—B セクションをみると第 V 層、第 VIII' 層の下面、C—D セクションでは第 V 層、第 VIII 層、第 VIII' 層の下面、E—F セクションでは第 V 層の下面となる。

B 堅穴の埋没状況は、

第 VI、VI' 層；黒色土混入の黄褐色粘質土で、VI' 層は、若干暗い色となる。

第 VII 層；黄褐色粘質土混入の黒褐色土である。

B 堅穴に堆積した土は、非常にかたく明らかに A 堅穴の貼り床として踏みかためられたことを物語っている。

A・B 堅穴共、主軸は N157° E である。

北側壁と西側壁に、床面より壁に向けて、ピット 2 と 3 が掘られている。壁がオーバーハングする事と相まって非常に複雑な埋没状況を示す。ピット 2 に関しては、堆積している層は、A 堅穴を埋没させた土の流れ込みと思われ、基本的に一致した層がみられる。従ってこのピットは明確に A 堅穴に伴うと解される。しかし、ピット 3 は、坑底面に A 堅穴の覆土の流れ込みが認められず、B 堅穴に伴った可能性が高い。これらのピットの覆土、坑底面からは、土器片が若干得られている。

これらピットの性格としては、貯蔵穴、B 堅穴を埋めもどした際の粘土採掘ピット等が考えられよう。

埋没状況は、

第V', V''層;共にA堅穴床面を覆っている第V層の流入と考えられ、同様の状態を呈する。

V'層は、灰白色粘質土と黄褐色粘質土の混入がみられ、V''層は非常にやわらかい。

第XI層;炭化物を含む灰色粘質土。

第XII, XII'層;炭化物混入の黄褐色土。XII'層は炭化物の混入が認められない。

第XIII, XIII', XIII''層;灰色粘質土と黄褐色土が混り合っている層である。XIII'層には、炭化物が含まれる。XIII''層は炭化物が含まれずやわらかい層となる。

第XIV層;炭化物が含まれる茶褐色土である。

B堅穴床面中央に方形をなすピット1がある。層序によって埋没状況をみると、壙底部には、第XV層;炭化粒を含んだ褐色粘質土と黄色土が混り合った層がつまっている。その上に第V', V''層が堆積している。本ピットは、A堅穴の床面上に厚く堆積した第V層上面より掘り込まれ、B堅穴床面を10cm程掘り抜いて作られている。以上の事から、これらのピットの掘り込まれた時期は、A堅穴が廃棄されてから若干遅れた時期である事が判る。

A-Bセクションにてみると、壁は直立に近く、壙底面は、ほぼ平坦となり固くしまっている。遺物は、壙底面には一切みられない。(羽賀 憲二)

14C年代について

第1号堅穴住居跡A堅穴 第IX層の炭化材 1050 ± 60 B.P. (A.D. 600) (GaK-5027)

第2号堅穴住居跡床面採取の木炭 810 ± 135 B.P. (A.D. 1140) (GaK-5028)

第1表

第1号堅穴住居跡柱穴一覧表

ピット 番号	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	ピット 番号	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	ピット 番号	長径×短径 (cm)	深さ (cm)
SP-1	16 × 14	40	SP-10	10 × 8	16	SP-19	10 × 8	
2	20 × 18		11	30 × 18		20	14 × 10	
3	55 × 43	50	12	65 × 50		21	8 × 7	
4	50 × 40	50	13	40 × 30		22	20 × 15	
5	55(40) × 35	20	14	30 × 20		23	14 × 13	
6	55 × 40	53	15	40 × 28		24	20 × 17	
7	25 × 23		16	18 × 13		25	10 × 10	
8	55 × 50		17	15 × 9		26	11 × 13	
9	24 × 20	12	18	8 × 8		27	20 × 20	

E 14.600M F

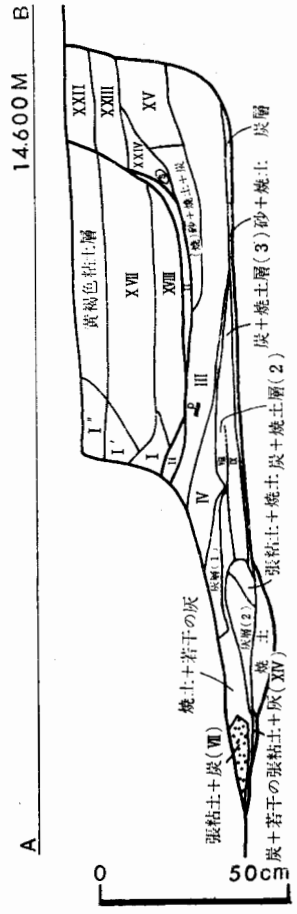
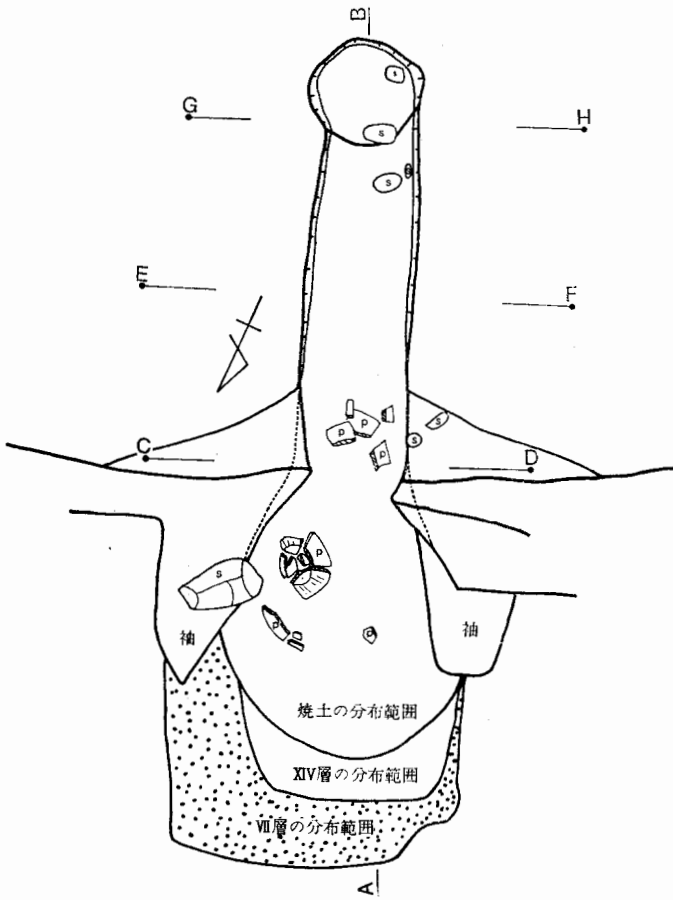
I* 淡黄褐色粘土層 (XVII)
 II 褐色シルト層 (XVIII)
 III (iii) 炭+焼土層 (I)
 IV 焼土+粘土塊 (II)(IV)
 VII+IX

C 14.600M D

暗黄褐色粘土層 (I*)
 暗黒褐色粘土層 (I')
 暗赤褐色粘土層 (II)+焼土層
 III 多くの焼土+若干の炭
 IV 焼土+所によりしまつた粘土塊 (IV)(焼けている)
 VII+IX XVI (多くの炭+若干の焼土)

G 14.600M H

(XXII) 粘土(二次堆積)
 (XXIII) 粘土(同上)+炭
 (XV) (暗)灰+炭
 XVI 黄褐砂+若干の炭
 (XXIV) 炭+焼土+粘土



第5図 第1号竪穴住居跡カマト実測図

カマドについて（第5図，図版3A，B）

住居跡の南（南東）壁にあり，中央より12cm西に偏してある。煙道の方位はN161°Eで，住居跡の主軸方向より4°西に振れている。焚口の東西（右左）には，粘土のソデが認められる。東袖には大きな石を1個置いて補強している。このカマドは，2度に亘って利用されたく，焚口の層堆積をみると下から，「焼土」→「灰層(2)」→「焼土+若干の灰」→「灰層(1)」の順で堆積している。下位の焼土は，その分布範囲は狭いが，上位の「焼土+若干の灰」層は幅広くある。第Ⅳ層（「炭+若干の張粘土+灰」層）は，下位の焼土と灰に伴う，カマド周辺の補強のための粘土張りである。第Ⅶ層（「張粘土+炭」層）は，上位の焼土と灰層(1)に伴うものである。Ⅶ層の方が幅広く補強している。焚口の北東寄りには，土器の底部を逆にした支脚がみつまっている（第13図11）。煙道の長さは115cmで，略水平に近く非常にゆるく煙道に向って高くなる程度である。粘土層上面からの深さは41cmである。煙道は，地山をトンネル状に掘り込んで作ったものである。焚口付近は，加熱と煙のため赤黒く変色している。E-Fセクションで見ると煙道の大きさは幅23cm，高さ15cmで不整形長方形である。開口部は幅28cm，高さ18cmで，やはり丸味を帯びた長方形である。煙道内は，焼土+炭+焼けた粘土塊で充填されている。煙出口は，30×27cmの略円形である。

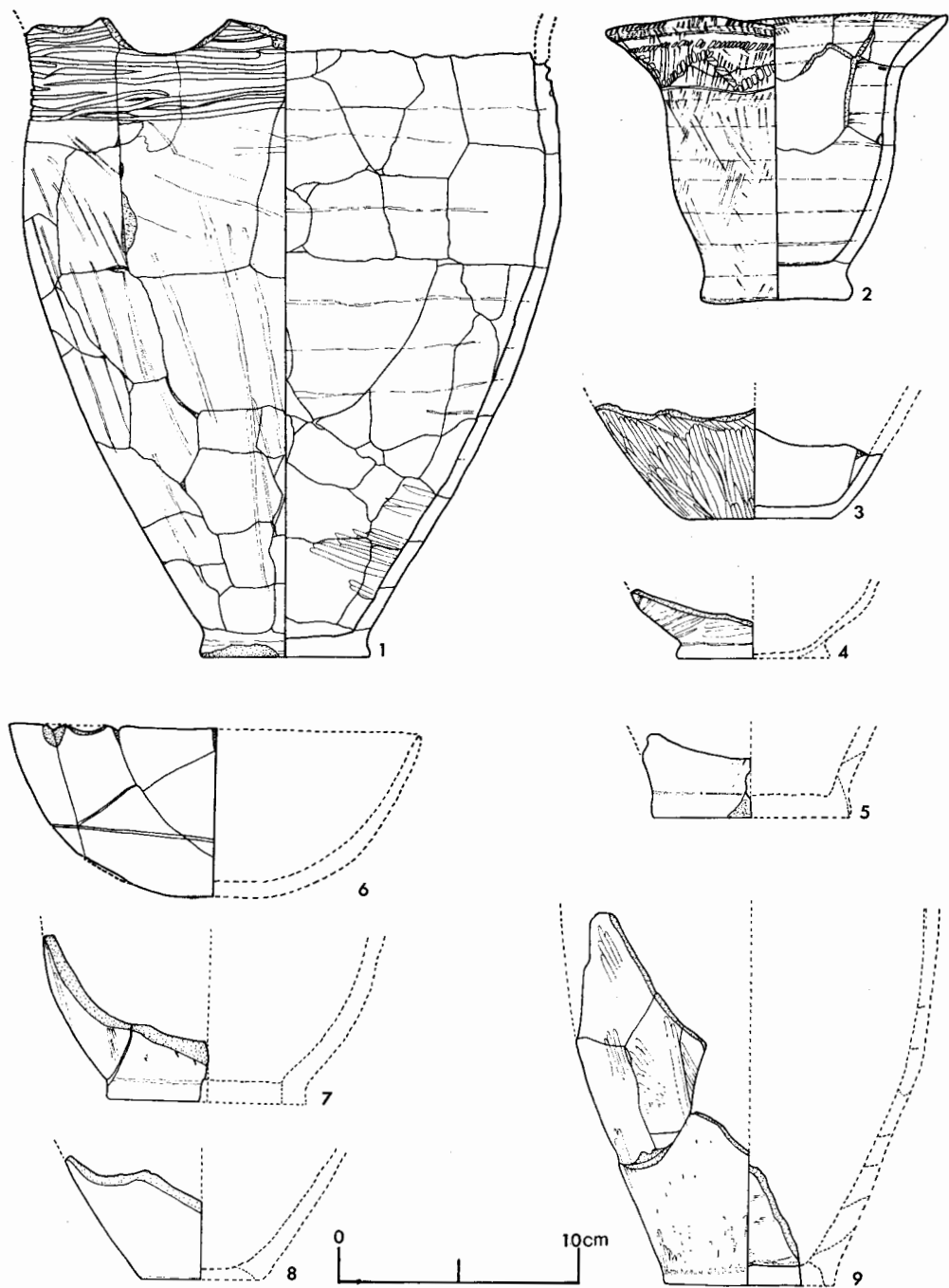
煙道入口には，土器が少し集積しており，煙出口付近には河原石が，幾つか認められた。

上位の焼土と灰は，A堅穴に，下位のものはB堅穴に符合するものと思われ，二回に亘って同一カマドが用いられた事が判る。（上野 秀一）

遺物（第6～10図，図版5，6A，20A，B）

〈A堅穴床面出土遺物〉

第6図1，2は，第1号堅穴住居跡A堅穴床面から出土した（図版4A，B），ほぼ完形の土器である。両者はセットとして捉えうる。1は，口唇部を欠損しており，現存高は26.7cmで，胴部における最大径は22.3cmである。底径は7.0cm。底は平底で少し張り出しがあり，笹の葉の跡がある。底から胴部にかけて，次第に大きくなり，最大径は胴上部にある。口縁部は，少しくびれ，大きく外湾する甕形土器と思われる。口径の割に，底径は極めて小さかったものと思われる。口縁部には横走る，少し幅広の連続沈線文がある。この沈線文は，まだ器面が軟らかい時点で付されたものと思われ，施工後，再度滑らかに整形している。器面も，篋で整形した後，再度滑らかに調整している。内面も同様である。内面は，輪積の跡が残っており，一単元の幅は1.3～1.9cmである。焼成はよく，色調は器内外明褐色である。器厚は，6.5～7mmである。2は，器高12cm，口径14.25cm，底径6.0cmの甕形土器で，軽く胴張りし，口縁部が大きく外湾している。底は，平底で張り出しがある。口唇部は，ほぼ平坦に整形し，その上と口唇部の器内外直下に，刻文を施している。ただし，器内の刻文は局部的である。地文として擦痕が，外には縦・斜，内には横に施されている。器外の方が顕著で，器内のは，はっきりしない。口縁部には，篋状工具による連続刺突文が



第6图 第1号竖穴住居跡出土土器实测图

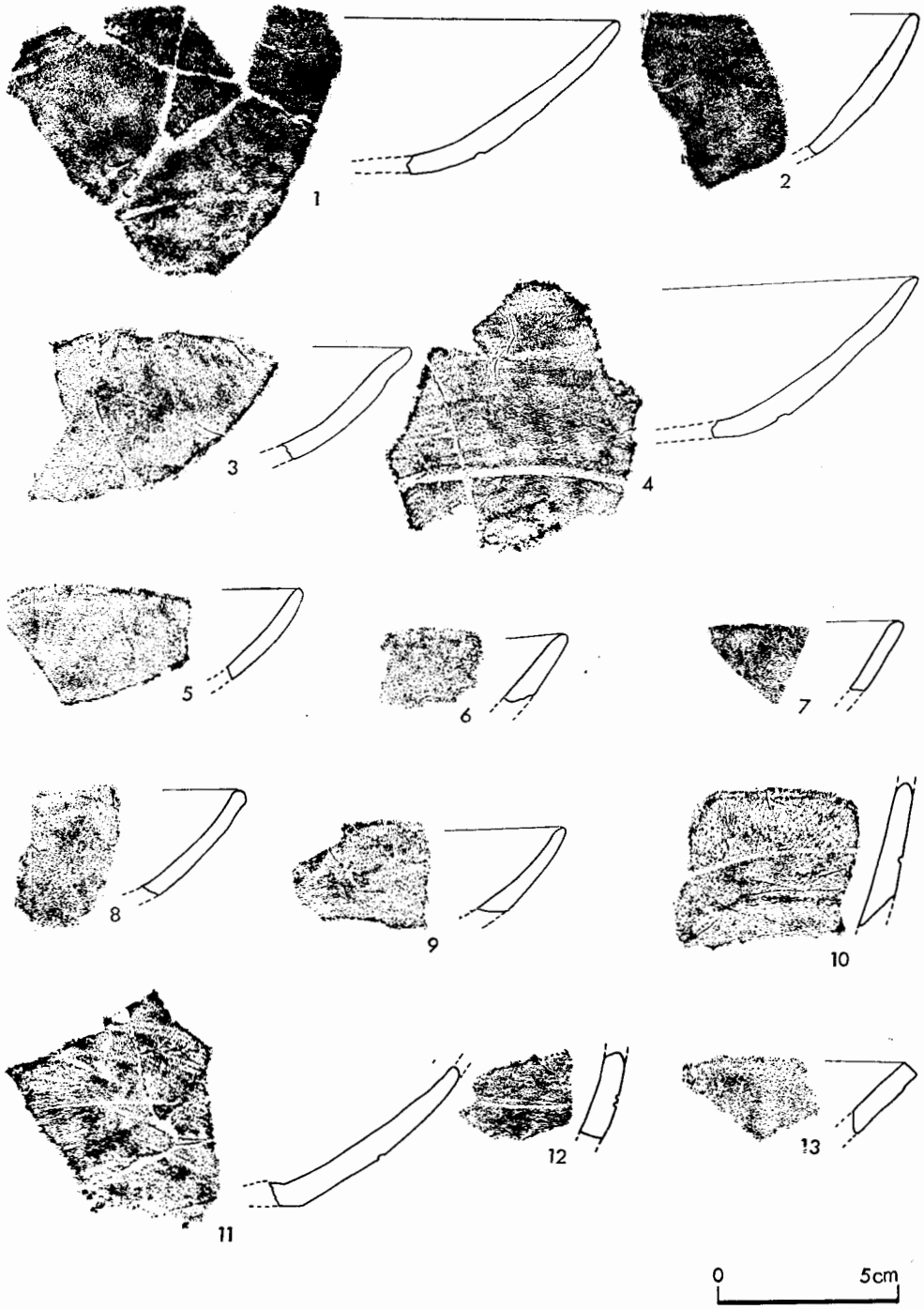
鋸歯状に施され、その上にも区画するように同様の連続刺突文が横還する。下部は、浅い沈線文が巡り区画されている。胴部には輪積み痕が残り、その単元の幅は、8mm内外である。色調は暗茶褐色を呈し、器厚は5～6mmである。

〈A 堅穴覆土出土遺物〉

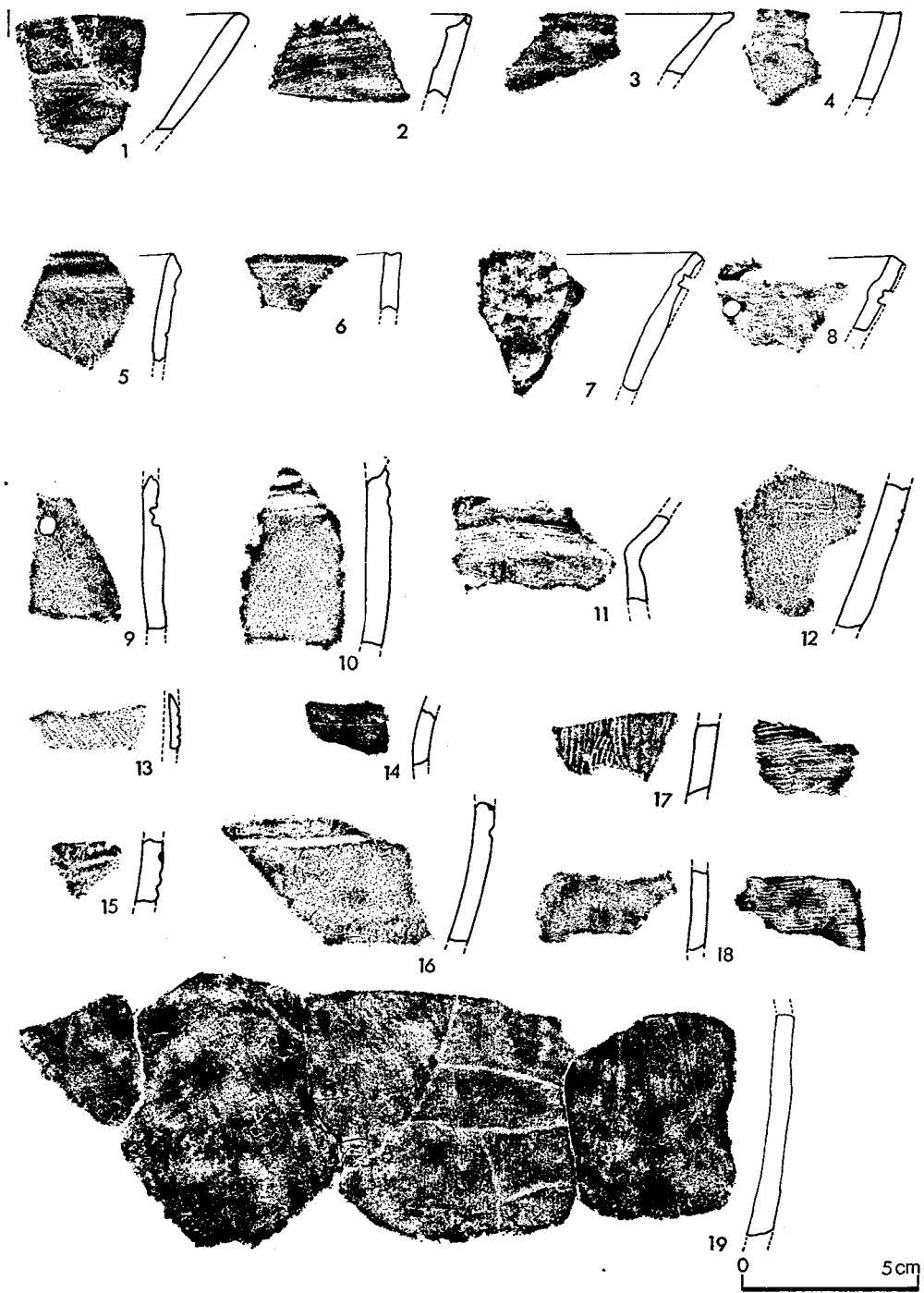
第6図3, 4, 6, 8は、浅鉢形土器の底部と思われるもので、共に平底である。3は焼成はよく、器外及び底部は筧できれいに整形し光沢がある。内面は、滑らかに整形してある。器内の底のみ内黒で、あとは灰褐色を呈している。器厚は4～5.5mmである。8は、内黒で器外は暗灰色を呈している。器厚4mm前後。器内外共、きれいに整形している。6は、半完形土器である。器内外黒色を呈し、器高は7.1cm、推定口径17cm、推定底径5.8cmである。胴中央に一条の浅く、細い沈線が巡る。器厚は3～7mmである。4は、内黒で、器外は褐色を呈している。底部は、強い張り出しがあり、器外は筧で整形している。器厚は4mm前後。

第6図5, 7, 9, 第13図11～13は甕形土器の底部片である。すべて平底である。5は、張り出しがあり、焼成はもろく全体に風化している。器厚は、6mm土である。7は、少し張り出しがあり底部直上で大きく広がる器形である。器内面には、横走る擦痕が局部的に観察される。色調は明褐色で、全体に風化している。器厚は7mm土である。9は、かなり大きい破片で、軽い張り出しがあって、地文は、外は縦、内は横の擦痕を施し、その後、外は筧で整形している。内は少し風化しているが、軽く整形している。輪積みの幅は1.7～2.0cm程度かと思われる。色調は、灰褐色を呈し、器厚は6mm土である。底には筧の葉の跡がある。第13図11～13は、カマドから出土した甕形土器である。11は、底部には少し張り出しがあり、胴部は外は縦の擦痕を施文後、筧による整形を行っている。内は、横の擦痕を施し、その後、局部的に指頭ですり消し滑らかに整形している。加熱のため、赤褐色を呈する部分もあるが、全体に灰褐色である。器厚は5mm土である。輪積みの幅は1.2～1.7cm位と思われる。12は、張り出しは殆んどないが、軽く器内外を調整し、色調は、11と同様である。13は、底を欠くが、張り出しがある。調整・色調は11と同じである。

第7図1～12に示したものは、坏の破片である。1は、胴部中央より若干下に浅い比較的幅広の沈線が巡る。口唇部直下には、浅く細い沈線様のものが巡る。平底と思われる。裏面は、比較的研磨され、表面も少し研磨しているが風化している。色は灰褐色。2は、少し内湾気味で、背の高い坏か浅鉢の可能性もある。裏面は、よく黒色に研磨されている。表面は灰褐色。3は、口唇部直下で少しくびれがあり、少し外湾する器形で滑らかなには研磨されていない。比較的焼成はよく、褐色を呈する。4は、胴中央部より少し下部に幅広の浅い沈線文が巡り、口唇部は急に細くなっている。研磨、色調は1と同様である。5は、少し内湾気味の破片で、薄手である。裏面は黒く、よく研磨しており表面も口唇部直下は黒くよく研磨している。色は、表面暗灰褐色。6は、内黒でよく研磨されている。表は黒褐色。7も、5と同様薄手で、内黒、表面黒褐色。8は、焼成はあまりよくはなく、色は表裏共明褐色である。9も明褐色を呈するが、裏に顕著な横に走る擦痕があり、表にも若干ある。10は、胴部片で一条の狭い鋭い沈線が横走る。色は明褐色。裏面は若干研磨してい



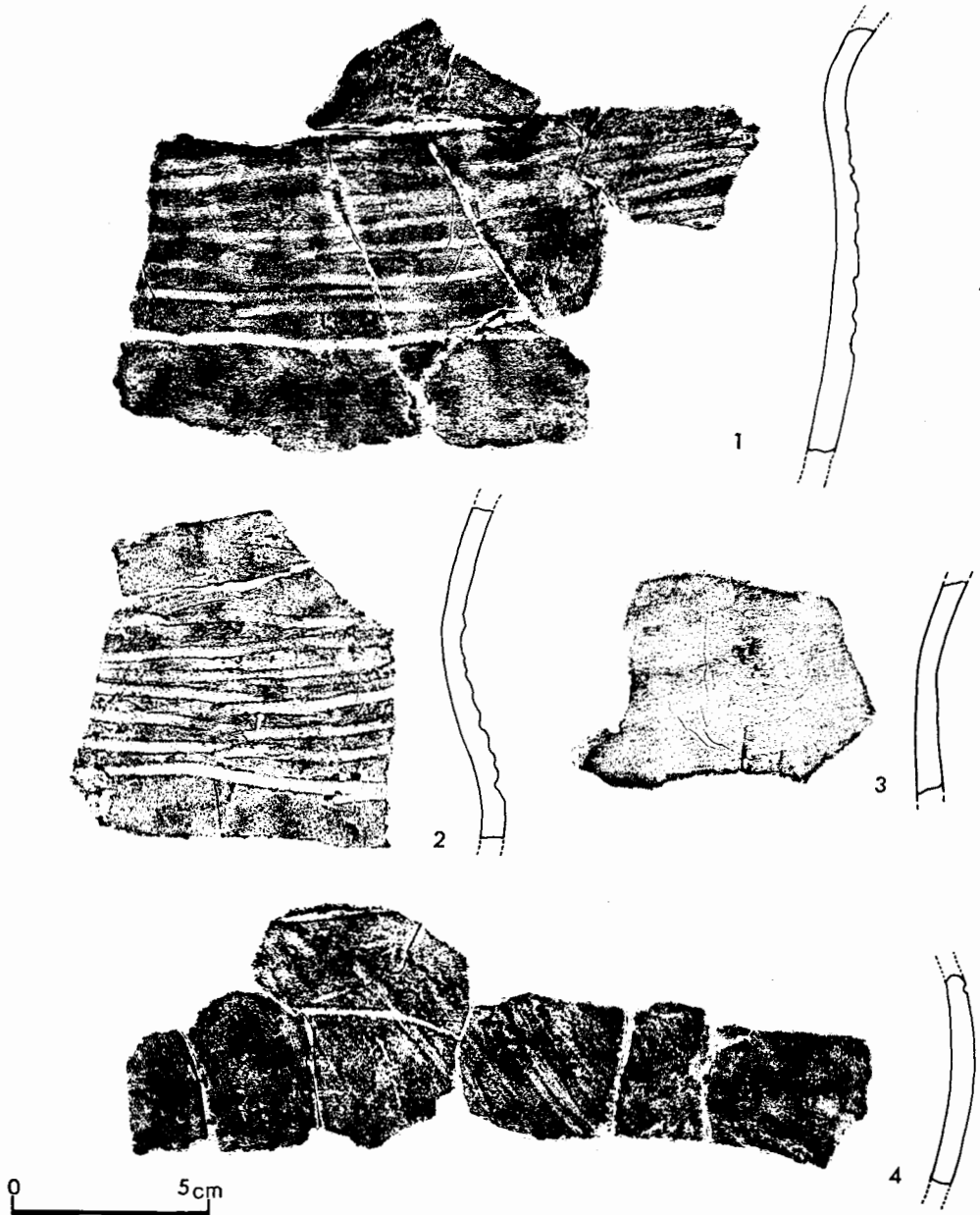
第7图 第1号竖穴住居跡出土土器拓影(1)



第 8 图 第 1 号竖穴住居跡出土土器拓影(2)

る。11は、(第8図1と同様で)胴部～底部片で細く浅い沈線が一条巡る。焼成はよく、表裏とも篋でよく整形されている。裏面は少し暗(赤)褐色を呈し、光沢をもつ。表は、褐色である。12は、胴部片で、浅い一条の沈線が巡る。研磨はされていない。色は、灰褐色。13は、浅鉢か壺の破片と思われ、口唇部は平らに整形されている。色は、明褐色。

第8図1は、杯の口縁部破片と思われるもので、焼成はよく赤褐色を呈し、表面は篋整形が顕著

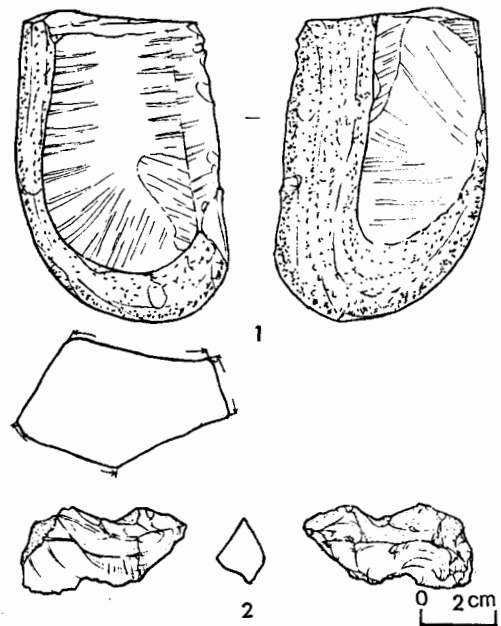


第9図 第1号竪穴住居跡出土土器拓影(9)

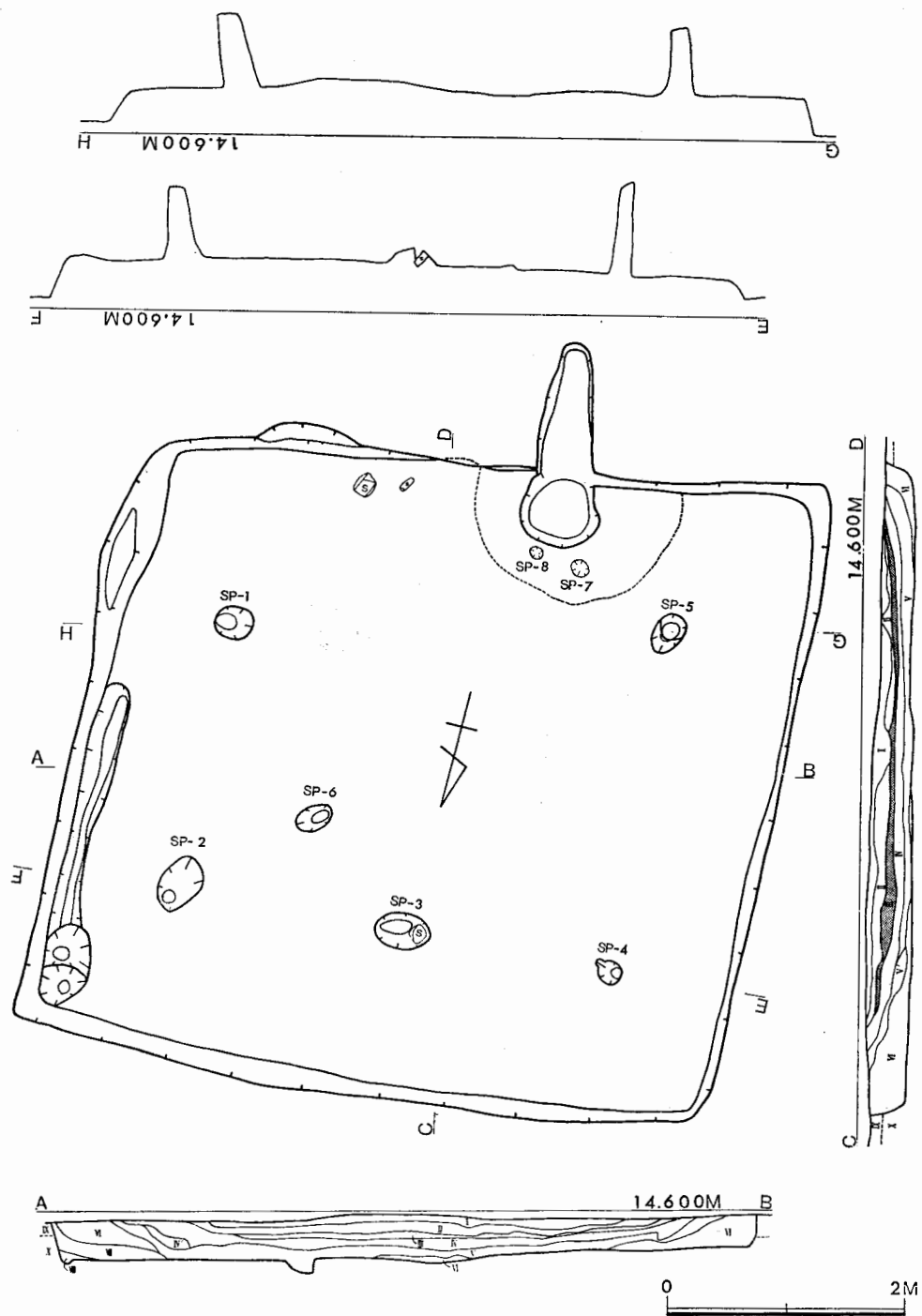
である。2は、深鉢の口縁部破片で、口唇部は（斜めに）平坦に整形され、刻目がある。色調褐色。3は、壺か深鉢の口唇部破片で外湾気味である。口唇部は（斜めに）平坦に整形されている。色調は、暗黄褐色。4は、浅鉢の破片と思われる。若干内湾気味である。口唇部は平坦に整形している。色調、（暗）黒褐色。5は、浅鉢の破片かと思われ、心もち外湾する。口唇部直下に肥厚帯がつき、鋭い工具で施文した刻文（沈線文）がある。色は、黒褐色。6は、浅鉢か深鉢の口縁部破片で、やはり口唇部は、平坦に整形している。色は黒褐色。7は、心持ち外湾気味の口縁部破片で、口唇部は平坦である。表面は剥脱しているが、竹管状工具に抛る円形刺突文がある。色は黒褐色。8も、7と同様の破片である。9も、7と同様で、口唇部を欠く。10は、深鉢の胴部破片と思われ、上端には、幅広く深い横走の平行沈線文がある。色は暗灰褐色。11は、壺の口縁部のくびれ部分の破片かと思われ、胴張りし大きく外湾する傾向がある。色は、暗褐色。12は、胴部片であるが、表面に鋭い工具による刻文（沈線文）がある。色は、暗灰褐色。13は、裏面は剥脱しているが、表面に横、斜方向の刻文がある。黒褐色。14は、胴部小片で少し外湾気味である。細い刻文様のものが不規則に横走している。焼成はよく褐色。15は、三角形列点文と横走繩文の組み合わさった続繩文時代の土器（後北C2式）である。色は灰褐色。16は、胴部片で、風化しているが、上部に横走沈線と三角形列点文がある。色は、明褐色。17、18は胴部片で、表面は縦の、裏面は横の擦痕がある。その上を表裏共、指頭か何かで再度整形している。17は、灰褐色、18は暗灰褐色である。19は、深鉢形土器の大きな胴部破片で、縦方向の篋による整形が走る。色は暗褐色。

第9図1は、深鉢形土器の大きな破片で胴張りし、口縁部近くに至って少し外湾する。くびれ部分には、浅い幅広い平行沈線が横走する。色は褐色。2も、1と同様の器形と平行沈線文がある。ただ沈線文は1より明瞭である。7条を数える。色は暗灰褐色である。3も、同様の器形で、表裏に横走の擦痕があり、その後よく研磨している。色は褐色である。4は、深鉢の口縁部文様帯直下の破片で、少し胴張り気味である。上端には横走沈線文がある。表には縦方向の篋整形がある。色は褐色。

第10図1は、砥石で、表裏と一側縁を利用している。砥石面は、すべてコンケーブしている。2は、扁平石核と思われ、最終剥離は扇状剥片である。
（上野 秀一）



第10図 第1号竪穴住居跡出土石器実測図



第11图 第2号竖穴住居跡実測图

第2号竪穴住居跡 (第11図, 図版6B)

第1号住居跡の東約3mに位置する。大きさは、東壁5.07m、西壁5.53m、南壁5.70m、北壁5.80mを算する略方形プランを呈する。カマドは、南壁中央部よりやや西に構築されている。主軸はN176°Eである。

住居跡の確認は、深さ約25cmの耕作土(第1層)を除去して黄褐色粘土層に至って始めて確認される。住居跡内覆土の状態は、平均的には上層より次の如くである。第Ⅰ層茶褐色土、第Ⅱ層暗褐色土、第Ⅲ層黒色土、第Ⅳ層暗黒褐色土、第Ⅴ層黒褐色土、第Ⅵ層褐色土となる。南北セクション北側では、第Ⅴ層と第Ⅵ層とが漸移的な変化を示しているため、これを第Ⅴ'層暗褐色土とした。東西セクション東側においても第Ⅳ層と第Ⅴ層とに一部漸移的な変化が見られ、これを第Ⅳ'層暗黒褐色土(第Ⅳ層よりやや粒子が密である)とし、更に第Ⅵ層下部に第Ⅶ層黒褐色土が壁に沿って見られ、壁周溝の如くに床面の1部に見られる落ち込みの層を第Ⅷ層黄褐色土とした。

壁は、第Ⅵ層褐色土を除去して後、始めて確認される。一部においては、第Ⅵ層と壁の上部を形成する第Ⅸ層黄褐色粘土層との識別が困難な地点も見られた。しかし、壁の下部及び床面となる第Ⅹ層淡黄褐色砂層と第Ⅵ層とは明瞭に識別する事が出来、プランの確認そのものには支障をきたす事がなかった。

これらの層を瞥見してみると、西及び北側に特に厚く第Ⅵ層が堆積している事に大きな特徴が感じられる。これは、竪穴住居跡廃棄後の埋没過程における、風向、特に北西風の影響に依るものか、或は上屋構成(上屋に竪穴住居構築後の土捨を乗せる)により生じたものであるか等の問題について今後の調査で特に留意されなければなるまい。

現存する壁高は、東壁約33cm、西壁約27cm、南壁約32cm、北壁約32cmと、おおよそ平均した値を有している。立ち上りは、各壁とも約60°内外を示す。全体的に、非常に良好な様相を呈するが、東壁、南壁ともに南東コーナー附近に他に見られない状態を示す地点が見られた。この部位は、床面近くでは第Ⅸ層が存在し、壁を容易に確認する事が出来たが、壁上部の第Ⅸ層と第Ⅹ層との間に黒色土がレンズ状に堆積しており、黒色土内部にかなり多量の骨片と思われる粉末状の遺存体が検出された。この事実より第2号竪穴住居跡構築以前に作られた墓壇の一部を切断して東及び南壁を構築し壁をより強固にする目的で、墓壇内部上面を黄褐色粘土をもって固めたものと考えられよう。即ち、第2号竪穴住居跡は、少なくとも2基以上の墓壇を破壊して構築されたものと解される。

床面は、カマド前面では木炭及び焼土の混入した土がかなり堅緻に踏み固められており、周辺にいくに従って軟弱となり、北東にやや傾斜を示す。北東コーナーに浅い2個のピットが見られ、これに続き東壁に沿って巾約20cm~40cm、長さ2.80m、深さ10cm前後の溝が発見された。内部にはかなり軟らかい第Ⅷ層黄褐色土が充満しているのみである。

柱穴と考えられるピットは、8個発見された。そのうちP-7, 8の2個は、カマド前面にあり、カマドに附属する施設に用いられたものであろう。支柱穴は、各コーナーに偏して発見された。とりわけ深いP-1, 2, 4, 5をもって当てられよう。ともに深さ60cm以上算し、内側にやや傾

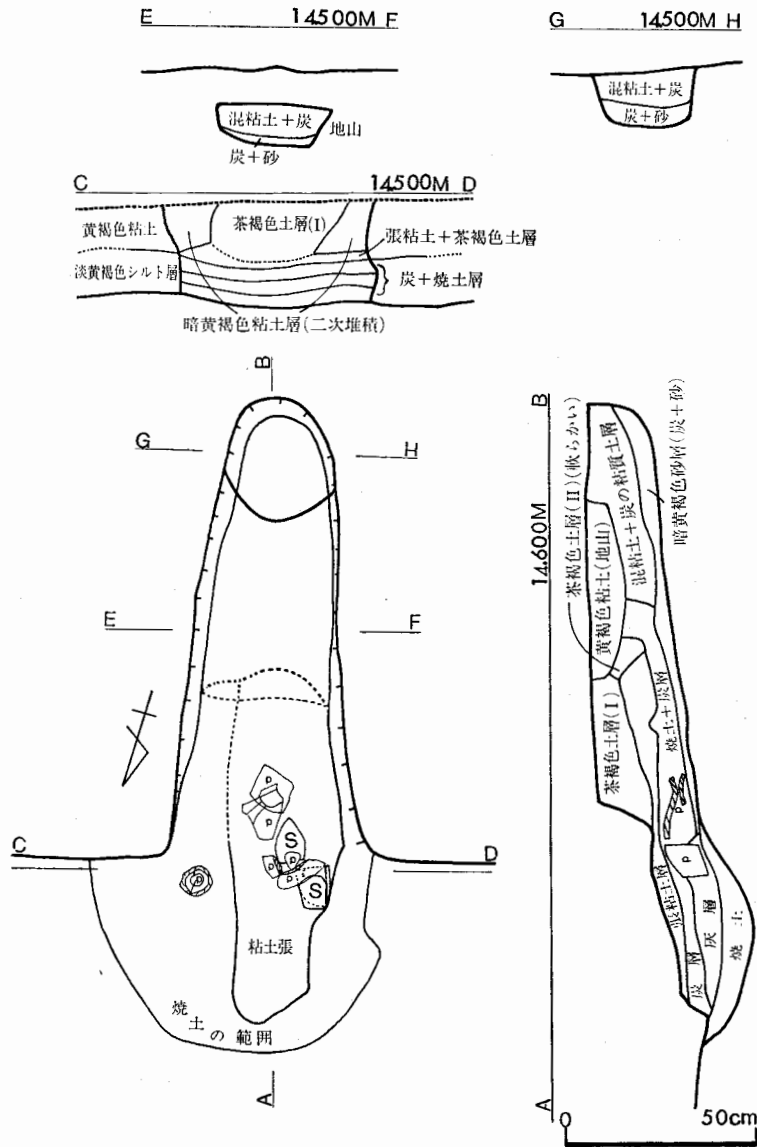
斜しているのが特徴的である。

P-3は、P-2、P-4を結ぶ直線上にあり、深さ約10cm程で内部に石が存在し、上屋構築後の補強としての支柱のために設けられた物と言えよう。P-6も同様であろうか(第2表)。

遺物は、覆土から出土したもののみで、床面からは、何ら検出されなかった。(加藤 邦雄)

第2表 第2号竪穴住居跡柱穴一覧表

ピット番号	長径×短径(cm)	深さ(cm)
SP-1	35×30	60
2	50×25	60
3	50×34	12
4	30×24	78
5	40×25	55
6	30×20	12
7	21×18.5	
8	11×9	



カマドについて

(第12図, 図版7 A, B)

住居跡の南壁, 中央より60cm西に偏した所にある。カマドの方位はN169°Eで、住居跡の主軸に対して8°東に振れて所在する。粘土で作られた袖は、明瞭には認められず、西袖部には3個の石と大きめの土器破片(第13図2)がみついている。東側からは底部土器2個(第13図4と5)が重ねて出土した。これは支脚であろうか。焚出

第12図 第2号竪穴住居跡カマド実測図

部分は少し掘り窪めてあり、その上に焼土・灰層・炭層の順で堆積している。煙道の長さは、1.2m。E-Fセクションで断面の大きさをみると、巾30cm、高さ11cmで台形である。開口部は巾55cm、高さ10cmである。

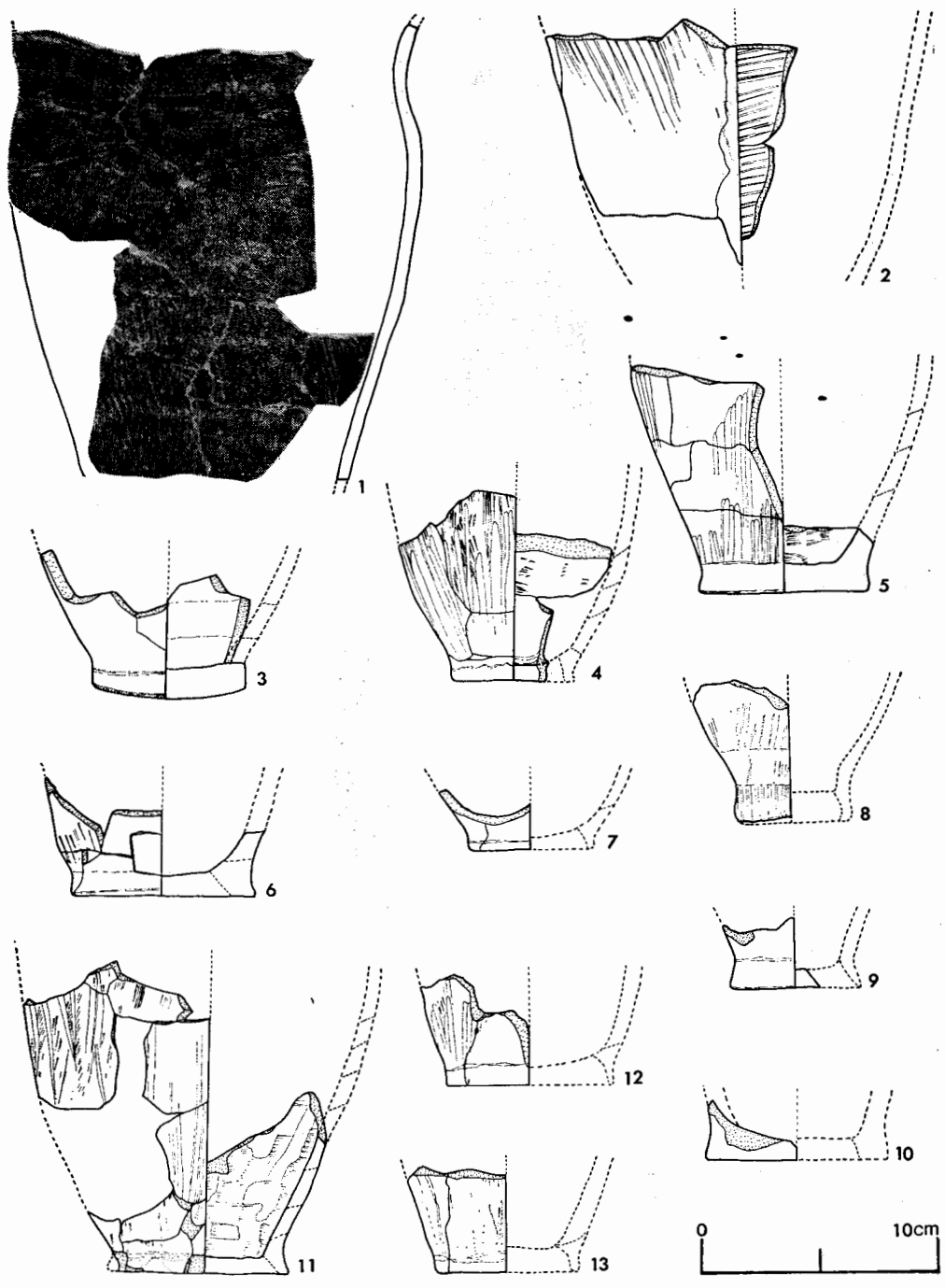
煙道内は、焼土と炭で充填されている。煙出部分は、ほぼ円形で、29×33 cmである。煙道は、ゆるい傾斜をもち、開口部から約40 cmの所迄は上から掘り込み、粘土及び茶褐色土層で埋めている。それから煙出部迄は地山をトンネル状に掘り込んで構築している。

煙道入口付近には、第13図1の土器片があった。焼土の範囲は75×60 cmでかなり固くしまっている。
(上野 秀一)

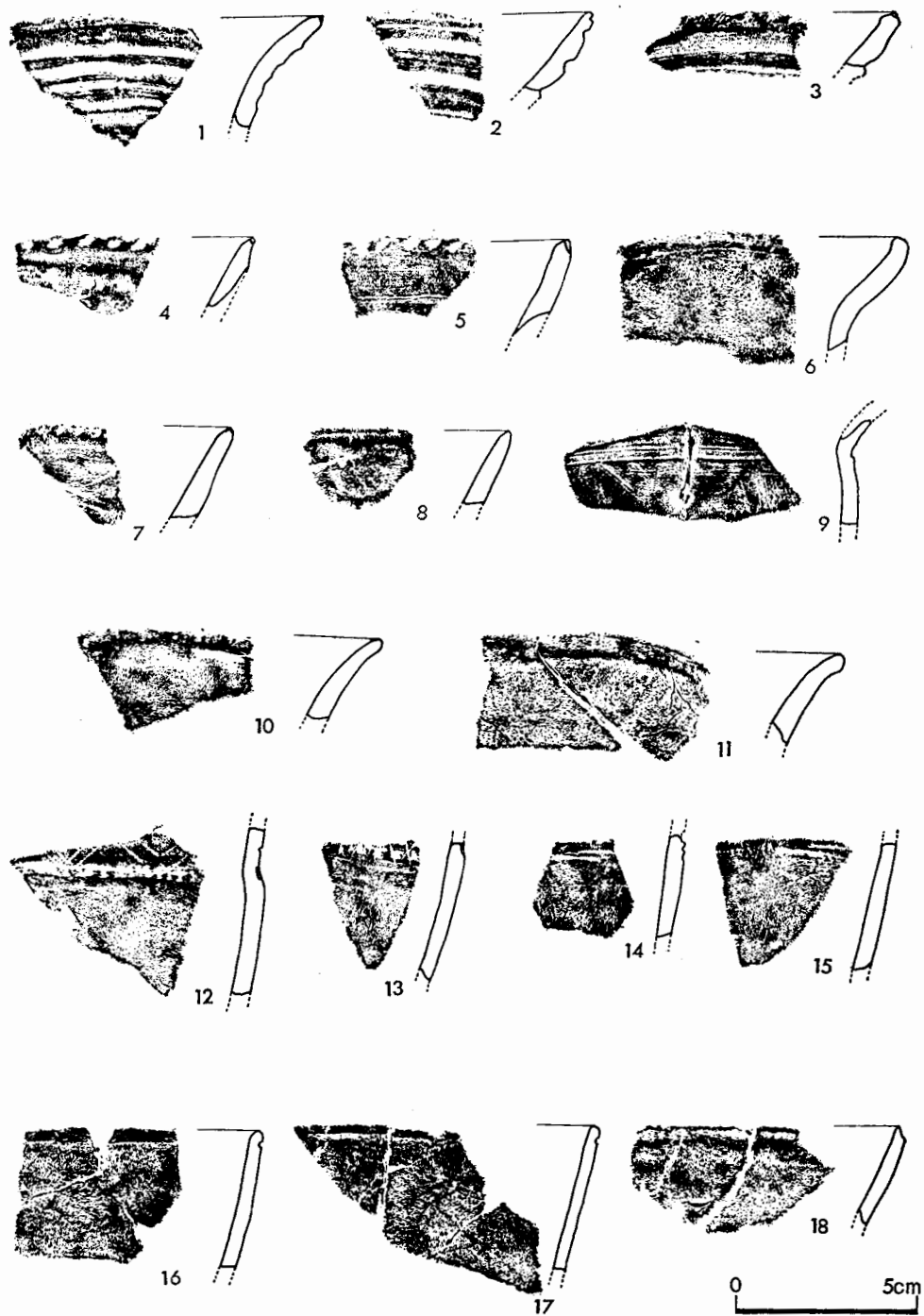
覆土出土遺物 (第13~16図, 図版8A)

第13図の1~10に示したのは、本住居跡から出土した甕形土器である。1, 2は大形の胴部片で、1は口唇部を欠き、最大幅が胴上部にあって、口縁部は外湾する。器外は縦の擦痕があり、その上を更に整形している。内面は横の擦痕である。色は灰褐色を呈し、器厚は6 mm土である。2は、内外共に擦痕があり各々縦と横である。全体に擦痕の間隔は広いようである。色調は、黒褐色~灰褐色で、器厚は5 mm土である。3は底が少し丸味を帯び、軽い張り出しがある。器内外は風化していて整形の状態は判然としない。色は赤褐色~灰褐色で器厚は、6 mm土である。4は軽い張り出しがあり、器外は縦の擦痕を施したあと、篋で整形している。器内は横の擦痕を施し、その後、指頭などで、すり消し状に、滑らかに整形している。色調は茶褐色で、焼成は良く、器厚は5 mm土である。5は底に篋の葉の跡があり、少し張り出しが観察される。器外は、縦方向に擦痕を施し、その後、篋で全面に渡って整形している。内面は、横方向の擦痕のみである。色調は、灰赤褐色で器厚は、6 mm土である。6は、少し張り出しがあり、器外は風化しており、整形の状態は不明である。器内は横の擦痕が観察される。色は、赤褐色~灰褐色で器厚は7 mm程である。7は、浅鉢の可能性もある。軽い張り出しがある。全体に風化していて、整形は、はっきりしない。色は暗灰褐色で、器厚は4 mm程である。8は、少し張り出しがあり、内外、各々斜横、縦方向の擦痕がある。外は篋で若干整形している。色は暗褐色で、器厚は4~5 mmである。底部直上で少しくびれて、胴部が急に拡がる感じである。9は少し張り出しがあり、くびれている。整形は5などと同様である。色は褐色で、器厚は5~6 mmである。10は、軽い張り出しがあり、くびれていると思われる。底と底部直上の現存部分は、きれいに研磨されている。色調は褐色で、器厚は、8 mmである。

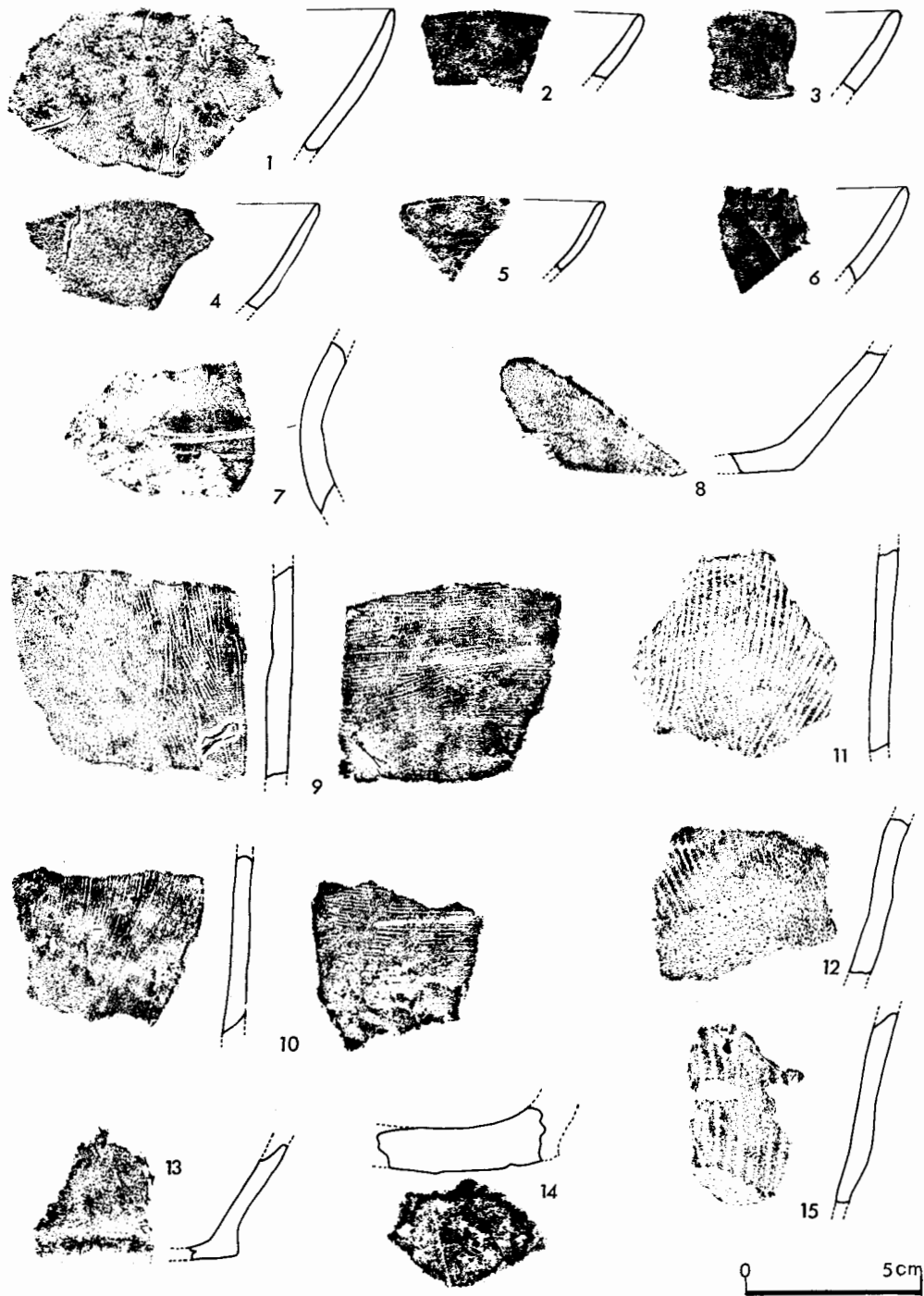
第14図1~9までは、深鉢の口縁部破片である。1は、大きく外湾し、巾広の横走する平行沈線を段状に施文している。口唇部は平坦にしており、刻目がある。裏面には、横走する擦痕がある。色は、暗茶色。2は、若干内湾気味で、巾広の平行沈線が横走する。間隔は大きい。色は灰色で裏面は光沢をもつ。3は1と同様の文様・色調であるが、口唇部の刻目は鋭い工具で二本単位である。裏には横走の擦痕あり。4, 5は、口唇部は斜めに平坦に整形され、巾広の工具による刻目がある。5は少し内湾気味。4は、斜めに輪積の跡で折れている。各々色調は、明褐色、暗茶色である。6は、全体に風化している。少し内湾気味で、口唇はやや平坦で、直下に細い一条の沈線が巡る。色は明褐色。7は、口唇に一条の沈線があり刻目がある。色は、明褐色。8は、少し外湾気味で、口唇部は三角状に平坦に整形されている。色は、暗茶色。9は、胴部片で、地文として表面に



第13图 第1号 (11~13), 第2号 (1~10) 竖穴住居跡出土土器実測図



第14图 第2号竖穴住居跡出土土器拓影(1)

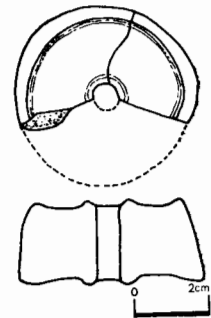


第15图 第2号竖穴住居跡出土土器拓影(2)

擦痕がある。巾広の浅い平行沈線が巡る。色は灰褐色。10, 11は、壺か深鉢の破片である。口唇部付近で外湾し、口唇部が少し厚く段状になる。表裏面には縦の擦痕がある。12~15は、胴部片で、心持ち胴張し、その上には平筥による浅い連続刺突文、X字ないしV字状の鋭い工具による刻文がある。12の資料では、その上に2本単位のV字型の刻文がある。共に、表は縦、裏は横の擦痕を施し、その上を更に指頭でなでている。色調は灰褐色。16, 17は、同一個体で、浅鉢の破片かと思われる。焼成はよく、内黒で表は暗褐色を呈する。口唇部直下は段状になっている。18は、かなり風化しているが、口唇部は、表側を斜めに平坦にしている。色は、灰茶色。

第15図1~6は坏の口縁部破片である。1は、内湾気味で、薄手である。風化しており、色は灰褐色。2は、内黒で、表面口唇部直下も黒い。よく研磨されており、表裏に横走擦痕が走る。3は、内黒で、表の色調は黒褐色。4も内黒で、表は灰色である。薄手。5は、風化しており、薄手で、色は灰褐色である。6も内黒で、表は暗灰色である。7は胴部のくびれ部分の破片で、表面は一部剥脱している。色調は、暗褐色で裏面に横走擦痕がある。8は、内黒で、表裏共によく研磨されている。浅鉢の底部片と思われる。表は、黒灰色である。9~12は胴部片で、共に表面は縦、裏面は横方向の擦痕がある。13, 14は深鉢の底部片である。13は張り出しがあり、灰黒色。14は、底に木葉痕があり、色調は茶褐色。15は、縦方向の燃糸文が施されている胴部片で、灰色である。

第16図は土製品である。径約4.8cmの半割の紡錘車である。2個に割れて出土した。明褐色。現存部分で31gあり、本来60g弱の重さであったろうか。
(上野 秀一)



第16図 第2号住居跡出土紡錘車

第2節 墓塚及びその他のピット

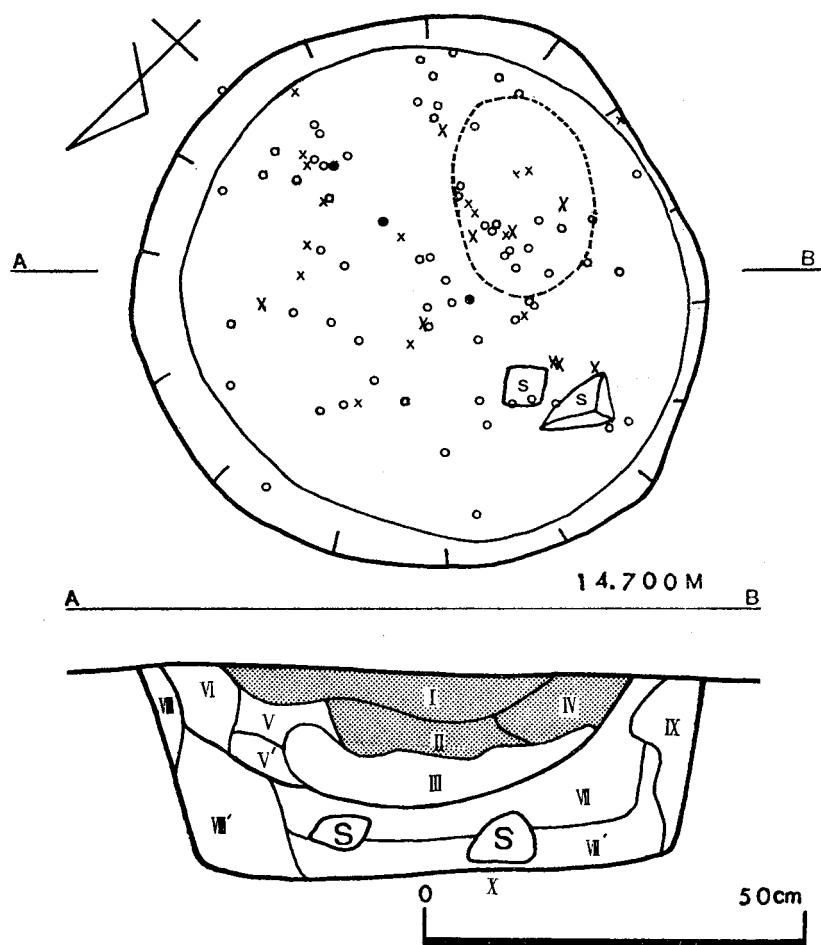
本遺跡からは、44個のピットがみついている。これらの中には、古い時代の人工的なピットとは考え難い例もあるが、それも含めて、個々に説明していく(第4表, 図版8B, 9A, B)。

第1号ピット (第17, 18図, 図版10A, B)

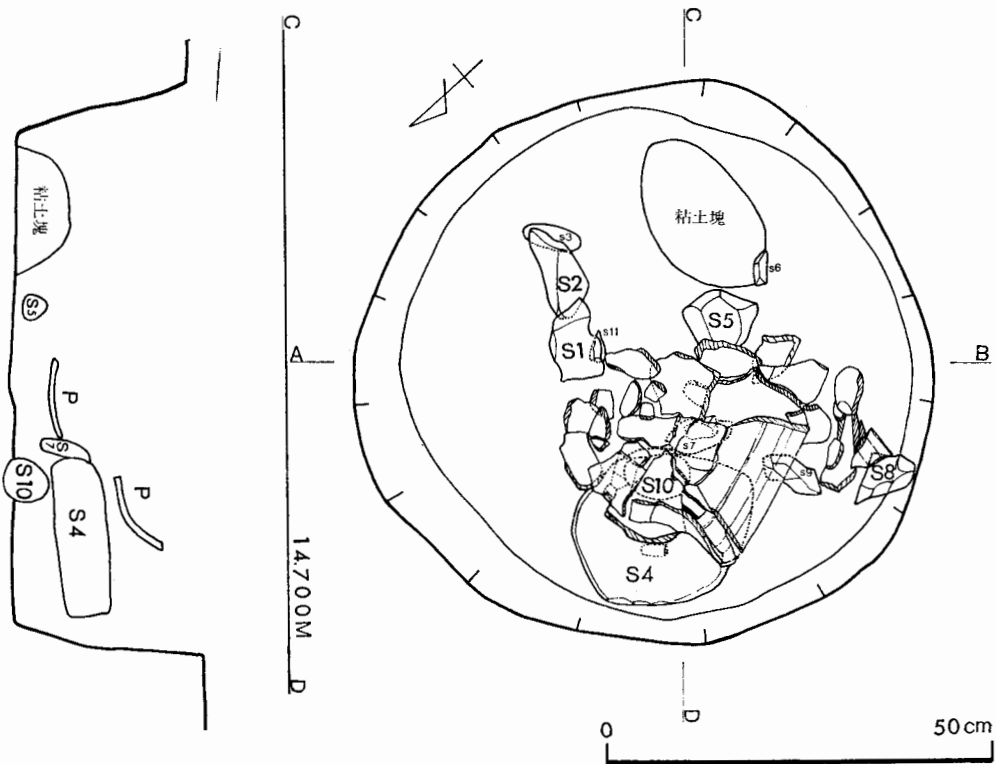
横口76×73cm, 深さ27cmの略々円形のピットである。底面、壁はしっかりしており、立上りは垂直に近い。

層準は、第Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ層は各々黒色土B, Ⅰ層より少し明るい黒色土B, 粘土粒をかなり含む黒褐色土で皿状に堆積している。第Ⅳ, Ⅴ, Ⅴ', Ⅵ層は、各々暗黒褐色土(Ⅰ), 暗茶褐色土, 茶褐色土で、第Ⅴ'層の方は、全体に黒く、炭を若干含み、Ⅵ層はかなり粘土を混じり、Ⅰ~Ⅲ層の外側に堆積している。第Ⅶ, Ⅶ'層は、暗黒褐色土(Ⅱ)で、粘土粒を含むが、Ⅶ'層の方が多く含み底面に沿って堆積する。第Ⅷ, Ⅷ'層は、暗黄褐色粘質土で、Ⅷ'層の方は全体に暗く汚染され北東壁に沿ってある。第Ⅸ層は、暗褐色粘質土で、セクションで見ると南西壁に沿ってある。

I～VI層（上層）とVII～IX層（下層）との境は、なだらかな皿状を呈して一線を画している。このI～VI層中、ピットの東側半分に完形土器1個体がつぶれた状態で出土している。特に第III層下部に集中していた。この完形土器の口縁部は、略々東側を向いている。この土器の直下、北側に21×24cmの扁平な河原石が1個、その河原石の下、底面直上から拳大の礫5個が出土し、また中央部の北東側底面直上に、拳大の礫4個が一行に並んでいる状態が見られた(S1～S3, S11)。更に、本ピットの南東部底面に付いて、26×45cmの半円球状の粘土の塊があり、この付近一帯に、骨粉が集中して出土している（第17図破線部分）。採取した骨片は27点で殆んどVII層に集中している。他に採取不可能な微細な骨粉がこの破線で囲んだ所から出土した。なおピット中央より北西に少し寄った所から底面にくい込んで円形のスリ石が1点出している（S10, 第21図, 図版20B）。副葬品であろうか。これらの堆積状態から考えて、第I, II, IV層は遺体を埋置し、埋め戻した後、堆積したものであり、従って完形土器と大形河原石も壙口にそなえたもので、本来、壙内深くに埋置されたものでないものと思われる。（上野 秀一）



第17図 第1号ピット実測図(1)



第18図 第1号ピット実測図(2)

遺物(第19図1, 第20, 21図, 図版18A, 19A)

遺物は、前述したもの以外に土器片3点(上層), 搔器・扁平石核・剝片・削片は50点(上層20点, 下層30点), 小礫7点(上層4点, 下層3点), 木炭粉は5点採取している(上層2点, 下層2点, 不明1点)。

第19図1に示したのは、墓壙内からまとまって出土した完形土器である。

器高25 cm, 口径21.9 cm, 底径7.3 cmの甕形土器で、口縁部は外湾し、かなり強く胴張りする。底は、欠損して不明であるが、平底であったと思われる、口径の1/3の大きさである。軽い張り出しがある。特に文様はないが、器内外を篋で整形している。特に器外は上から下まで整形し、光沢をもっている。口唇部は、やや平坦に整形され、口唇部直下は、粘土紐を少し折り返して、少し肥厚している。色調は、表が赤褐色～茶褐色。裏面は、黒褐色である。器厚は、10.1～6.5 mmで、輪積のつなぎの部分で薄くなる。比較的、輪積のつなぎ部分が明瞭に残っており、器面には、凹凸がある。輪積の粘土紐の一単元の巾は、1.6～2.1 cm程である。底部の破片は出土せず。埋葬時に意図的に破壊したものと思われる。

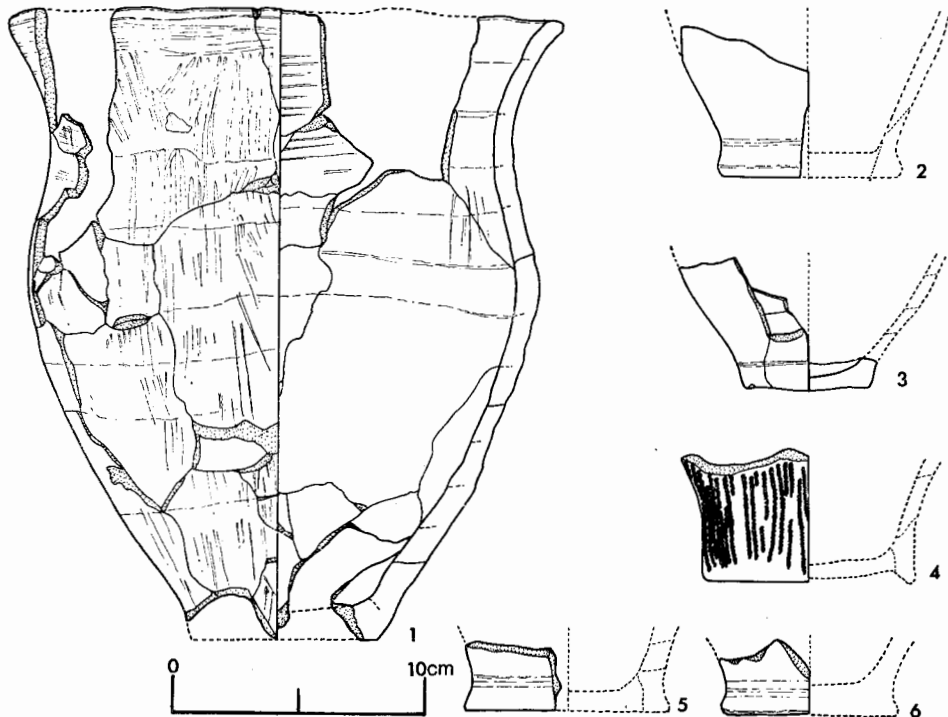
第19図2に示したのは、甕形土器の底部破片で、口径の割に底径は小さい。平底で少し張り出しがある。底面は、まめつしている。色調は表が褐色、裏は黒色である。

第20図1, 2は、同一個体と思われる、共に横走と斜めの沈線があり、1は口唇部直下に円形刺

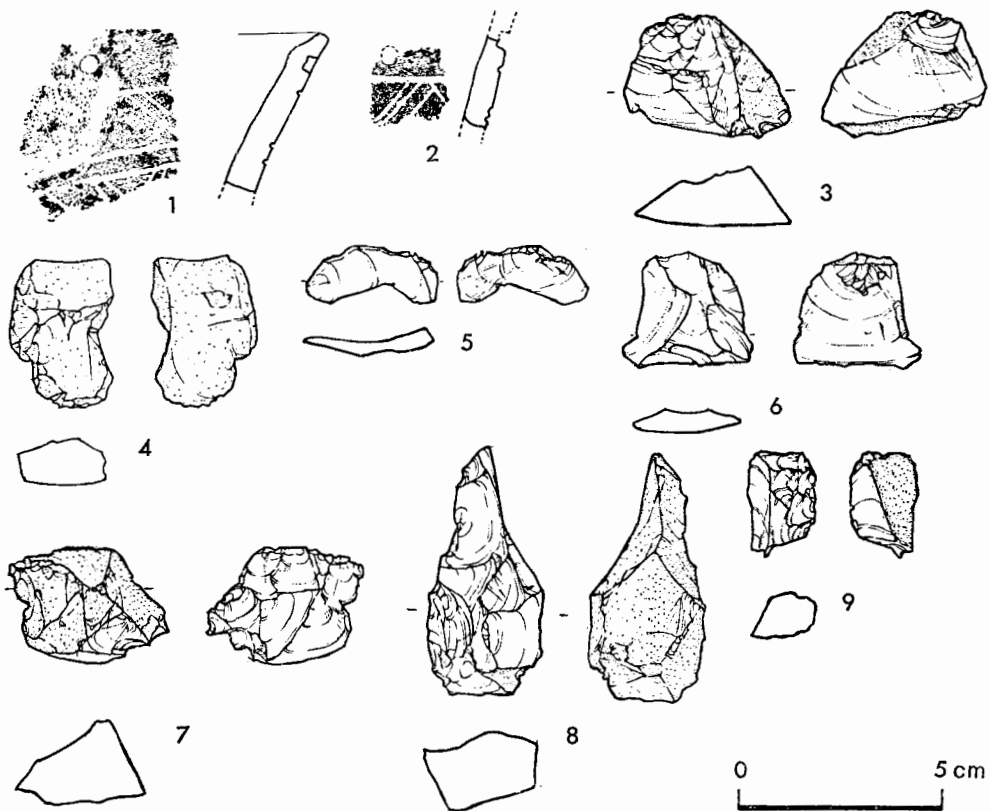
突文（所謂「突瘤文」）がある。色調は黒褐色。3は、部厚い巾広の剥片で、腹面は Negative bulb である。扁平石核の可能性もある。4は搔器である。過度に焼けている。5は横長の剥片であるが、背面に相当する面にも Positive bulb があり、縦長に剥いでいる。石核関係剥片かもしれない。やはり焼けている。6は、幅広の矩形剥片で、焼けている。7, 8は、扁平石核と思われる。共に矩形、扇形の剥片を生産している。9も扁平石核の一部かもしれない。第21図に示したのは、墓壙底面から出土したスリ石である。四側辺及び表裏に擦痕が観察される。全体にローリングしてまめつしている感じである。石質は火成岩で、この種の石質の本来の光沢は失なわれている。（上野 秀一）

14C年代について

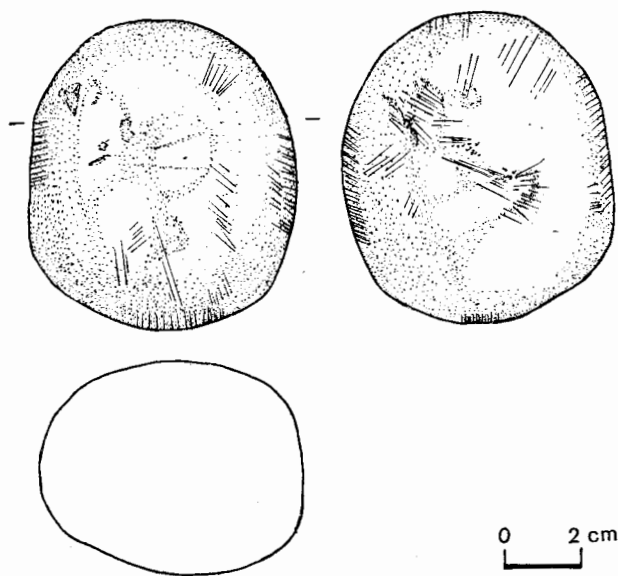
第1号ピットの第Ⅰ層より採取した木炭の¹⁴C年代測定の結果、1760 ± 110 B. P. (A. D. 190) (GaK-5029) という年代を得ている。



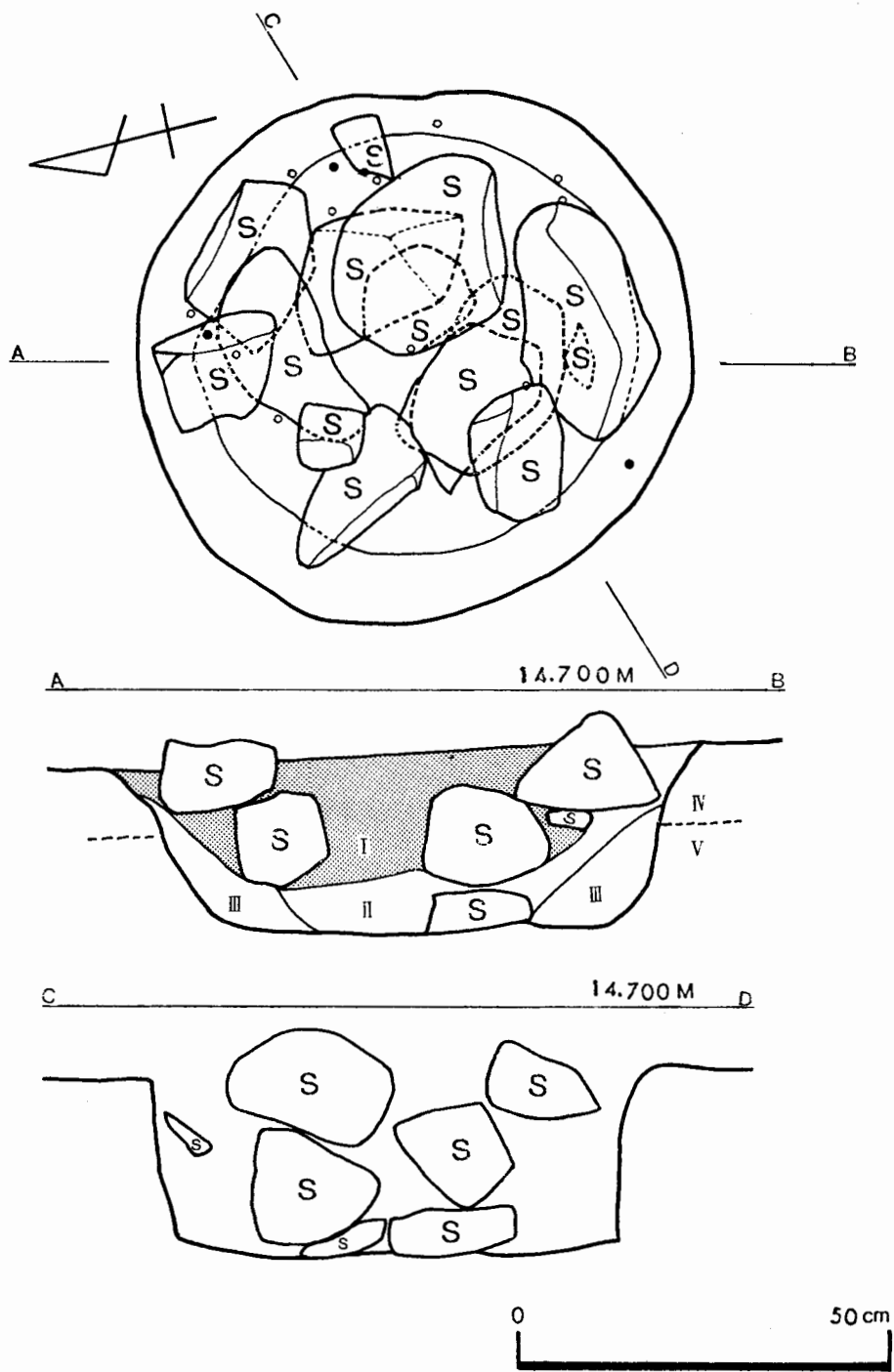
第19図 第1号 (1・2), 第4号 (5), 第7号 (3), 第20号 (6), 第32号 (4) ピット出土土器実測図



第20図 第1号ピット出土遺物



第21図 第1号ピット墳底面出土石器 (S10)



第22図 第2号ピット実測図

第2号ピット (第22図, 図版11A)

坑口 76×73 cm, 深さ 25 cm を算し円形プランを呈する。壁立ち上がりは、四周ともほぼ垂直を呈す。底面は平坦である。

ピット内の堆積は、多量の石が存在するため細部まで確認出来なかった。第Ⅰ層黒色土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層褐色土である。第Ⅲ層はピット四周の壁に沿った状態で存在した。回壁は第Ⅳ層黄褐色粘土、第Ⅴ層黄色粘土層となっている。

ピット内部全域にわたって拳大から人頭大の河原石が見られる。ピット掘り込み面から底面に接して存在するものまで、積み重なっている。遺体を埋葬の後、その上部を覆っていたものが、遺体の腐植と共に沈下したものである。第Ⅰ層の黒色土は、その後に堆積したものと考えられよう。
(加藤 邦雄)

遺物 (第24図1~5, 図版18A, 19B)

出土遺物は、第Ⅰ層より土器片3点、黒耀石の剥片、削片が9点、第Ⅱ層からは、黒耀石の搔器1点、黒耀石の剥片・削片が4点出土した。第Ⅰ層から木炭粒がわずかに検出されている。

第24図1~5に示したのは、本ピット出土遺物の一部である。1は、無文の胴部片で少しくびれている。2は、底部で平底、張り出しは強くはない。共に色調は、暗茶色である。3は第Ⅰ層から出土したもので、扁平石核かと思われる。4は、搔器、5は巾広の矩形剥片である。全例黒耀石。
(上野 秀一)

第3号ピット (第23図, 第24図6~8, 図版11B, 18A, 19B)

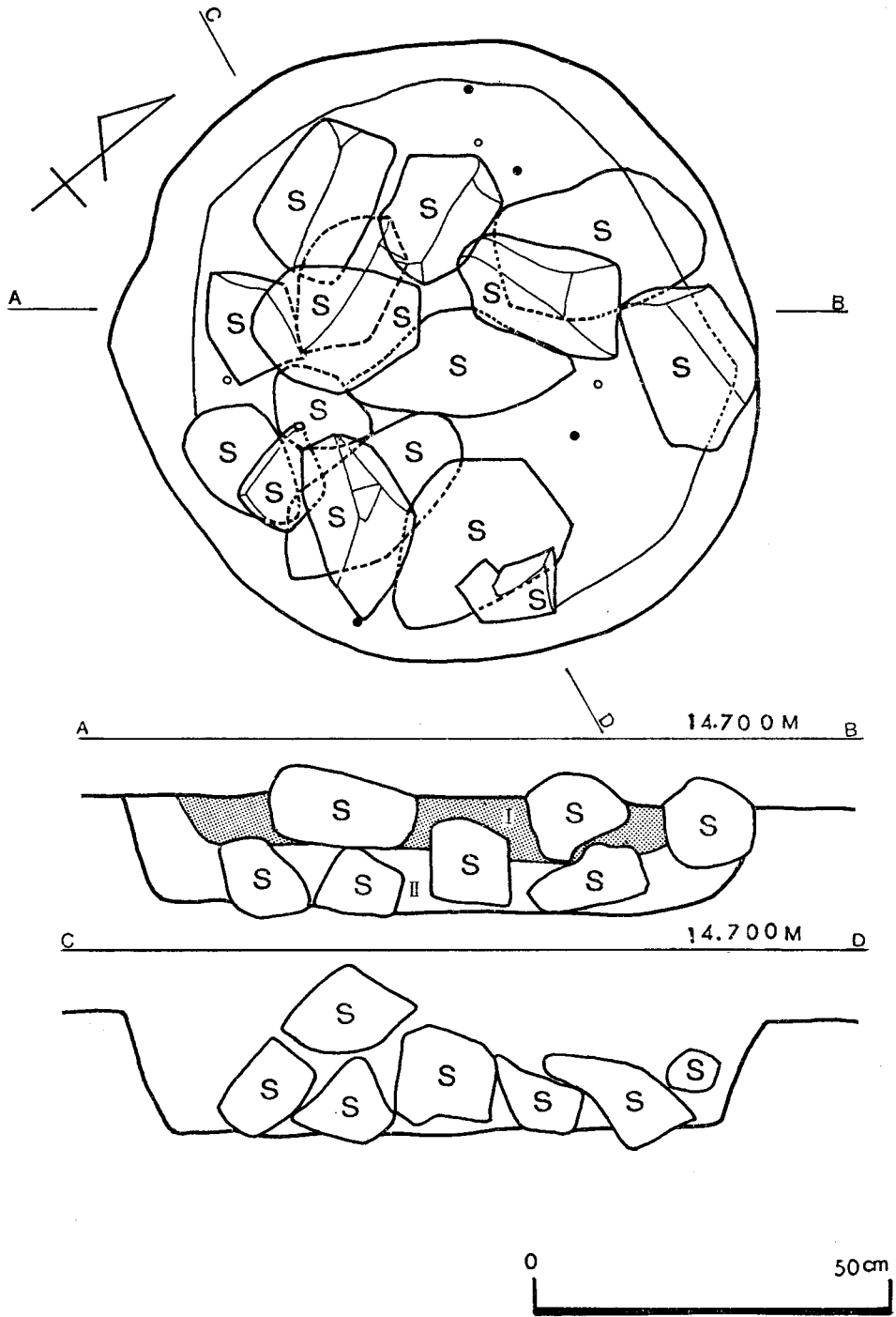
坑口 91×88 cm, 深さ 17 cm の円形プランを呈する。壁立ち上がりは、四周ともやや垂直に近く、底面は平坦である。

覆土の堆積は石が一面にあり、層を確認することが困難であった。第Ⅰ層黒色土、第Ⅱ層褐色土となっている。

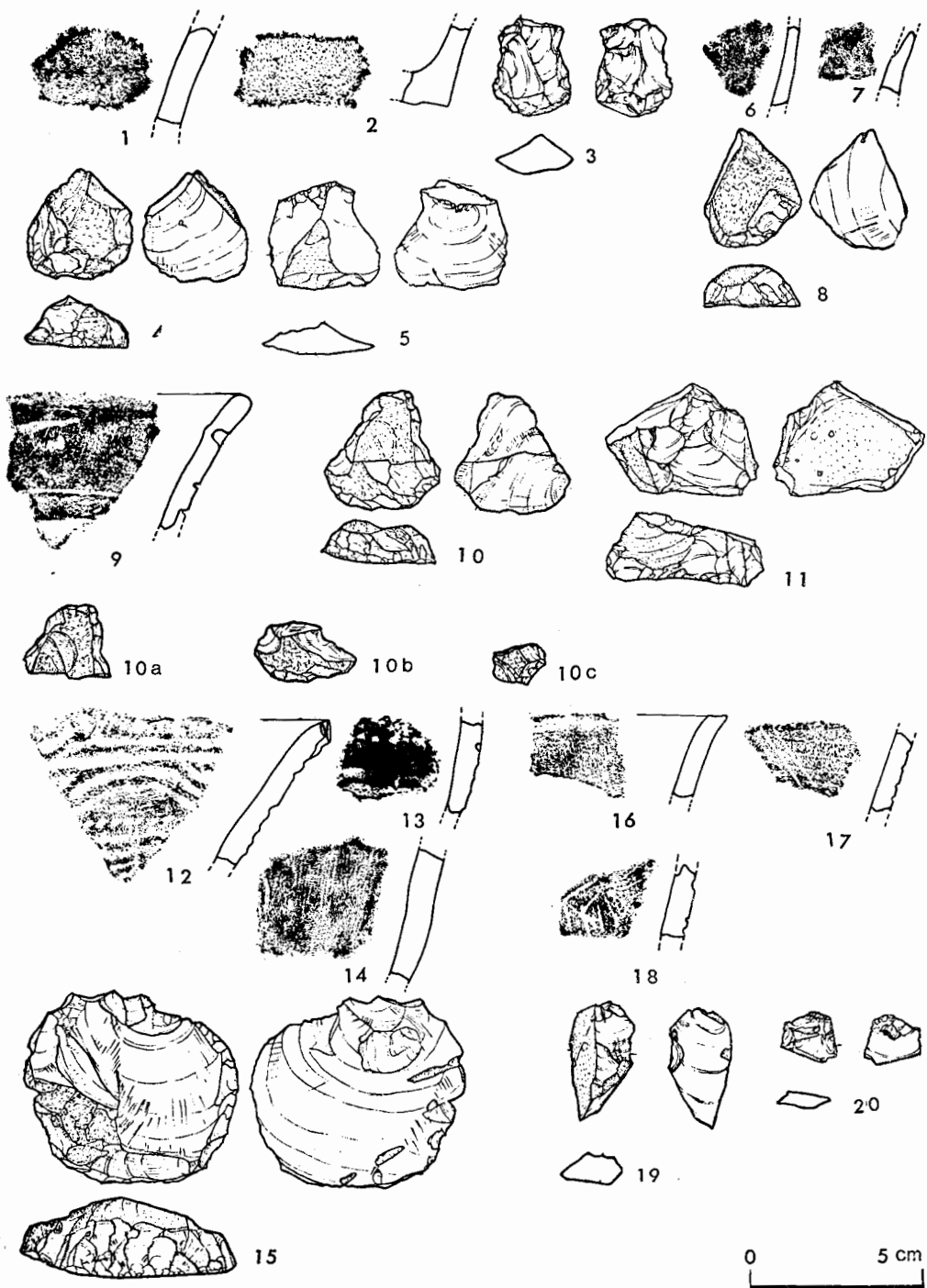
内部には、人頭大の石が全面にわたって存在している。この状態から見れば、本坑では、遺体を内部に入れた後、その上部を泥で薄く覆い、更に石をもって覆ったものと解されよう。

出土遺物は、第Ⅰ層から土器片4点、黒耀石片2点、第Ⅱ層から土器片2点、黒耀石の搔器1点(第24図8)、黒耀石片3点が発見された。

第24図6は、赤褐色を呈する胴部細片で同一個体の細片が他に4片ある。7も同様のもので、底部位近くの細片であろうか。
(加藤 邦雄)



第23図 第3号ピット実測図



第24図 第2号(1~5), 第3号(6~8), 第5号(11), 第8号(9・10), 第9号(16~20),
第10号(12~15)ピット出土遺物

第4号ピット (第25図, 図版12A, B)

壙口 108×105 cm を計り, 円形を呈する。深さは 52 cm で, 規模は他ピットに比して大規模である。

層準は, 第Ⅰ, Ⅰ'層黒色土で, 前者はクラックが入り(黒色土A), 後者は粘質を帯びる(黒色土B)。第Ⅱ, Ⅱ', Ⅱ'', Ⅱ''', Ⅱ''''層は黒褐色を呈する層で, Ⅱ層はクラックが入り, Ⅱ''層は粒子が細かく, Ⅱ'''層は黄色土の混入が見られ, Ⅱ''''層は粘質に富んでいる。第Ⅲ層粘土粒混入の暗茶褐色土。第Ⅳ層, 黒色土がまだらに混入する黄褐色土。第Ⅴ層, 黒色土がまだらに混入する茶褐色土で壁に沿ってある。第Ⅵ層は, 黄色土混入の暗褐色土で底面より壁に沿ってある。第Ⅶ層は汚れた感じのする暗褐色粘質土となり, 以下Ⅶ', Ⅶ'', Ⅶ''', Ⅶ''''層となり各々黄色が強い, 赤色が強い, 茶色に近いほぼ同様の層となる。第Ⅷ層は, 砂粒を含む灰白色粘質土で壁面に貼り付いている。壁はかたくしまっており, 立ち上がりは垂直で, 壙底面は, 平坦である。

遺構確認面にて多量の骨片が散乱しており覆土中第Ⅰ~Ⅴ層まで多くの骨片を含んでいる。他の土器, 石片などの遺物も非常に多い。第Ⅶ層上面には, 大形の河原石8個の集積が認められた。

以上で見た通り, 第Ⅰ~Ⅴ層と第Ⅵ~Ⅷ層までとでは, 遺物の出土状況, 層の堆積状態にいちぢるしい差位が認められる。特に埋没状態を見ると, 第Ⅶ層以下の層は, あたかも同一の層準であるかの感じがする。これらより本ピットは, 第Ⅶ層上面を一つの壙底面としてもとらえられ, 2回に亘って利用された事も考えられる。(羽賀 憲二)

遺物 (第19図5, 第26図, 図版18A, 19A)

本ピットの第Ⅰ~Ⅴ層からは, 土器17片(内3点接合), 剥片に簡単な二次加工をしたもの6点, 剥片10点, 削片28点, ブロック2点, 扁平石核1点(以上黒耀石), 礫22点, スリ石1点, 敲石3点, 石質不明の断口部砂状でキラキラ光る石2点出土している。

第26図1, 2は, 胴部片で, 横走る浅い沈線文が3本施文されている。多少胴張りする。色調は暗茶色。3は, 口唇部直下に円形刺突文と横走沈線文が施されている。色は黒色。4は, 口唇部破片で, 両面とも無文である。口径は小さい。色調, 焼成は3と似る。5は, 無文で口唇部が肥厚する。色調は褐色。6は, 低い隆起線文と爪形の列点文がある。色は, 表が明褐色, 裏は黒褐色。7は, 胴部片で表に軽い整形痕がある。色は, 黒褐色。図示しなかったものに, 斜縄文と三角形列点文のある例, 横走沈線文のある例がある。

第19図5は, 平底の張り出しの底部片である。無文で焼成はよく褐色を呈する。

第26図8は, 矩形の剥片, 9は扇状の大形剥片で, 裏面に簡単な加工がある。10は, 大きい厚手の矩形剥片で, 表面には巾広く原石面を残す。また, 表面には扇状剥片を剥がした跡がある。11は, 部厚い扇状の大形剥片で, 扁平石核の可能性もあり, 縦長剥片を生産した跡がある。12は, 扇状剥片。13は, 削片で一側に二次加工がある。14, 15は, 扇状の剥片で, 14は少し焼けている。以上は全例黒耀石である。(上野 秀一)

第5号ピット (第25図)

坑径は、88×82 cm でほぼ円形を呈する。深さは、14 cm である。

層は、第Ⅰ層、クラックの入る黒色土A、第Ⅱ層、黄色土粒混入の黒褐色土、第Ⅲ層、黄褐色土。壁、底面は固くしまり、立ち上がりは垂直に近い。なお、本ピット確認面にて大形の河原石が1個中央部に置かれてあった。

(羽賀 憲二)

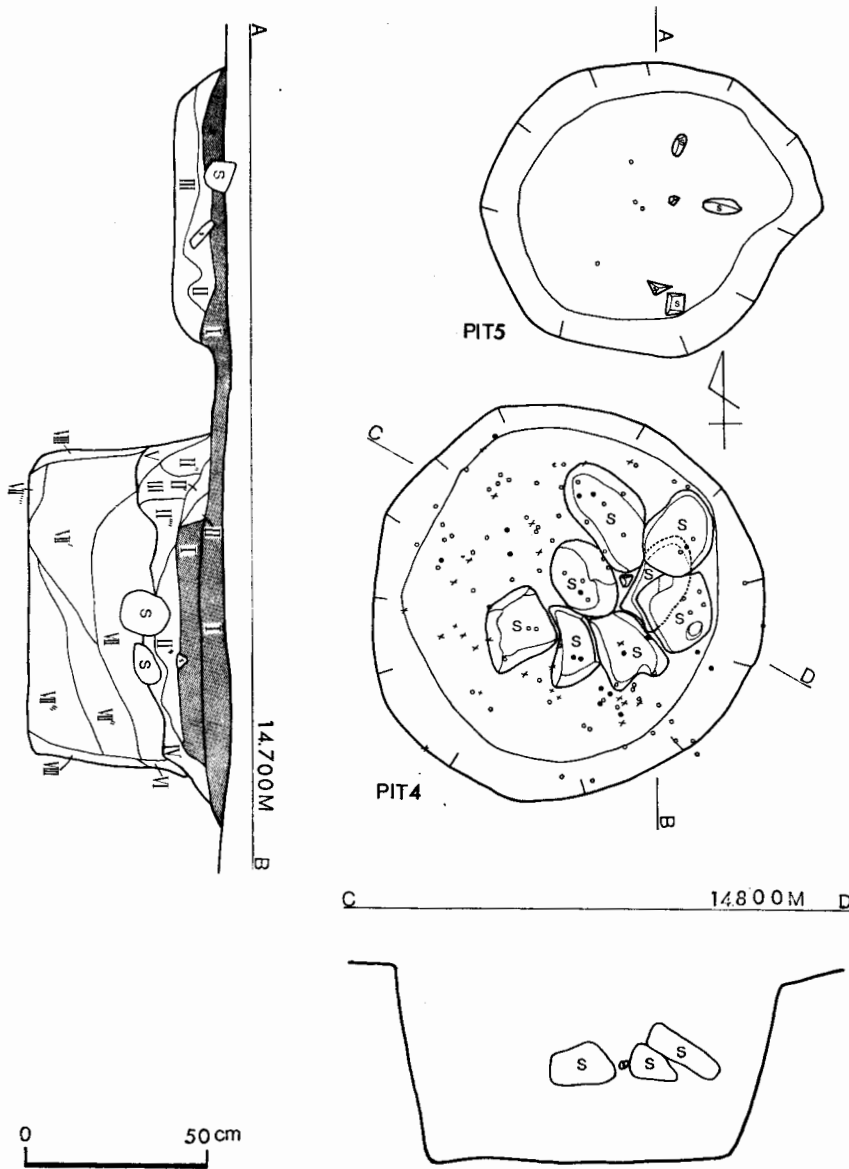
遺 物

(第24図11, 図版19B)

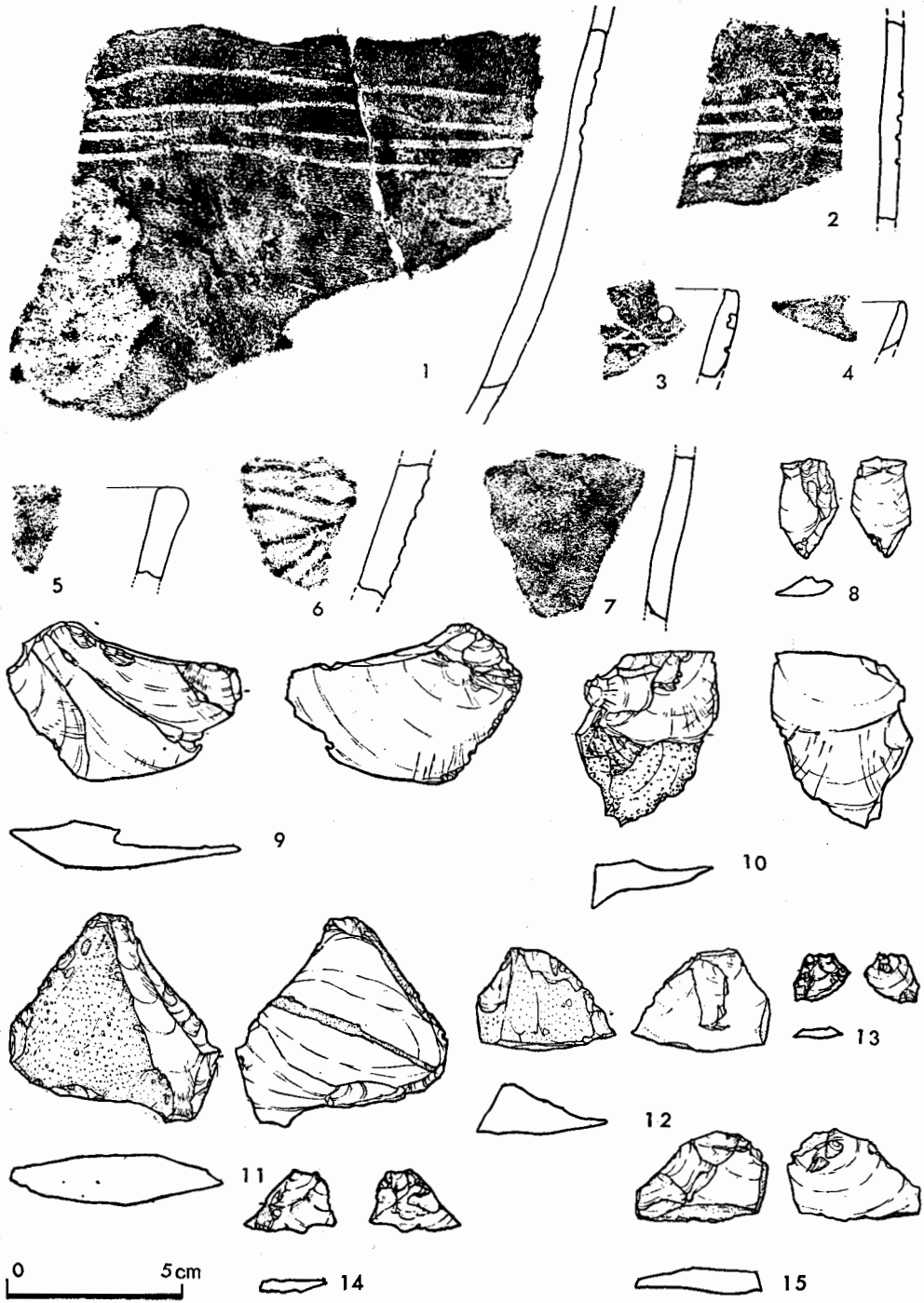
石片が数点及び小円礫数個が覆土中に含まれるが坑底面には見られず、土器片は一切出土していない。

第24図11に示したのは本ピットから出土した扁平石核を再利用した搔器である。側面図に示したように剝離が裏面から入っており、刃部を形成している。腹面は原石面である。扁平石核の確認出来る生産剝片は、矩形のものである。黒燐石製。

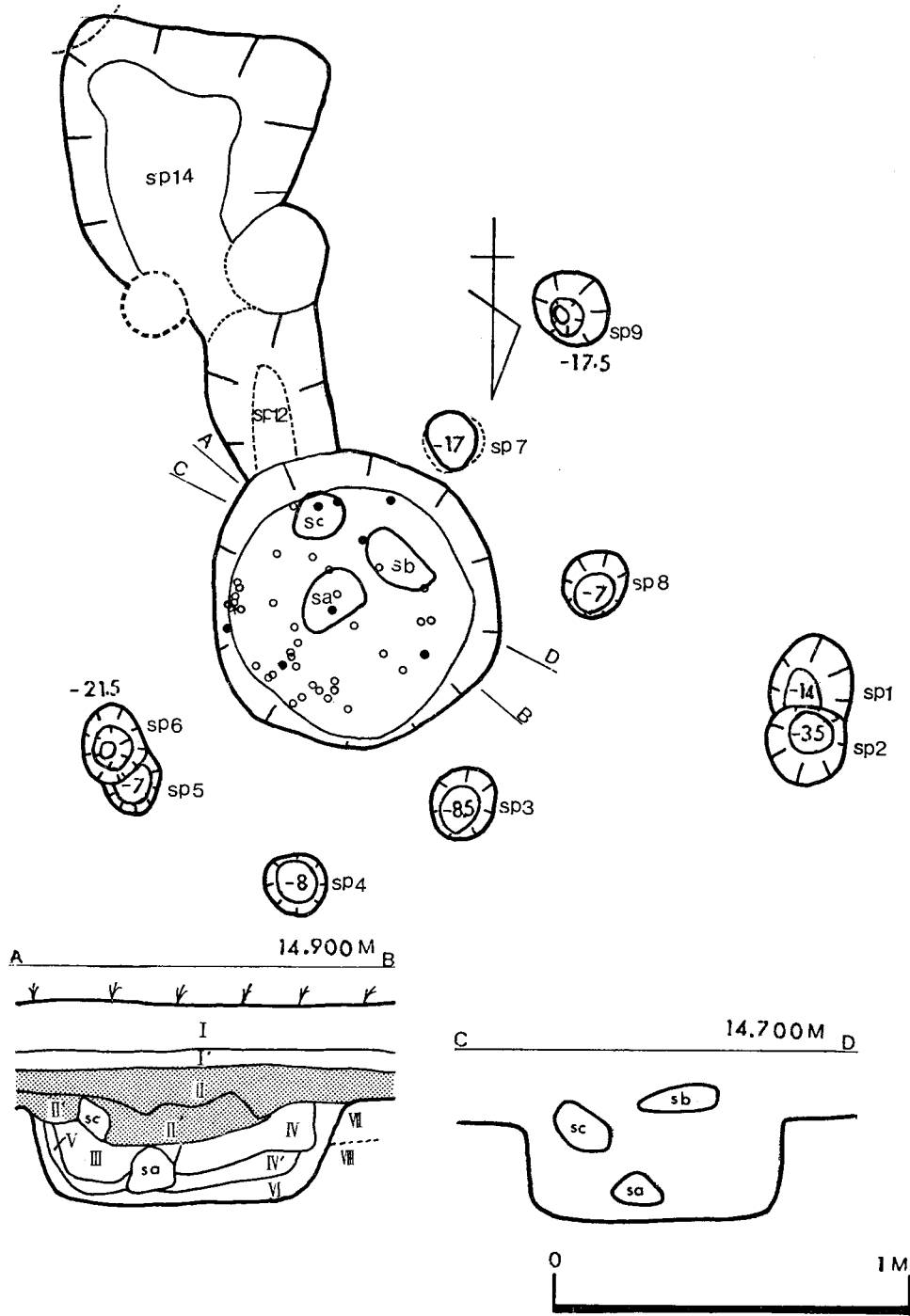
(上野 秀一)



第25図 第4号、第5号ピット実測図



第26図 第4号ピット出土遺物



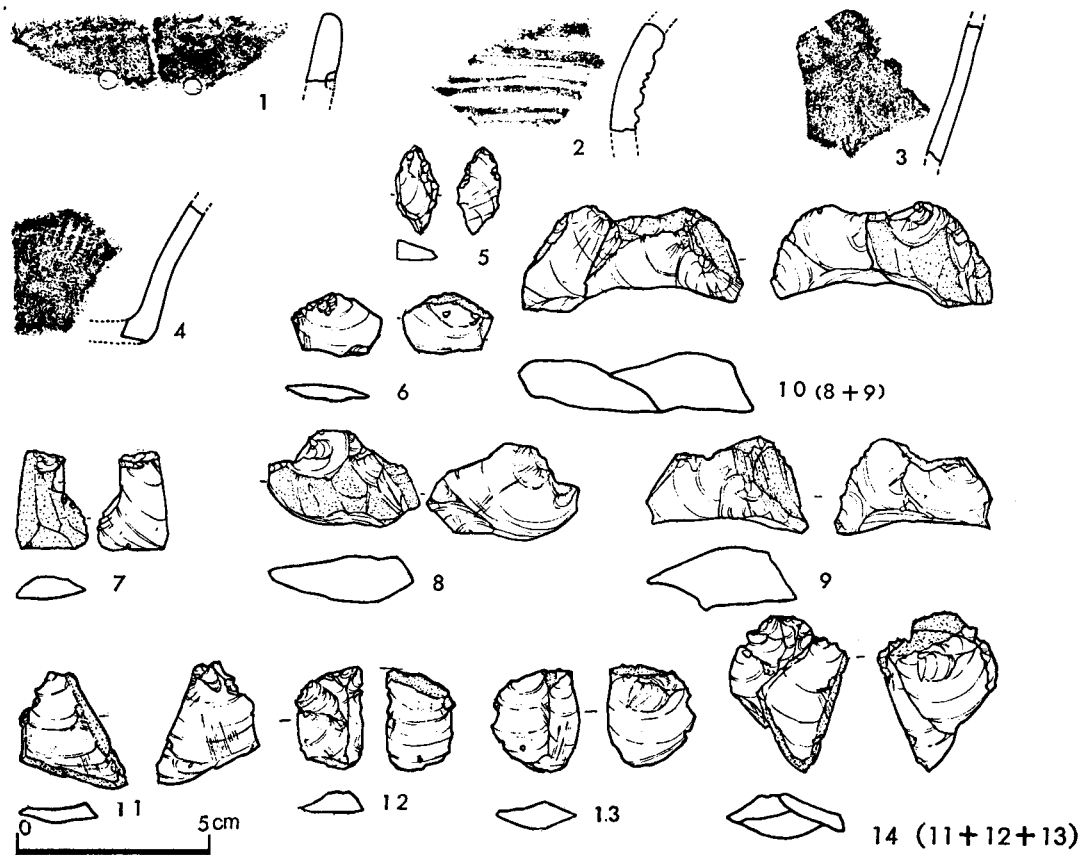
第27図 第6号ピット実測図

第6号ピット (第27図, 図版13A, B)

横口 85×80 cm, 深さ 28 cm の不整円形のピットである。立ち上がりはやや急傾斜で, 底は平らである。壁, 底面共にしっかりしている。

層準は, 第Ⅰ, Ⅰ'層は耕作土で, Ⅰ'層の方が古い時代のもので固くしまっている。第Ⅱ, Ⅱ'層は, 黒色土で, Ⅱ層の方は激しいクラックが入り (黒色土A), Ⅱ'層の方は吸湿性がある (黒色土B)。第Ⅲ層以下は, ピットの覆土で, 第Ⅲ層は, セクションの南東にあつて, 暗黒褐色土で吸湿性がある。第Ⅳ, Ⅳ'層は, セクションの北西にあつて暗黄褐色土で, 粘土粒を含むが, Ⅳ'層の方が量的に多い。第Ⅴ層は, Ⅲ層の下にあつて暗茶褐色土であり, 若干の粘土粒を含む。第Ⅵ層は, 壁から底面に沿つて堆積してつており, 暗黄褐色粘質土で, 若干の黒色土を含む。第Ⅶ, Ⅷ層は地山で, 各々暗黄褐色粘土層, 淡黄褐色粘土層である。

第Ⅱ層から半円形の石, Ⅱ'層から長方形の石が立つて出土し, 床面直上のⅥ層から楕円形の石がみつかつている。またピットを囲む様にその周辺から, 浅いピット3個 (SP 3, SP 4, SP 5) と深くてしっかりしたピット (SP 2, SP 6, SP 8, SP 11) がみつかつている。SP 3, 4



第28図 第6号ピット出土遺物

5, 6, 8, 10のピットは、本ピット外を内側にとりまいており、SP 1, 2, 11は更にその外側に所存する(第3表)。ほかに、本ピットの南側に浅い皿状の末広がり短冊形のピット状のものがある。関連遺構であるかどうかは不明である。床面直上にあつた石の付近に微粉の粘土を混じた暗茶褐色土(第V層)の径15cm程の高まりがあり、その付近から骨粉が出土している。

(上野 秀一)

遺物(第28図, 図版18A, 19A)

黒耀石の剥片, 削片などが, 30片弱ピットの覆土より出土しているが, ほとんど東側半分偏っている。土器小片は11片出土している。これらは, I層を除いて各層にあるが, 下位の層に集中する傾向がある。また, 木炭が塊って, IV'~V層より出土している。

土器の内文様の判るものは, 無文4(第28図3), 帯縄文の底部土器片1(同4), 円形刺突文のある土器片1(同1), 横走の沈線文のある土器片1(同2)である。色調は, 1~3は黒褐色で, 4のみが明褐色である。1には炭化物が付着しており, 後述する第3類土器と思われる。2は, 断面四角形の施文具を斜めに用いて, 横走させたもので, 中央の狭い沈線2本は, かなり鋭い工具を用いて引いたと思われる。口唇部を欠く。甕形土器で第4類土器の破片であろうか。3の裏面には, 横走の刷目施文後, なめらかに整形している。

石器, 石片は黒耀石の剥片(第28図6~8, 11~13)が26点, 扁平石核1点(同9), メノウ質の片側の表裏を簡単に加工した石鏃状石器1点(同5), 及び小礫5点が出土している。なお扁平石核と8の剥片は接合した。11~13の3点の矩形剥片も接合した。10, 14は各々接合図である。

(上野 秀一)

第3表 第5号ピット 小ピット一覧表
(unit; cm)

S NO.	P	大きさ	深さ	底	内 容 物	位置	備 考
1		22×24	14	斜	暗茶褐色土	外	SP 2と二連ピット
2		20×21	35	平	黒褐色土	外	
3		18×19	8.5	凹	茶褐色土	内	ピットであるかどうか疑問
4		16×16	8	凸	茶褐色土	内	
5		14× 14.5	7	凹	茶褐色土	内	SP 6と二連ピット
6		16×17	21.5	平	茶褐色土	内	立ち上がりはピット側に傾斜
7		13×16	17	平	暗茶褐色土	内	きんちゃく形
8		17.5 ×18	7	斜	茶褐色土	内	
9		17×21	17.5	丸	茶褐色土	外	ピットとは逆側に傾斜

第7号ピット (第29・30図, 第19図3, 図版19B)

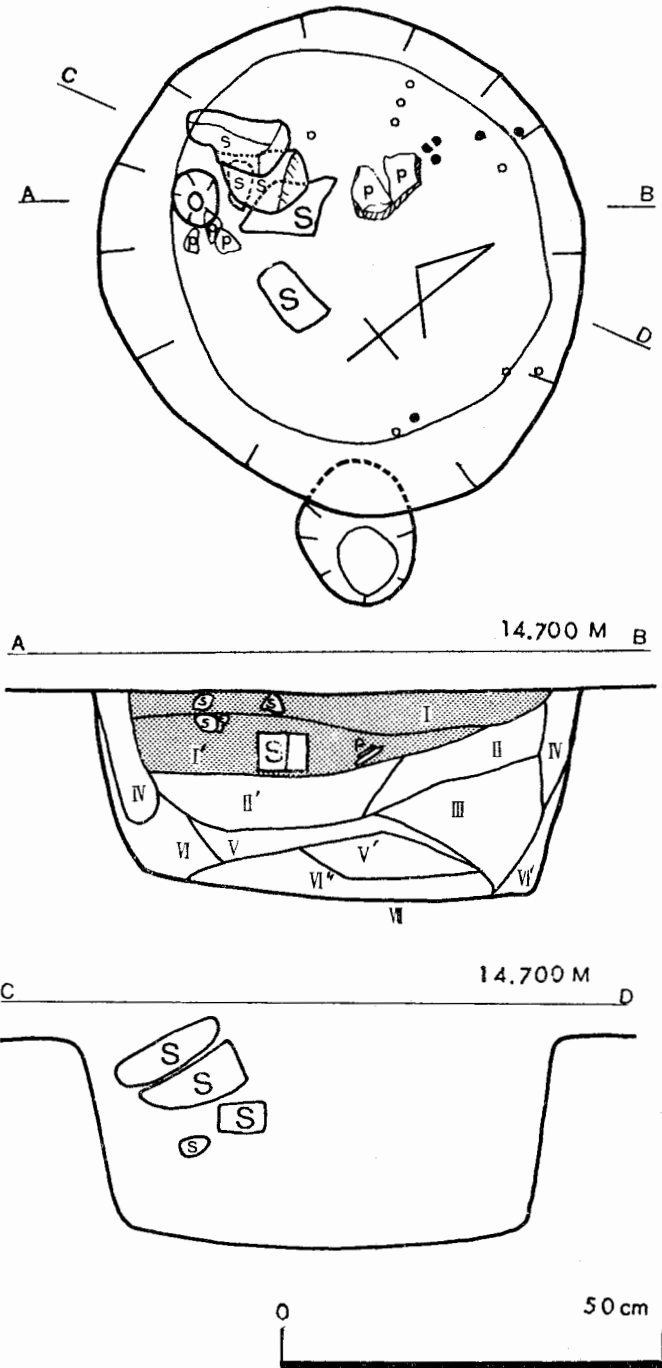
横口68×62 cmの不整円形のピットである。立ち上がりは、垂直に近く、深さは28 cmを数える。

堆積は、第Ⅰ, Ⅰ'が黒色土で、Ⅰ層の方はクラックが入り(黒色土A), Ⅰ'の方は粒子が粗い(黒色土B)。第Ⅱ, Ⅱ'層は黒褐色土で、粘土粒を混入するが、Ⅱ'層の方が土の粒子が細かい。第Ⅲ層は、暗茶褐色土。第Ⅳ層は、黒色土と黄褐色土が混入した層。第Ⅴ, Ⅴ'層は、暗黄褐色土で、Ⅴ層は粒子が細かく、Ⅴ'層は粘土粒を混入している。第Ⅵ, Ⅵ', Ⅵ''層は、黄褐色土で、Ⅵ', Ⅵ''層の両者は、黒色土粒が混入し、Ⅵ''層は土状が細かい。第Ⅶ層は、地山である。

第Ⅰ～Ⅱ層, Ⅴ～Ⅵ層は、底面に沿って、皿状に堆積し、第Ⅲ層はブロック状。第Ⅳ層は、壁に沿って堆積している。小ピットが、ピットの南東壁ぎわにある。

大きめの河原石が5個、ピット南西隅にまとまって出土している。出土層位は、第Ⅰ～Ⅱ層である。遺物は、土器片8点、黒耀石の剥片2点、扁平石核1点、削片3点、礫3点が、やはり第Ⅰ～Ⅱ層から出土している。遺物は北西隅と南東隅に偏在して出土している。

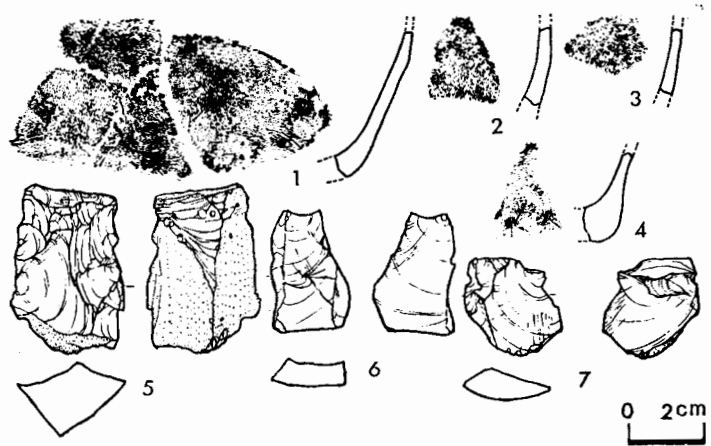
第19図3及び第30図1～3は、やや丸味を帯びた平底で、底面輪郭に沿って刻文が施されている。底面直上に段があって、胴部は急



第29図 第7号ピット実測図

に広がる器形である。焼成はもろく、赤褐色を呈する。第30図4も同様の色調、焼成の底部細片である。5は扁平石核、6, 7は各々縦長、矩形剝片で、共に黒耀石である。

(上野秀一)



第30図 第7号ピット出土遺物

第8号ピット (第31図, 図版14A)

壙口98×88 cm, 深さ36 cmの円形を呈する。壁立ち上がりは四周ともすべてはほぼ垂直に近い状態で、底面は平坦である。

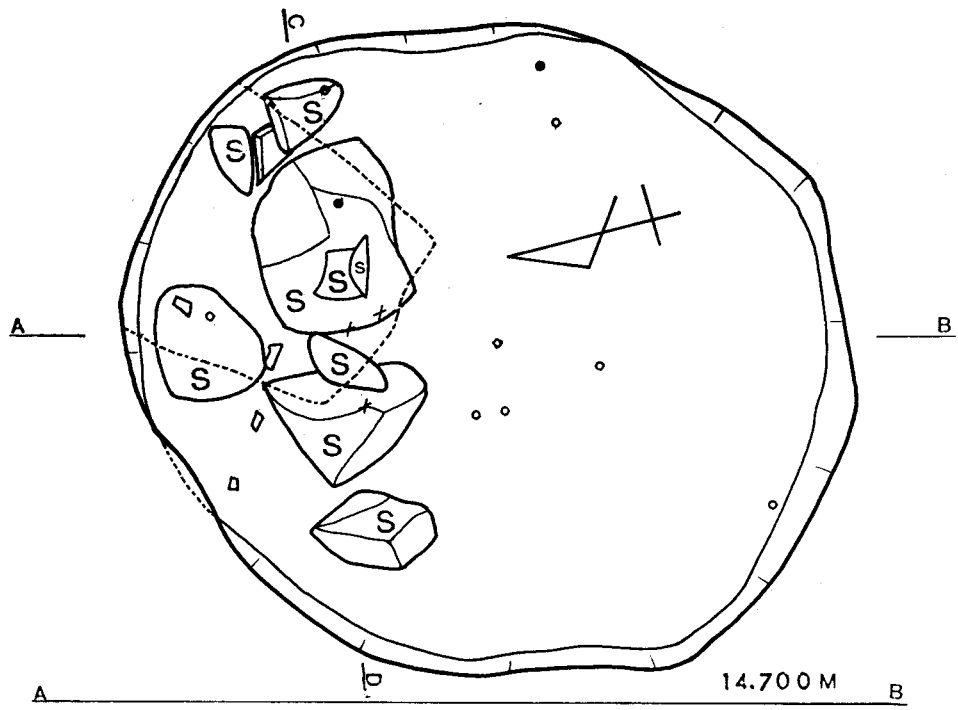
層位は、第Ⅰ, Ⅰ'層は各々黒色土A, B, Ⅰ'層はⅠ層より粘質が強い。第Ⅱ層暗黒褐色土であり、南側部分には攪乱が見られる。第Ⅲ層から第Ⅴ層は、いずれも暗い褐色土であり、第Ⅲ層が一番暗く、第Ⅴ層にかけて漸移的に変化する。第Ⅵ層黒褐色土で、黒色土と地山の粘土がかなり明瞭に見られる。第Ⅶ層は黄褐色土である。ピット壁を見ると、第Ⅷ層以下地山であり、第Ⅷ層黄褐色粘土層、第Ⅸ層赤黄褐色粘土層、第Ⅹ層淡黄褐色砂層となる。尚、A—Bセクションの右上側にある「S」は、攪乱層である。

北側部分、第Ⅰ層下面より、第Ⅳ層にかけて人頭大の河原石4個、拳大の河原石5個が密集して存在していた。(加藤邦雄)

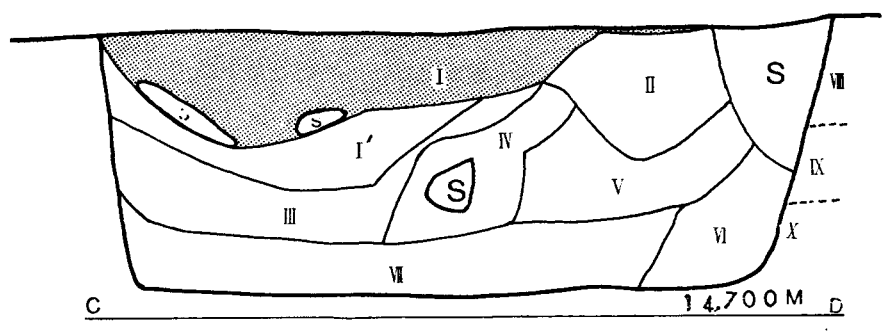
遺物 (第24図9, 10, 図版18A, 19B)

出土遺物は、発掘の際、第Ⅰ～Ⅲ層までを第Ⅰ層として、以下第Ⅱ層として取り扱った。これに従えば、土器はすべて第Ⅱ層から7点出土しており、石器、石片は第Ⅰ層より搔器、剝片、各1点、第Ⅱ層から第Ⅰ層出土の搔器の基部が発見された。河原石の下から底面にかけて木炭及び粉末状になった骨片が(多数)出土した。第31図北側に破線で示した所は、特に多く認められた部分である。

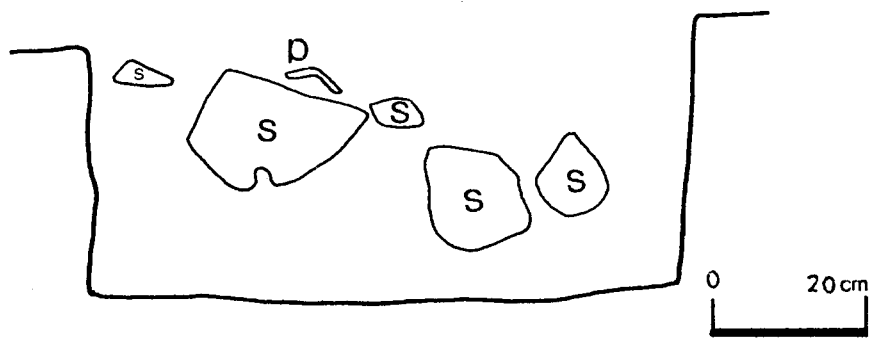
第24図9, 10に示したのが本ピット出土遺物である。9は、口縁部破片で、円形刺突文と横走沈線文がある。少し外湾する傾向がある。表、裏には、すすが付着し黒光りしている。色調は黒色。10は搔器である。前述した如く、第Ⅰ～Ⅱ層から、3つに割れて出土した。10a～10cは、各片の実測図である。黒耀石製。(上野秀一)



A 14.700 M B



C 14.700 M D



0 20 cm

第31図 第8号ピット実測図

第9号ピット (第32図, 図版16A)

横口277×64 cm の隅丸長方形の細長いピットである。深さは40 cmでやや急傾斜に立ち上がる。

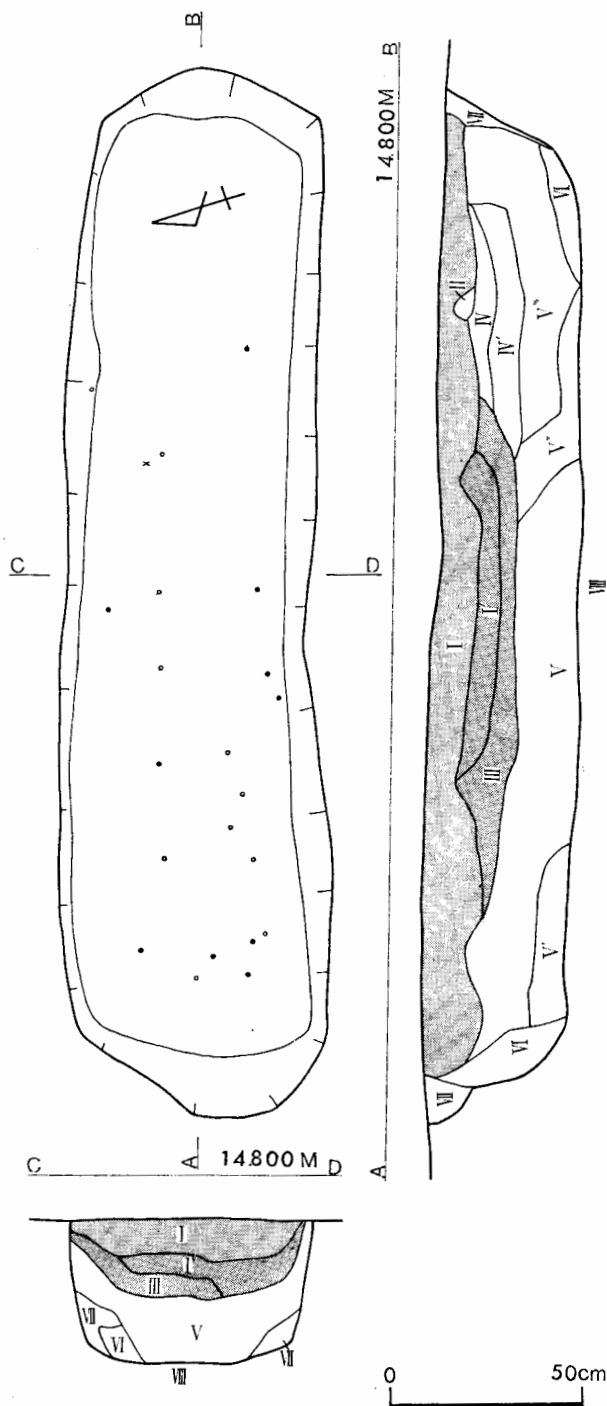
長軸は、東南東—西北西の方向である。

層は、第Ⅰ, Ⅰ'層は黒色土Aに近い層でⅠ層の方が全体に暗く、Ⅰ'層は粘性があり、所々若干の粘土粒を含む。第Ⅱ層、暗褐色粘質土でブロック状に入っている。第Ⅲ層は黒色土、第Ⅳ, Ⅳ'は暗黒褐色土で、Ⅳ'層の方が全体に粘土粒を含んでいる。第Ⅴ, Ⅴ', Ⅴ'', Ⅴ'''層は、茶褐色土でⅤ層は若干の粘土粒を含み、Ⅴ'層は、Ⅴ層より全体に暗く、大きめの粘土粒を含む。第Ⅵ層は、暗茶褐色土で、若干の大粒の粘土を含む。第Ⅶ層は、暗黄褐色粘質土、第Ⅷ層は地山である。第Ⅰ～Ⅴ層は、底面に沿ってなだらかに堆積し、第Ⅵ～Ⅶ層は壁沿い、壁沿いの底面近くにのみ存在する。この細長いピットの形状としては、本遺跡では唯一のものである。(上野秀一)

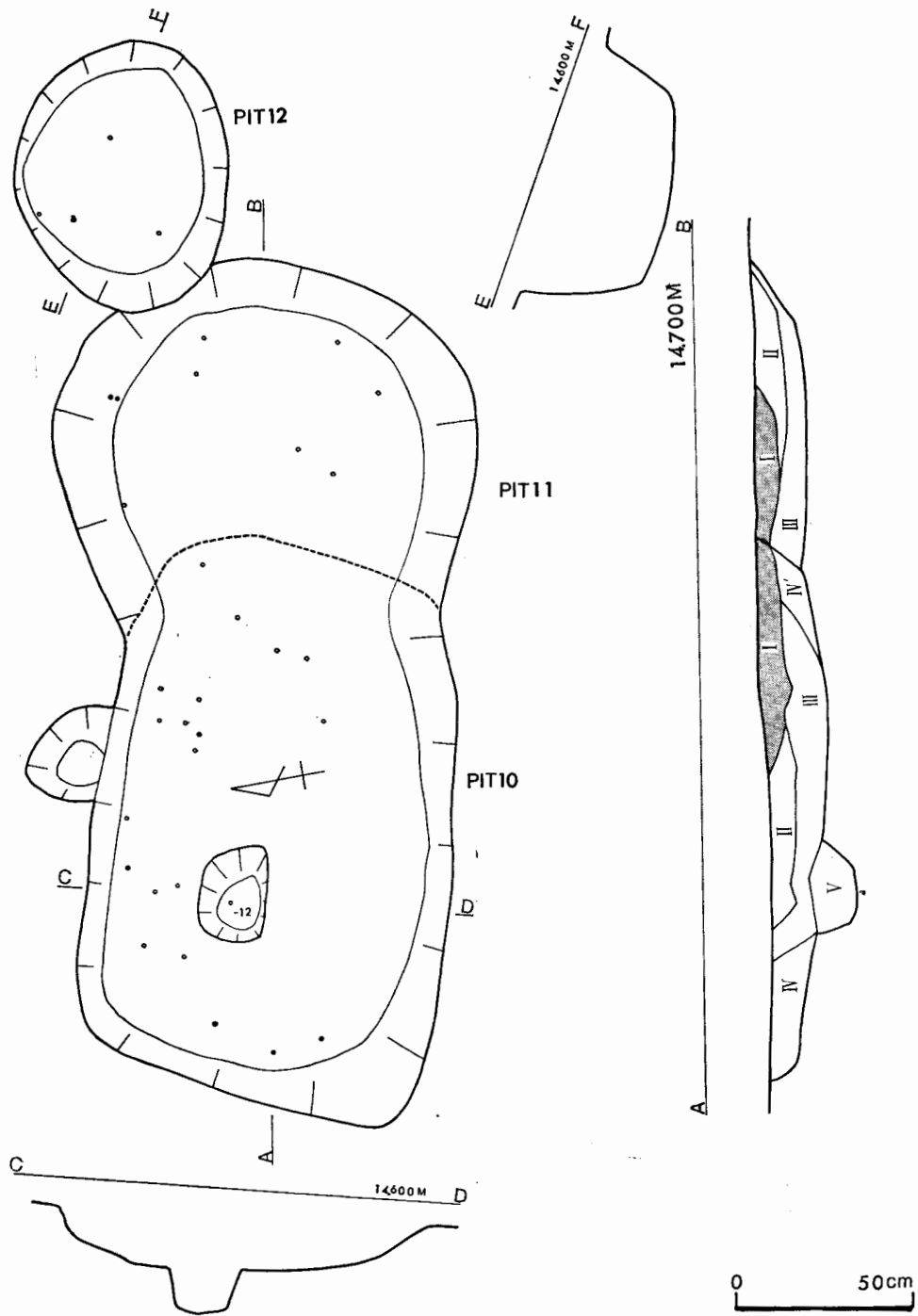
遺物 (第24図16～20, 図版18B, 19B)

遺物は、土器片11点、剥片3点、礫12点、骨片1点が出土している。出土層位は、各層に亘るが特に、第Ⅰ, Ⅰ'層と第Ⅴ層に多い。全体として、ピットの西北西側半分に集中する。

第24図16～20に示したのはその一部である。16は口唇部破片で、表面には擦痕がある。口唇部はほぼ平らに整形している。暗茶褐色を呈する。17, 18は、刻線文が施こされた擦文式土器片である。17は、明茶色、18は暗茶色を呈する。19は縦長剥片、20は同様の頭部破片で一側に二次加工がある。共に黒耀石。(上野秀一)



第32図 第9号ピット実測図



第33図 第10号, 第11号, 第12号ピット実測図

第10・11・12号ピット (第33図, 第24図12~15, 図版16B, 18B, 19B)

第10・11号ピットは重複ピットである。セクションで観察すると第10号の方が新しい。第10号ピットは、壙口160×102 cmの隅丸長方形のピットで、長軸は東南東—西北西方向で、立ち上がりは45°の角度で立ち上がり、深さは17 cmである。層準は、第Ⅰ層、黒色土。第Ⅱ層、暗黒褐色土。第Ⅲ層、暗黄褐色土でやや粘質を帯びる。第Ⅳ、Ⅳ'層各々褐色土。黄褐色土。第Ⅴ層は黒色土で、小ピットの中に詰っている土壌で、ピット底面に至って存在を確認する。第Ⅰ～Ⅲ層は、底面に沿ってなだらかに堆積し、第Ⅳ層は壁沿いのみ存在している。本ピットには、ピット中央と北北東の壁に付属して28×19 cm前後のピットがある。中央の小ピットは、セクションから本ピットを穿った際に同時に開けられたものと判断される。遺物は、土器片5点、石器1点、黒耀石の削片2点、河原石11個がピットの北及び東側半分と西側壁沿いに点在する。出土層位は、第Ⅰ～Ⅱ層がほとんどで、若干第Ⅳ層から出土している。底面にはない。

第24図12~15に示したのは、第10号ピット出土遺物である。12は細かい貼付文と燃糸圧痕文、横走縄文の組み合わせで、口唇部には小突起と刻目がある。色調、明褐色。13は、胴部片で三角形列点文と横走縄文の組み合わせ、表は褐色、裏は黒色である。14は、表に軽い整形痕のある胴部土器片。色調は、茶色。15は、大形の円形搔器である。

第11号は、西北西側は、第10号ピットで切られているために、平面形は不明であるが、推定壙径118×117 cmの不整形円形と思われ、確認できる(東側の)立ち上がりはなだらかである。

層は、第Ⅰ層、クラックの入る黒色土A。第Ⅱ層、暗褐色土。第Ⅲ層、褐色土で、各層とも底面に沿ってなだらかに堆積している。遺物は、土器片(無文の胴部細片)2点、河原石7点が、第Ⅰ～Ⅱ層から出土している。出土状況は特にまとまりはない。

ピット12は、壙口73×62 cmの不整形円形のピットで、第11号ピットを若干切って掘り込まれている。長軸は、東—西方向である。深さ31 cmで深く、立ち上がりはやや急傾斜である。底面は、少し傾きをもつが、平らである。層準は確認できなかった。遺物は、まめつした胴部土器片1点と河原石3点が、底面近くから出土している。(上野秀一)

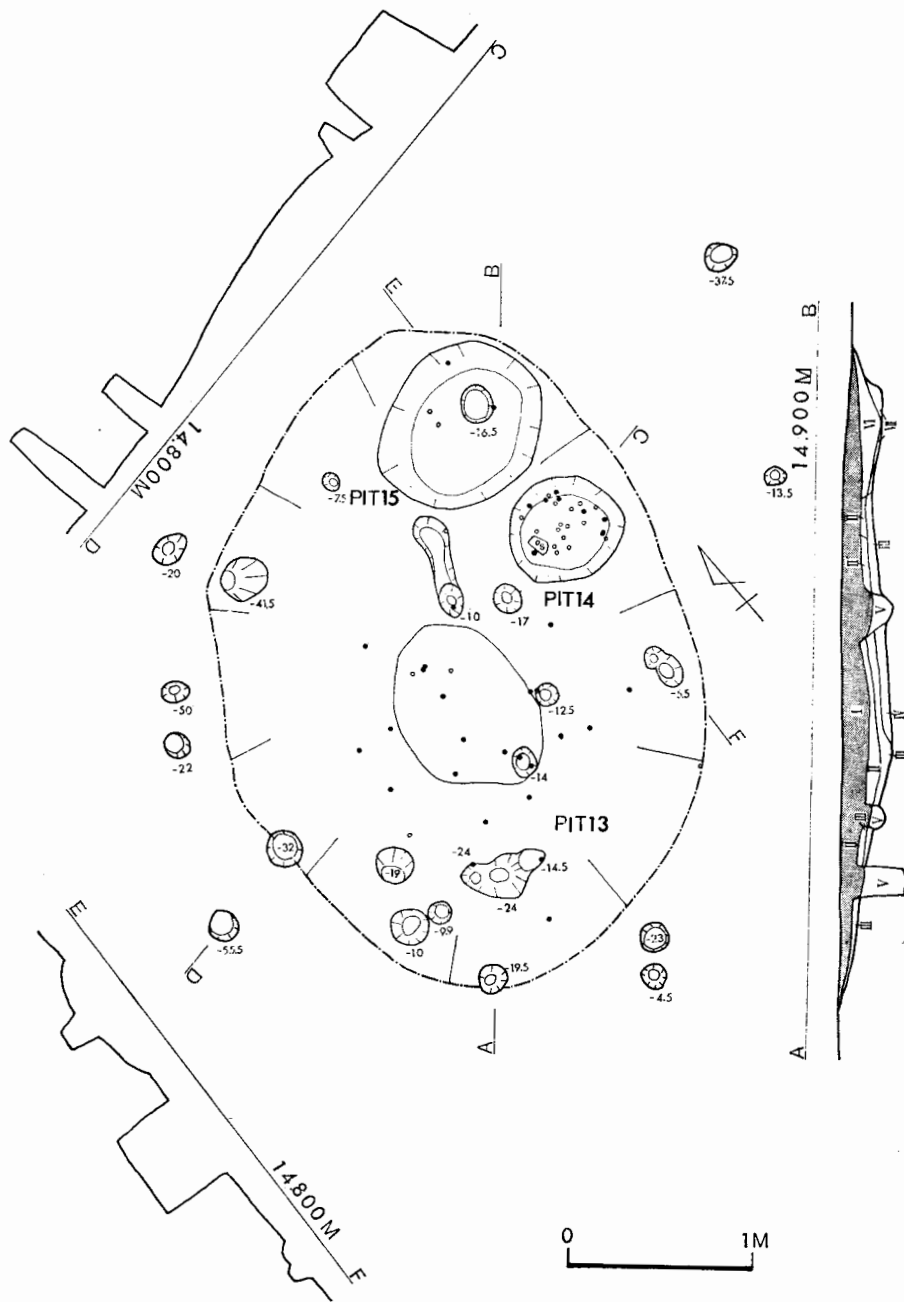
第13・14・15号ピット (第34・35図, 図版18B, 19B)

第13号ピットは、輪郭が不明瞭な浅い皿状のピットである。略々壙口358×250 cmの大きさで、深さは28 cmであるが、遺構であるかどうかは推測の域を出ない。この中に第14・15号のピット及び16個の小ピット、ピット外には8個の小ピットがある。

層準は、第Ⅰ層、黒色土Aで激しいクラックが入り、第Ⅱ、Ⅱ'層は暗黒褐色土で、Ⅱ'層は黒い部分が多い。第Ⅲ、Ⅳ層は各々暗茶褐色土、黄褐色粘質土で本ピットの底面に存在する。第Ⅴ層は暗灰黒色土で小ピット内容物であり、細かい粘土粒を数多く含む。第Ⅵ、Ⅶ層は、各々暗灰褐色土、暗茶褐色粘質土で、共に第15号ピットの埋土である。第Ⅷ層は地山。本ピット内外にある小ピット群は、セクションで観察する限り、本ピット埋没後に穿たれたものである。これらの小ピット

は、本ピットの輪郭線に沿った内外縁に集中するグループ20個と中央部にあるグループ4個に分けられるかもしれない。

遺物は、ピットの中央部にかなりまとまって、土器片23、礫5、削片1、石器1点が出土している。出土層位は、第Ⅰ層（22点）が主で、第Ⅱ層（5点）からも若干出土している。第35図1～8、



第34図 第13号、第14号、第15号ピット実測図

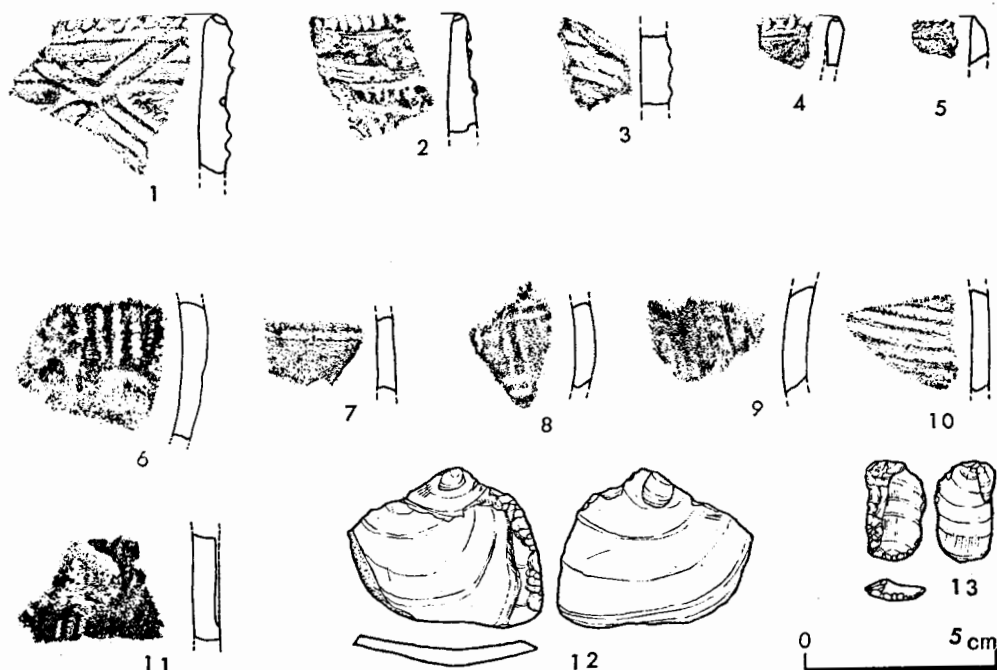
12に示したのがそれで、1は最初、横走の断面三角形の貼付文と刻文を施こし、その上にX字状に同様の貼付をしたものである。口唇部には刻目がある。ゆるく外湾する。色調は白っぽい明褐色である。2は、口唇部直下に少し幅広の横走する貼付文を施こし、その上に刻み目を入れている。口唇部にも刻目がある。色調は1と同じ。3は、横及び斜めに微隆起線文を走らせた口縁部破片である。表面の色調は、1と同じで粘土を塗っている。裏面は黒色である。4・5は口唇部細片で、共に刻目がある。6～8は胴部破片で、6は縦の縄文、7は横走する縞縄文、8は縦と横の撚糸文が付いている。他に、縄文ないし撚糸文の付いた胴部片が5片、沈線文のあるものが2片出土している。12は、幅広、矩形剥片の一侧に二次加工を加えた削器である。

第15号ピットは、壙口97×80 cm、深さ10 cmの不整楕円形のピットである。長軸西南西—東北東の方向。立ち上がりはなだらかである。小ピットと同様に第Ⅰ層から掘り込まれている。層準は前述した。

遺物は、木炭粉1点が底面から出土しただけである。

第14号ピット、壙口60×60 cm、深さ40 cmの不整円形のピットで、壁は略々垂直に立っている。セクション図をとる事が出来なかったが、大略以下の層準である。第Ⅰ層、黒色土(0～6 cm)、第Ⅱ層、暗黒褐色土(-6～-15 cm)、第Ⅲ層、暗茶褐色土(-15～-35 cm)で、粘土粒を含む、第Ⅳ層、黒褐色土(-35～-40 cm)である。

遺物は、土器片8点、礫12点、削片ないし剥片5点、石器1点で、上面から底面まで出土しているが、特に中位層(Ⅱ層)に多い。第35図9～11、13に示したのがそれで、9は内湾の傾向のある



第35図 第13号(1～8・12)、第14号(9～11・13)ピット出土遺物

胴部片で表には縦の筥整形がある。10は横走する燃糸文が走る。11は表面が一部剝脱しているが、縦方向の燃糸文が走っている。色調は、9が赤褐色、10は白っぽい明褐色、11は明褐色である。13は、矩形剝片の一端と一側に二次加工を入れた搔器である。なお過度に焼けた黒耀石の削片が1点出土している。(上野秀一)

第16・17・18・19号ピット (第36図, 図版17A)

四連ピットである。16・17・18の三つのピットは、北東—南西方向に3つ連なっており、セクションの観察から、中央の第17号ピットが一番新しい。第18号と第19号との新旧関係は不明である。

第16号ピットは、現存の大きさは116×110 cmで、南西部は第17号ピットで切られており不明である。推定形状は不整楕円形と思われ、長軸は北東—南西方向。深さは19 cmで確認出来る北東側の立ち上がりはややなだらかである。ピット内中央と北側隅の壁より小ピットがある。

第17号ピットは、壙口116×115 cmで、推定される形状は不整円形である。深さ17 cmで、立ち上がりはややなだらかで西側壁(推定)隅に小ピットが1個ある。

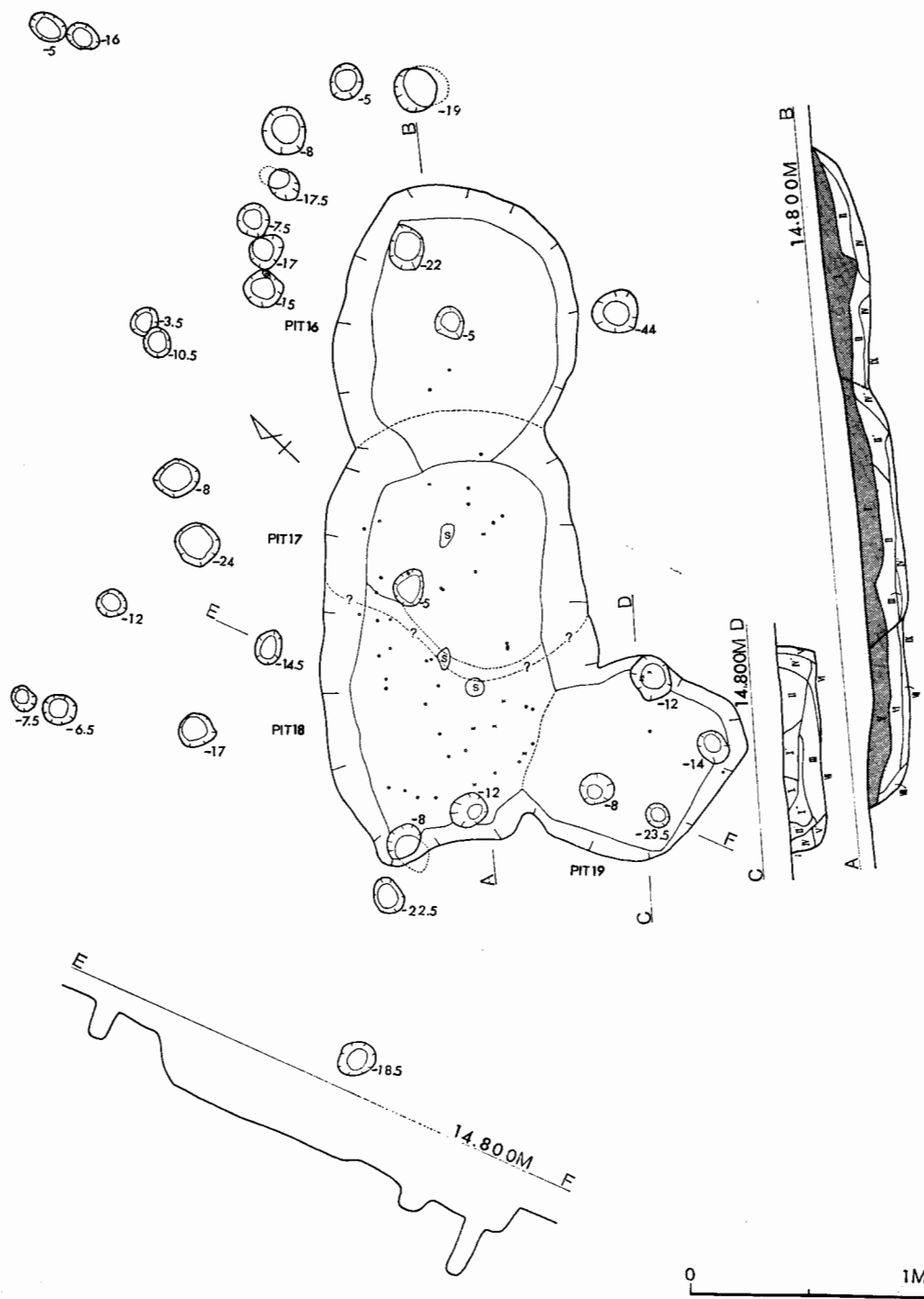
第18号ピットは、現存の大きさ90×75 cmで北東～南南東側は、各々第17・19号ピットで切られている。推定される形状は不整四角形と思われる。深さ16 cmで、立ち上がりはやや急傾斜である。南西の壁に2個の小ピットがある。その内西隅にある小ピットは斜めに掘り込まれている。

この3つのピットの層準は、第16・17号は、第Ⅰ層、黒色土Bで吸湿性に富み、第Ⅱ、Ⅱ'層は、黒褐色土で粘土粒を混じるが、Ⅱ層の方が全体に暗い。第Ⅲ層、黄色粘質土層で、黒色土が混じる。第Ⅳ、Ⅳ'層は各々黄褐色土、茶褐色砂質土で、Ⅳ層の方は黒色土が若干混入し、Ⅳ'層の方は粒子が細かく、サクサクした感じである。第17号ピットの層準は第Ⅴ層が黒色土Aでクラックが入り、第Ⅵ層は暗黒褐色土で粒子が細かく、粘土粒を含む。第Ⅶ層は黄褐色粘質土で炭化物が混じる。第Ⅷ層は黄褐色土で黒色土が混じる。第Ⅸ層は地山である。第16・17号ピットは、共に類似の堆積を示し、切り合い関係は判然としないが、第18号の方はこの二者とは異なっている。

第19号ピットは、第18号ピットと切り合っており、現存壙口83×80 cmの不整形のピットと思われる。深さ18 cmで、立ち上がりはかなり急傾斜である。第Ⅰ、Ⅰ'、Ⅰ''層は暗茶褐色土で、Ⅰ層の方には黒色土を、Ⅰ''層は粘土粒を混じる。第Ⅱ、Ⅱ'層は黒褐色土で、Ⅱ層には粘土粒を混じ、Ⅱ'層は全体に暗い。第Ⅲ層は暗茶褐色土で、粘土粒と黒色土を混入する。第Ⅳ、Ⅳ'層は茶褐色土で、粘土粒を混入し、粒子が細かい。Ⅳ'層の方は粘質を帯びる。第Ⅴ、Ⅴ'層は黄褐色土で、粒子は粗い。Ⅴ'層の方は炭化物を含む。第Ⅵ層は茶褐色粘質土で、やはり炭化物を含んでいる。第Ⅶ層は地山である。第Ⅰ、Ⅲ層は底面に沿い堆積し、第Ⅳ、Ⅴ層は壁に沿って堆積している。このピットでは覆土上面に黒色土AないしBの層はない。小ピットが4個各コーナー付近にある。

なお、この四連ピットの外側に23個の小ピットが認められる。四連ピットとの関連は不明である。その内第17号ピットの北西側、-24の小ピットからは骨粉、縄文の付いた胴部土器片各1点、同様に第18号ピットの北西側、-14.5の小ピットからはやはり縄文のついた胴部土器片1点がみつかり

ている。(上野秀一)



第36図 第16号, 第17号, 第18号, 第19号ピット実測図

遺物

(第37図, 図版18B, 19B)

遺物は第16号ピットからは、河原石2点(第Ⅰ層)が出土したのみである。

第17号ピットからは、覆土のⅠ～Ⅱ層から土器片9点、剥片・削片5点、河原石6点が出土している。分布は散発的である。第37図3, 6に示したのがそれで、3は、

微隆起線文と刻文の組み合わせたもの(後北C₂式)で、色調は明褐色。6は、矩形の剥片である。

第18号ピットからは、土器片8点、黒耀石の削片1点、白メノウ1点、河原石12点が、出土している。おおむね、Ⅰ～Ⅱ層が主で、土器片1点だけⅦ層から出土している。また骨粉がピットの南東部に集中して、第Ⅴ～Ⅶ層から出土している(ただⅠ層出土が1点ある)。第37図2, 4に示したのは本ピット出土遺物で、2は、微隆起線文が横と縦、斜めに走っている(第3類土器)。色調は、裏面は黒色、表面は黄土を塗っている。4は、裏面が剥脱した胴部片で、表面は無文であるが、赤色粘土を塗っている。

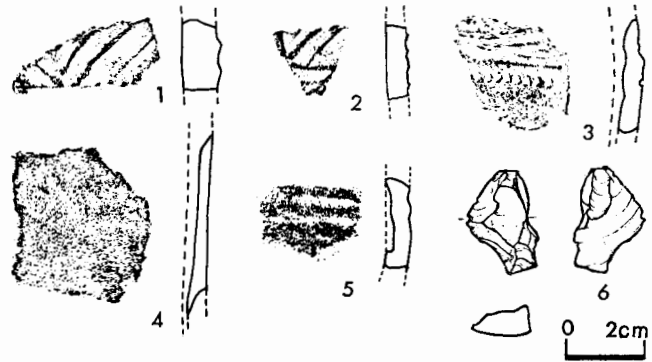
第19号ピットは、土器片1点(Ⅱ～Ⅲ層)、白メノウの削片1点(Ⅳ層)と骨粉3点が北東隅の小ピットに集中して出土している(Ⅱ, Ⅳ'層)。第37図1は、本ピットから出土したもので、微隆起線文が斜めに走り、表面は炭化物が付着し黒光りしている。(上野秀一)

第20・21号ピット(第38, 39図, 第19図6, 図版17B, 18B, 19B)

第20号, 第21号ピットとは重複関係にあり、セクションによれば、第21号ピットが新しく構築されている。第21号ピットは、壙口120×101 cmの略方形を呈する。長軸は北北西—南南東である。壁立ち上がりは、重複関係の見られる北側を除いて、なだらかであり、深さは最大13 cmを算する。壙底は南に向ってやや傾斜しているが平坦である。北西隅に径約9.5 cm, 深さ9 cmの小ピットがあり、南東隅には後世の攪乱によるピットが見られる。層位は、上層より第Ⅰ層黒色土B, 第Ⅱ層暗黒褐色土で地山の粘土粒が混入し、第Ⅱ'層は第Ⅱ層よりやや黒味を帯び、木炭粒が若干混入している。第Ⅲ層は暗茶褐色土でやや赤色を帯びており、第Ⅲ'層としたものは、第Ⅲ層よりやや赤色が少なく、更に粘質も弱い。第Ⅳ層は壙底となり地山で、淡黄褐色砂層である。

第20, 21号ピット周辺には、39個の小ピット群が見られ、その大略は図に示した如くである。これらのピット群が、本ピットに属したものであるか否かについては定かではない。

出土遺物は、第Ⅰ層より土器片2点、黒耀石片1点、小さな河原石3点、第Ⅱ, Ⅱ'層より小さな河原石3点、第Ⅲ, Ⅲ'層より土器片1点、やや大き目の河原石1点が出土している。更に第Ⅰ

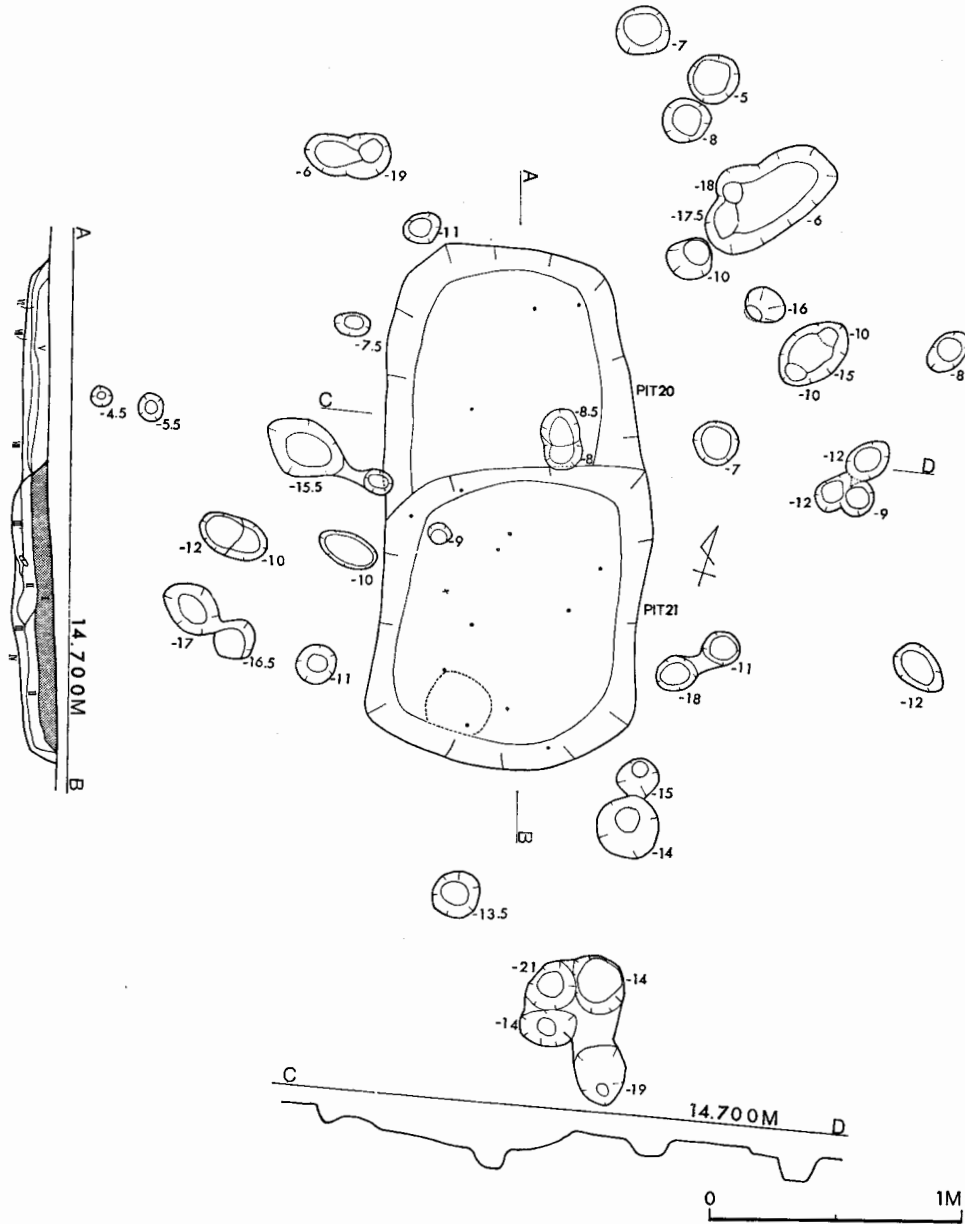


第37図 第17号(3・6), 第18号(2・4), 第19号(1)
ピット出土遺物

層より木炭片1点と、骨とおぼしき小さな粉末状のものが1点出土している。

第39図1は、底部土器片で、裏面は剝脱している。底径が小さく、急に胴部がふくらむ。同図3は横走の撚糸文と三角形列点文がある。同図4は原石面を幅広く残し、ブロックを単に割裂したものである。第19図6は、平底の底部片である。かなり張り出しがある。無文、色調は褐色。

第20号ピットは、横口96×(82)cmの略方形を呈する。長軸は北北西—南南東である。壁立ち

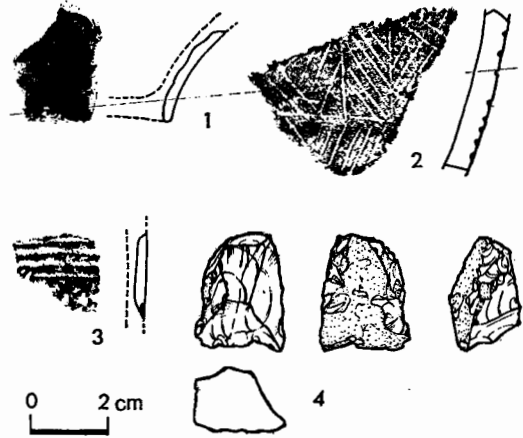


第38図 第20号, 第21号ピット実測図

上りは、第21号ピットによって切断れさている部分を除いてすべてなだらかである。深さ約10 cmである。墳底は、長軸に沿っては平坦であるが、略東西に見ると中央に向かってなだらかに傾斜する。北東に径約14 cm、深さ約8 cmの小ピットが2個重複して存在する。

層位は、第Ⅴ層茶褐色土、第Ⅵ層褐色土、第Ⅶ層黄褐色土、第Ⅷ層は地山の黄色粘土層である。覆土上面には黒色土はない、第21号ピット底面は、淡黄褐色砂層であるが、これは本地域全般の層位で述べた如く、第Ⅷ層黄色粘土層を若干掘り進むと第Ⅳ層に見る淡黄褐色砂層があらわれる。

出土遺物は、第Ⅰ層より軽い張り出しのある底部細片1点、第Ⅱ層より擦文式土器片1点（第39図2）、小さな河原石1個が出土している。（加藤邦雄）



第39図 第20号(2)、第21号(1・3・4)ピット出土遺物

第22号ピット（第40図1、図版14B）

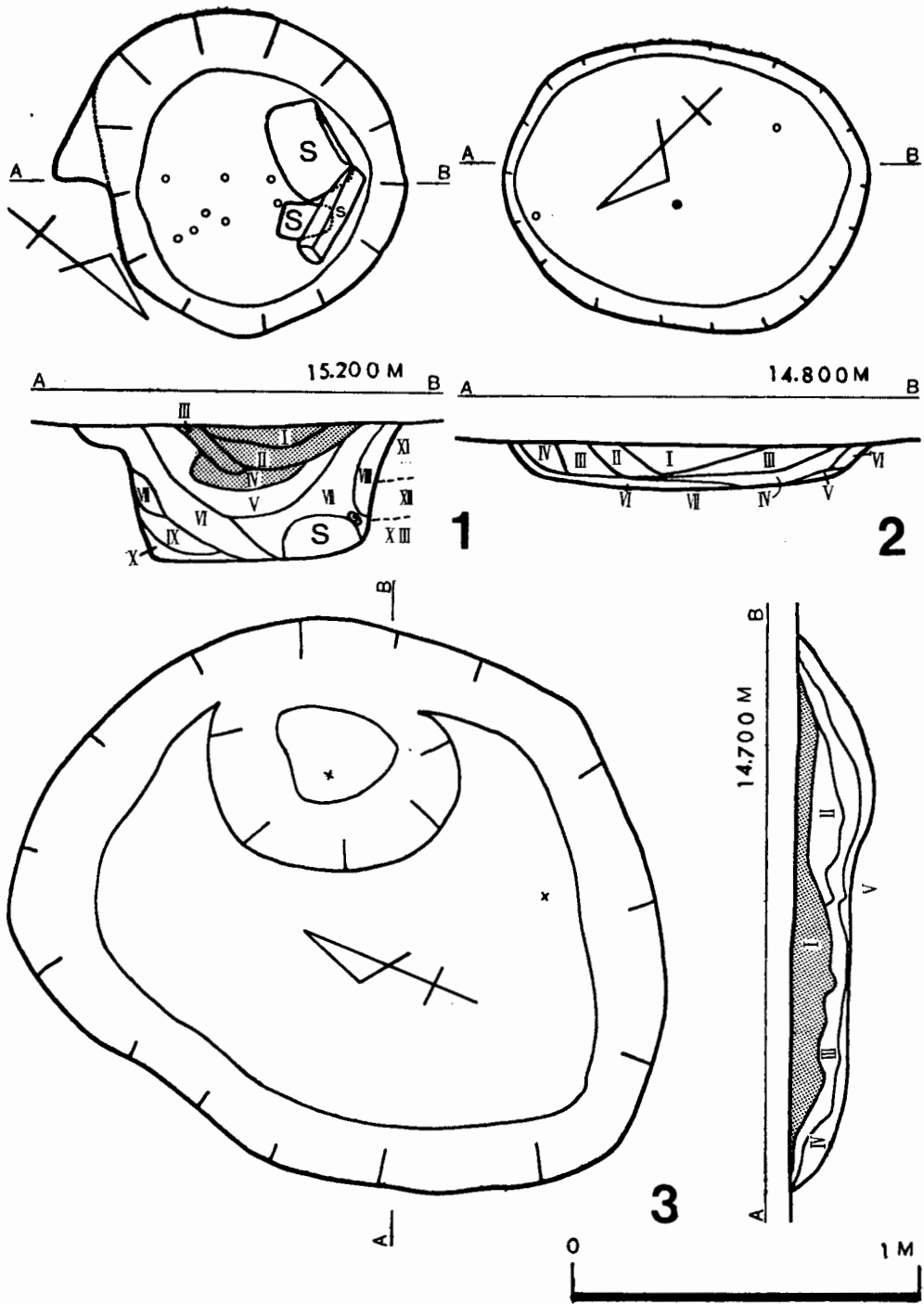
墳口95×90 cm、深さ45 cmを算し、一部に攪乱の跡が認められる不整形のピットである。壁は四周ともかなり急な立ち上がりを示している。底面は平坦である。層位は、第Ⅰ層黒色土A。第Ⅱ、Ⅲ層はⅠ層より更に黒い黒色土Bで、Ⅲ層の方がやや褐色味が強い。第Ⅳ層、第Ⅰ層と第Ⅱ層のほぼ中間色とも言える色である。第Ⅴ層暗黒褐色土、第Ⅵ層黒褐色土でやや地山の粘土粒を混入している。第Ⅶ層、第Ⅵ層より粘土粒を多く混入する。第Ⅷ層、第Ⅶ層より更に多く粘土粒を混入し、暗褐色に近い。第Ⅸ層、暗褐色土。第Ⅹ層褐色土である。ピット壁を見ると地山は、以下の3層に分かれる。第Ⅺ層黄褐色粘土層、第Ⅻ層赤黄褐色粘土層、第Ⅼ層淡黄褐色粘質砂層となる。

北北西部分の底面に接して人頭大の河原石が3個認められた。（加藤邦雄）

遺物（第41図、図版20A）

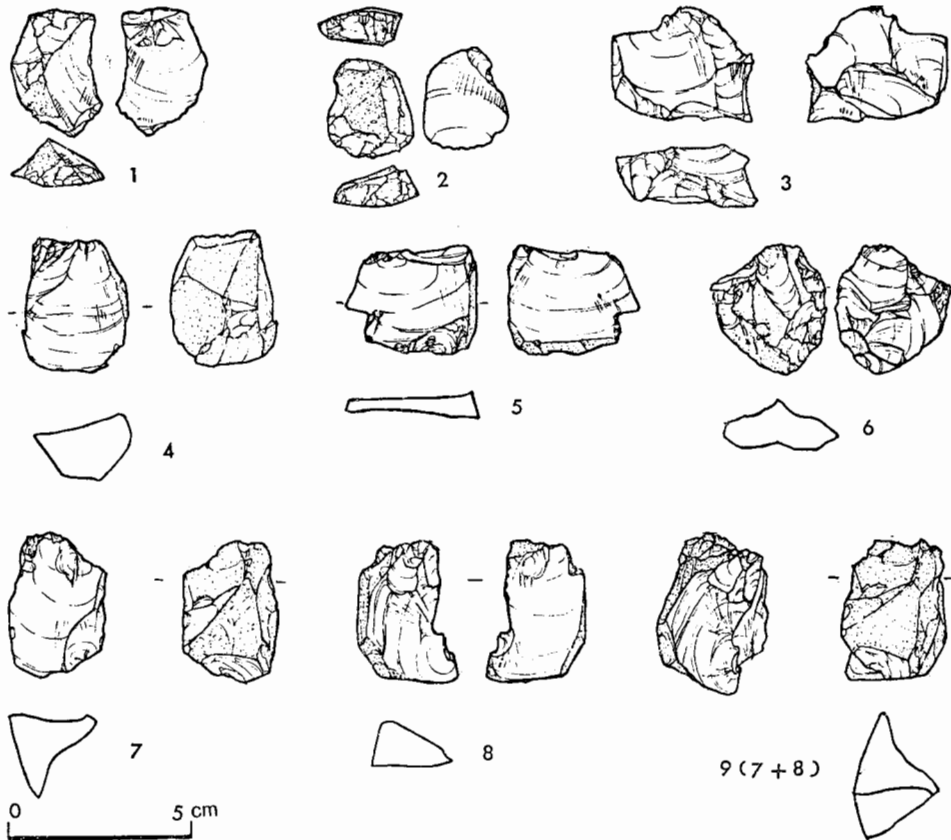
出土遺物は、土器を全く検出することが出来ず、石器及び剥片のみが、やや東に偏して発見された。第Ⅰ層より第Ⅳ層を遺物取上げの際、第Ⅰ層とし、以下第Ⅱ層として処理した。第Ⅰ層からは黒耀石の剥片2点、第Ⅱ層からは小形搔器2点、扁平石核1点、剥片4点、小さな河原石1点が出土している。

第41図の1、2は搔器で、2は両端に刃部を作っている。3は扁平石核、矩形ないし扇状の剥片を生産している。両面及び側面から剥片を生産しているが、最終剥離は、右図面上端を打面にして左図面からとっている。4、5、7、8は同一石質の黒耀石の部厚い矩形剥片で、内7と8は接合した。9はその接合図である。6は腹面にパルプが3点ある珍しい資料である。恐らく腹面図下部



第40図 第22号(1), 第23号(2), 第24号(3) ビット実測図

にあるバルブが本来の打点と思われ、打撃を加える際に、台石 (Anvil) としてかなり硬く、凹凸のあるものの上で叩いたため、逆の方からも力が加わった結果、同図上の2つのバルブが出来たものと解される。上の2つは、リングの入り方が細かく凹凸に富み、不自然である。背面の側には二次加工がある。(上野秀一)



第41図 第22号ピット出土遺物

第23号ピット (第40図2, 第43図6)

坑口は106×82 cm、深さ15 cmの東北—南西に長軸をもつ楕円形ピットで、ややなだらかに立ち上がっている。覆土は、第Ⅰ層、Ⅱ層は各々黒褐色土、暗灰茶褐色土と区分され、第Ⅲ層は茶褐色土で粘土粒を含む。第Ⅳ層はⅢ層よりもかなり多量の粘土粒を含む暗茶褐色土である。第Ⅴ層、褐色粘質土。第Ⅵ層、茶褐色土。第Ⅶ層は、地山である。覆土上面に黒色土はない。尚、各層は底に沿いつつ皿状になだらかに堆積している。

遺物は、土器片1点、礫2点がいずれもⅢ層より出土している。第43図6は、胴部土器片で、無文である。少し胴張りする。色調は褐色。(笠井衛二)

第24号ピット (第40図3)

横口190×140 cmの楕円形に近い形で、深さは22 cmである。層は、第Ⅰ層、クラックが入る黒色土A。第Ⅱ層、若干粘質を帯びる黒褐色土。第Ⅲ層、黒色土混入の黄褐色土。第Ⅳ層、固い黄褐色土で炭化物を含んでいる。第Ⅴ層は、地山である。

壁は、やわらかく軟弱で立ち上がりはゆるやかである。東北東壁に接して直径40 cm、深さ10 cmのくぼみが見られる。

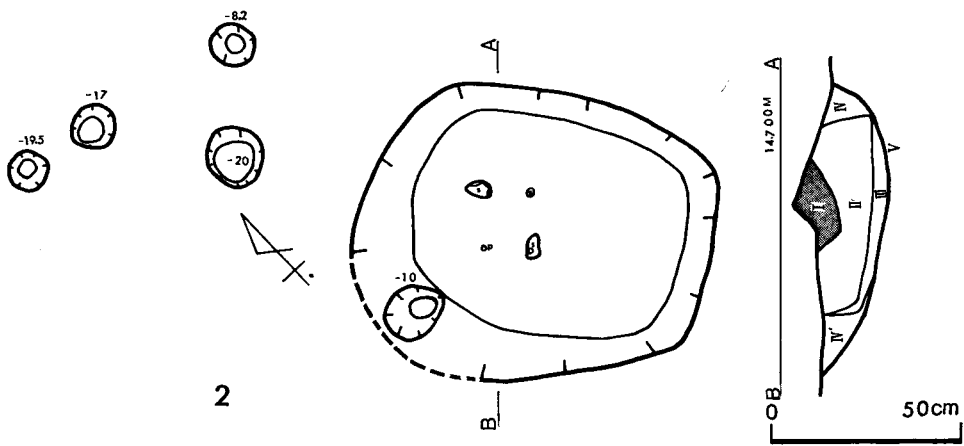
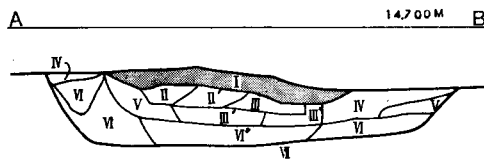
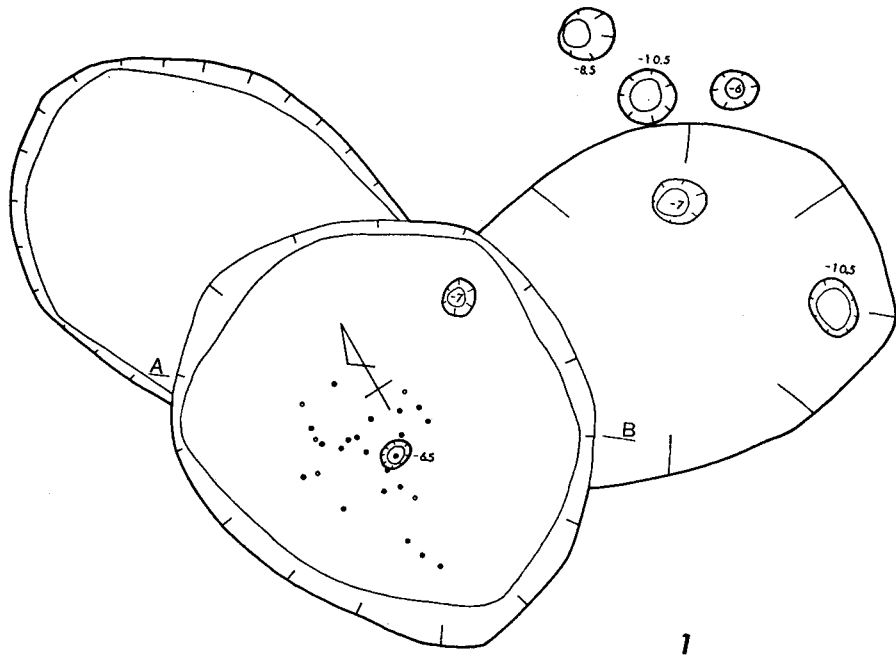
遺物は、覆土中、坑底面ともに一切みられないが覆土中に炭化物が含まれている。(羽賀憲二)

第25号ピット (第42図1, 第43図10, 11, 図版16B)

横口123×105 cmの不整形のピットで、長軸は、北北西—南南東の方向である。深さ21 cmで、立ち上がりは約45°の角度をもって立ち上がり、底面は平らである。第Ⅰ層は、黒色土Aで激しいクラックが入る。第Ⅱ、Ⅱ'層は、暗黒褐色土で、Ⅱ層には粘土粒を若干含み、Ⅱ'層には炭をかなり含んでいる。第Ⅲ、Ⅲ'、Ⅲ''層は暗茶褐色土で、共に粘土粒が混じるが、Ⅲ→Ⅲ'→Ⅲ''の順で粘土粒の含む量が多くなる。第Ⅳ層は暗灰褐色土で、平均的に粘土を含む。第Ⅴ層は暗褐色粘質土、第Ⅵ、Ⅵ'、Ⅵ''層は褐色粘質土で、Ⅵ'層は全体に暗く、Ⅵ''層は縞状に暗い部分がある。第Ⅶ層は地山である。第Ⅰ～Ⅲ、Ⅵ層は底面に沿って皿状に堆積しており、Ⅳ、Ⅴ層は壁に沿って存在する。本ピットの中央及び北東側底面は、径10 cm前後の小ピットが各1個ある。中央の小ピットは第Ⅱ層より掘り込まれており、ピット埋戻後直後に掘られた本ピットと関連するものである。また、北側には86×66 cmの立ち上がり確認できる浅い陥込みがあり、東側にも略々同規模の浅い皿状のピットがある。さらにこの中、及び、その北側には、径14 cm前後の小ピットが5個ある。これらの浅い陥込み、小ピット群は、ピット中央にあるものを除いて、その掘り込み面が未確認である事もあって、本号ピットとの関連は判然としない。

遺物は、ピット中央部の西側にまとまりをもって出土している。出土層位は覆土の第Ⅰ層が殆んどで、第Ⅱ層から若干出土しているのみである。土器片22点、円礫が5点である。

第43図10, 11に示したのは、本ピット出土土器で、10, 11共に同一個体と思われる。焼成は良く、表面には、縦の擦痕があり、一部炭化物が付着している。色は暗茶色で、裏は、よく研磨され褐色を呈する。少し胴張りする。(上野秀一)



第42図 第25号(1), 第26号(2)ピット実測図

第26号ピット (第42図2)

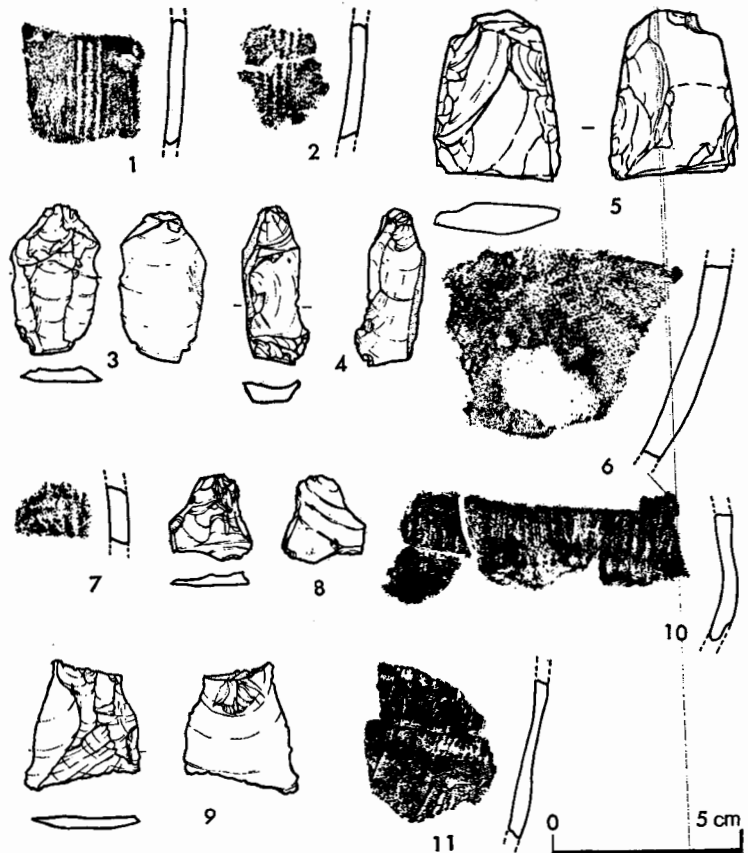
壙口97×77cmの丸みを帯びた不整形である。西側の立ち上がりは未確認である。深さは20cmで北東の立ち上がりはきつく、南西はゆるい。長軸の方位は略々北西—南東方向である。覆土は、第Ⅰ層、少し明るい黒色土A。第Ⅱ層、暗黒褐色土で粘土粒を多少含む。共に皿状に堆積している。第Ⅲ層は暗黄褐色粘質土で、底面に沿って存在する。第Ⅳ、Ⅳ'層は、各々黄褐色粘質土、茶褐色粘質土で、壁に沿って堆積している。第Ⅴ層は地山である。遺物は、無文の胴部細片1点が第Ⅱ層から、大きな円礫及びその破片が、第Ⅰ～Ⅱ層から3点出土している。なお西側壁に、17×14cm、深さ約10cmの小ピットがあり、またピットの長軸方向沿いに同様な小ピットが4個点在する。16×15cmを最大とし、深さは8.2～20cmである。ピットとの関連、性格等は不明である。

(上野 秀一)

第27号ピット (第44図1, 第43図1～4, 図版15A, 20A)

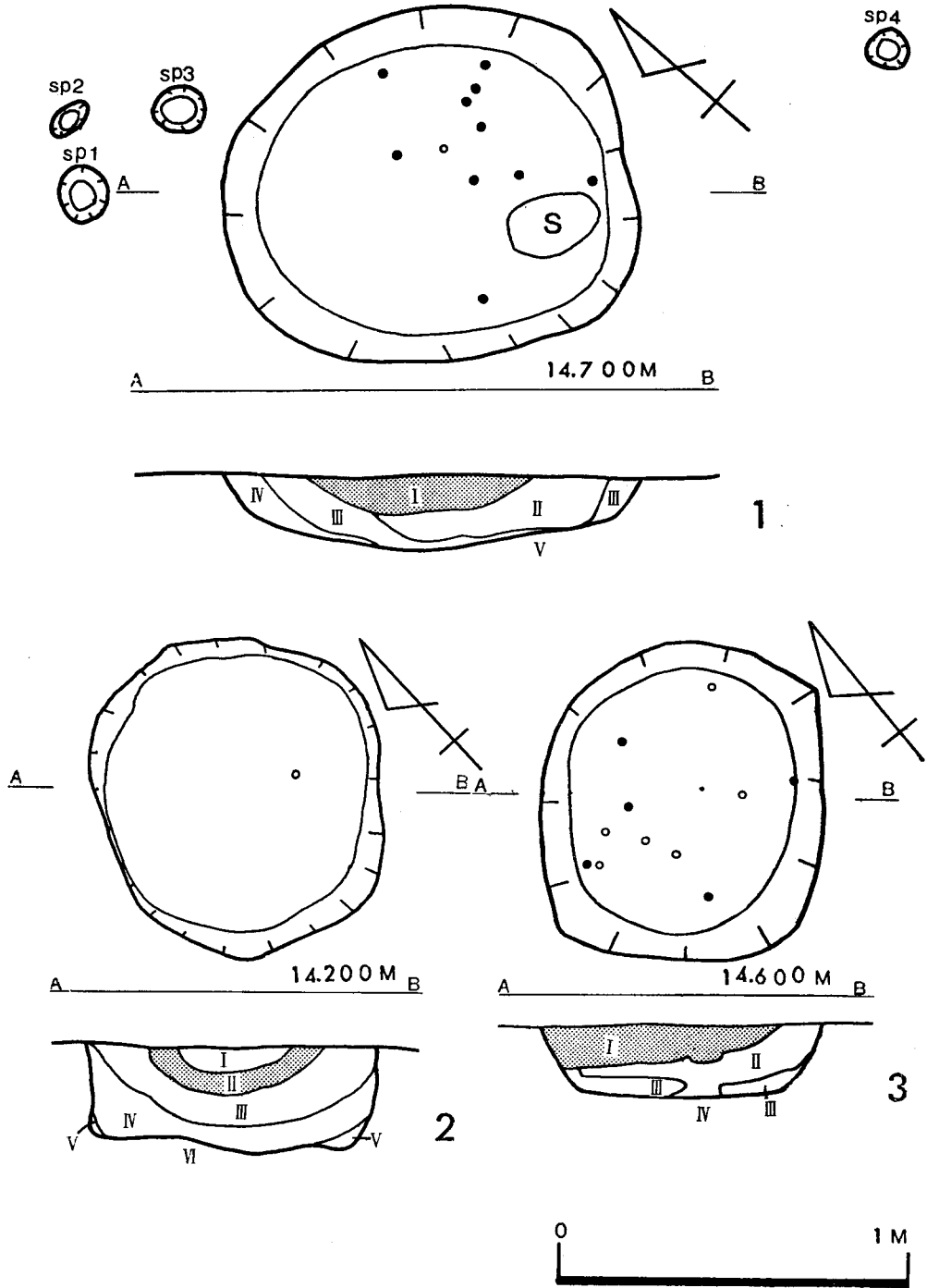
壙口130×117cmを数える楕円形のピットである。深さは掘り込み面より22cm。長軸は、北西—南東方向である。層準は、第Ⅰ層黒色土、第Ⅱ層黒褐色粘質土、第Ⅲ層、若干かたい黒褐色粘質土で、黄色味を帯びる。第Ⅳ層、黒色土混入の黄褐色粘質土で、かたくしまっている。第Ⅴ層は地山である。壁は、かたくしまっており、なだらかに傾斜し立ち上がる。

遺物は、壙底面には一切みられず、覆土中に数点の土器小片が出土したのみである。南東部に壙底面より数cm浮いた状態で直径30cm程の大型の河原石が一個置かれてあった。本ピットの周囲には、柱穴状の小



第43図 第23号(6), 第25号(10・11), 第27号(1～4), 第29号(7～9)
第30号(5)ピット出土遺物

ピットが4個検出されているが、本ピットに伴った物かいなかは不明である。遺物は縞縄文の胴部土器小片3点（第43図1～2）、帯縄文1、黒耀石の縦長剥片2点（第43図3～4）が出土している。4は、扁平石核の関係剥片かもしれない。（羽賀 憲二）



第44図 第27号(1), 第28号(2), 第29号(3)ピット実測図

第 28 号ピット (第 44 図 2)

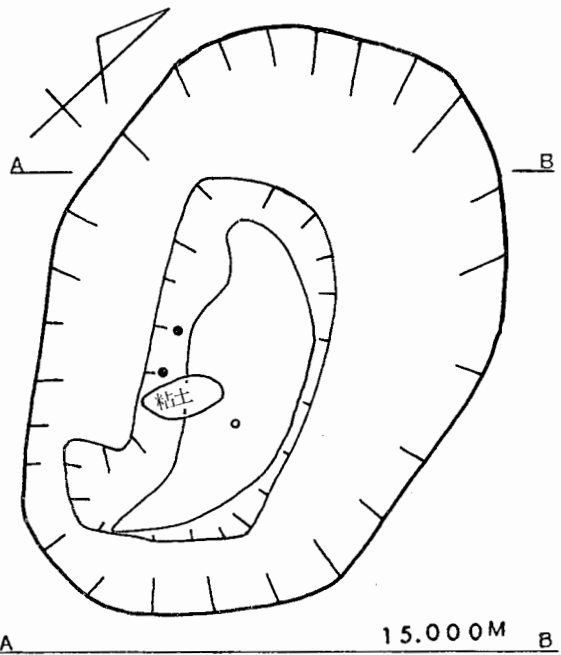
坑口93×83 cmの不整円形で、深さ33cm、かなり急傾斜の立ち上がりを示すピットである。層位は第Ⅰ層、第Ⅱ層各々黒褐色土、黒色土Aで、Ⅰ層は攪乱層の可能性もある。第Ⅲ層は黄褐色土内に黒色土が混入しており、第Ⅰ、Ⅲ層とも粘質に富んでいる。第Ⅳ層は黄褐色土で固くしまっており、第Ⅴ層の褐色土には黄褐色土の流入がみられる。第Ⅵ層は地山。層は全体に底面に沿って皿状になだらかに堆積している。遺物は礫(Ⅳ層)、黒耀石の剥片各1点しか出土していない。(笠井衛二)

第 29 号ピット (第 44 図 3)

坑口 93×80 cm の不整形のピットである。長軸は北東—南西方向。遺構確認面よりの深さは22cmで、底面は平らで立ち上りは約45°の角度である。覆土堆積は、第Ⅰ層黒色土Aで西側に深く堆積している。第Ⅱ層黒褐色土で、中心部では第Ⅲ層を切り底面に達する。第Ⅲ層は暗黒褐色土で壁に沿って存在する。(内山 真澄)

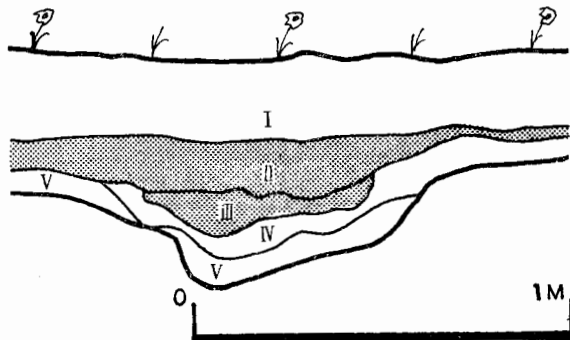
遺 物 (第43図7~9, 図版20A)

遺物は、Ⅰ層より土器片1点、剥片3点、礫1点、Ⅱ層より土器片3点、Ⅲ層より土器片1点、礫1点が検出されている。第43図7~9に示したのが、その1部である。7は、縦と横に縄文の付いた胴部土器片(続縄文)、8、9は、黒耀石の矩形剥片で、2の裏面に一部加工があり、全面軽く焼けている。(上野 秀一)



第 30 号ピット (第45図, 第43図5, 図版20A)

坑口 165×115 cm の長楕円形のピットで、深さは、25cmで立ち上がりはなだらかで、底面は傾斜している。長軸は北北西—南南東の方向である。層は、第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ、Ⅲ層は黒色土で、Ⅱ層は非常に硬くブロック状にとれ(黒色土A)、Ⅲ層は粘質に富む(黒色土B)。第Ⅳ層は茶褐色



第 45 図 第 30 号ピット実測図

粘質土で若干の粘性があり粒子は細かい。第Ⅴ層は黄褐色土で黒色土が混じっていて、粒子は細かい。層の堆積は、第Ⅰ、Ⅱ層はピット埋没後の堆積で、直接的にピットとは関連しない。第Ⅲ層は底面に沿って皿状に堆積している、第Ⅳ、Ⅴ層はピットの外から底面に沿って流れ込む様に堆積している。又、底面から壁ぎわに沿って22×11cmのブロック状の粘土塊が存在した。遺物は局部磨製石斧の柄部破片1点(石質は、緑色片岩)(第43図5)、土器細片2点、(胴部片、底部片各1点)が検出されているが、各々、第Ⅳ～Ⅴ層から出土している。全体として遺物は、南側半分から出土している。

(長谷川 克浩)

第31号ピット (第46図1)

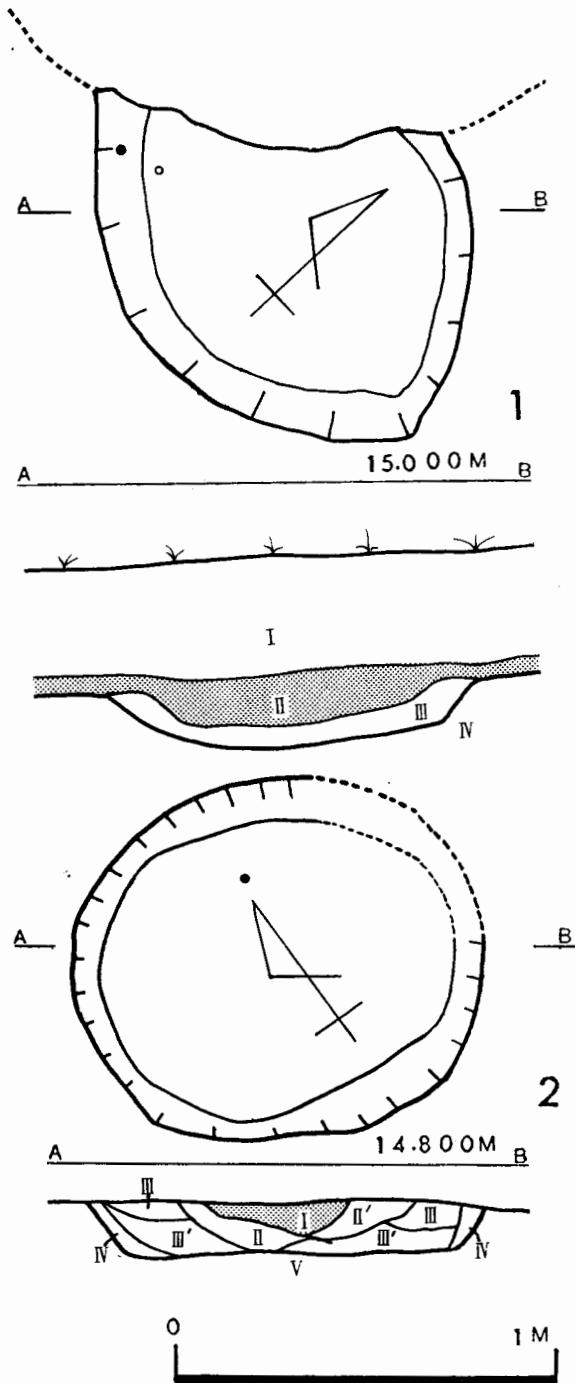
北西部分は攪乱穴があり、現存部は3分の2程度である。現存部にて100×75cmで楕円形を呈したと推定される。深さは20cmである。層は、第Ⅰ層耕作土。第Ⅱ層、粘質にとむ黒色土B。第Ⅲ層、炭化物を含む黄褐色粘質土。第Ⅳ層、地山である。

遺物は、坑底面には一切みられず、覆土中に土器細片1点が含まれていた。

壁の状態は、かたくしまっており、なだらかな立ち上がりである。(羽賀 憲二)

第32号ピット (第46図2, 第19図4)

坑口108×95cmで不整円形を呈する。深さ15cmで東側四半分の立ち上がりは未確認である。壁は、やや急傾斜で、底面は平らである。覆土は、第Ⅰ層が黒色土Aでクラックが入り、第Ⅱ、Ⅱ'層は、黒褐色土で、Ⅱ層の方が全体に暗い。第Ⅲ、Ⅲ'層は、茶褐色土で、Ⅲ'層の方が明るく小粒の粘土粒を含む。ピットの壁に沿って存在

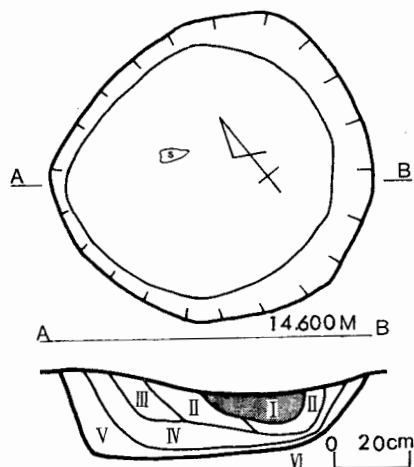


第46図 第31号(1), 第32号(2)ピット実測図

する。第Ⅳ層は、暗黄褐色粘質土で、壁に沿ってある。第Ⅴ層は地山である。遺物は、底面より、統縄文時代の揚底の、地文として燃糸文が縦についた底部土器片が1個出土しているのみである（第19図4）。ピットの性格は判然としない。（上野 秀一）

第33号ピット（第47図）

坑口83×79cmの不整円形のピットである。深さは22cmで、壁はしっかりしており、やや急傾斜に立ち上がっている。底面は平らである。覆土は、第Ⅰ層は少し明るい黒色土Aで、粘土粒を含み、第Ⅱ、Ⅱ'層は暗茶褐色土で、共に粘土粒を含むが、Ⅱ'層の方が全体に暗い。第Ⅲ層は茶褐色粘質土で、色調は第Ⅱ層と略々同様である。第Ⅳ、Ⅴ層は、各々暗褐色粘質土、褐色粘質土で、共にピットの壁、底面に沿って、皿状になだらかに堆積している。第Ⅵ層は地山（黄褐色粘土層）である。層の堆積は、全体に自然な層準を示している。遺物は、第Ⅲ層より半割の円礫が1点出土しているのみで、他に覆土、底面からは何ら検出されていない。覆土の埋没状態及び遺物の出土状況などを考察すると、古い時代の人為的な遺構であるかは、若干疑問を残す。（上野 秀一）



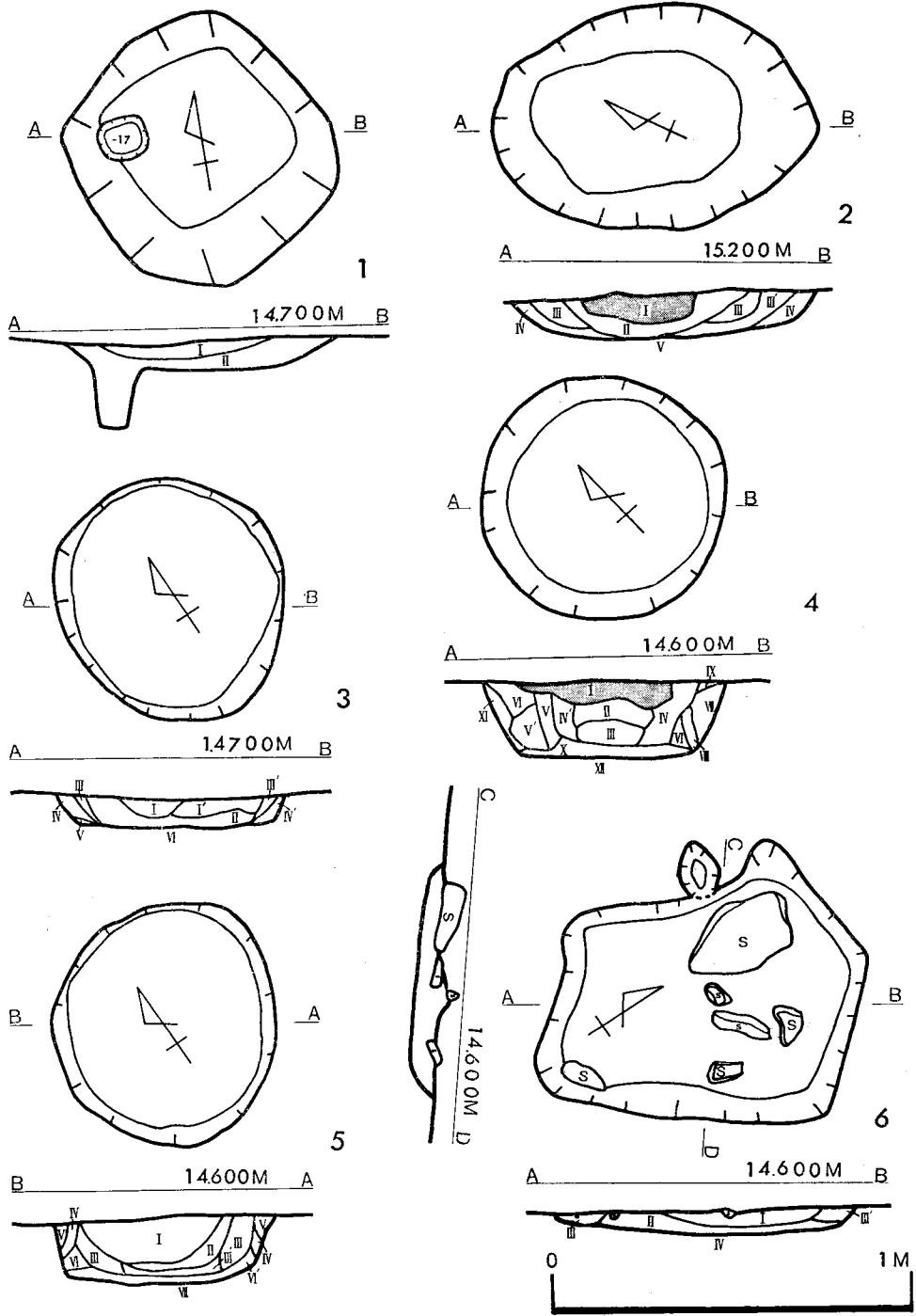
第47図 第33号ピット実測図

第34号ピット（第48図1）

坑口73×67cm、深さ9cmを算し隅丸方形を呈する。壁立ち上がりは、ごくなだらかであり、坑底は平坦である。西側コーナーに大きさ約12cm、深さ、坑底面より17cmの小ピットが存在する。層位は、第Ⅰ層、黒褐色土、第Ⅱ層、褐色土がレンズ状に堆積している。覆土上面には、黒色土が認められない。出土遺物、木炭等の発見は、全く出来ず、これが埋葬用に使われたピットであるとする積極的証左は何も認められなかった。（加藤 邦雄）

第35号ピット（第48図2）

坑口92×63cmの不整楕円形のピットである。長軸は北北西—南南東の方向である。深さは13cmで浅い。北西側の立ち上がりは、なだらかで、南東の立ち上がりは、やや急傾斜である。覆土は、第Ⅰ層、黒色土Bに近い暗黒褐色土で、若干の粘土粒を含み、第Ⅱ層は、暗茶褐色土で、かなりの粘土粒を含む。共になだらかに皿状に堆積している。第Ⅲ、Ⅲ'層は暗褐色土で共に多くの粘土粒を含むが、Ⅲ'層の方が全体に明るい。なお、この層は壁沿いに存在し、Ⅲ'層は南東部にのみ存在する。第Ⅳ層は褐色粘質土で、壁に沿ってある。第Ⅴ層は地山である。層堆積は、ピットの標準的な堆積を示している。遺物は、覆土からも何ら検出されていない。従って、年代、性格など判然としない。（上野 秀一）



第48図 第34号(1), 第35号(2), 第36号(3), 第37号(4), 第38号(5), 第39号(6)ピット実測図

第 36 号ピット (第 48 図 3)

坑口 70×65 cm の略々円形を呈し、深さ 8 cm で、立ち上がりは、やや傾斜がきつい。層は、第 I、I' 層は、暗茶褐色土で、I 層の方は粘土粒を含み、I' 層は土の粒子が粗い。第 II 層は、暗黒褐色土で、砂の粒子が点在する。両層共、底面に沿ってなだらかに堆積している。第 III、III' 層は、各々茶褐色土、暗茶色土、第 IV、IV' 層は、各々暗褐色土、褐色土で粘質を帯びる。III～IV 層は、壁に沿って存在する。第 V 層は灰褐粘質土で、セクションの南西隅の底面にのみある。第 VI 層は地山である。覆土上面には、黒色土はない。遺物は、何ら検出されていない。(上野 秀一)

第 37 号ピット (第 48 図 4)

坑口 68×68 cm の略々円形のピットである。深さは、23 cm で、立ち上がりは、かなり急傾斜である。層は、第 I 層黒色土 B。第 II 層黒褐色土。第 III 層暗黒褐色土。第 IV、IV' 層は暗茶褐色土で、IV' 層は粒子が粗い。第 V、V' 層は茶褐色土で、V' 層は、粘土粒を含む。第 VI 層、暗褐色土。第 VII、VII' 層は灰茶褐色土で、VII' 層は、粘土粒を若干含む。第 VIII 層、暗灰黒褐色土。第 XI 層、暗灰茶色土。第 X 層、褐色土で、多量に粘土粒を含む。第 XI 層、灰褐色土。第 XII 層は、地山である。層の堆積は、第 I～III 層、第 X 層は底面に沿って堆積し、第 IV'～VI 層、第 XI 層は、セクション図を見ると、北西の壁ぎわに沿って堆積しており、第 IV、第 VII～IX 層は南東壁ぎわに沿って堆積している。遺物は、何ら検出されていない。(長谷川克浩)

第 38 号ピット (第 48 図 5)

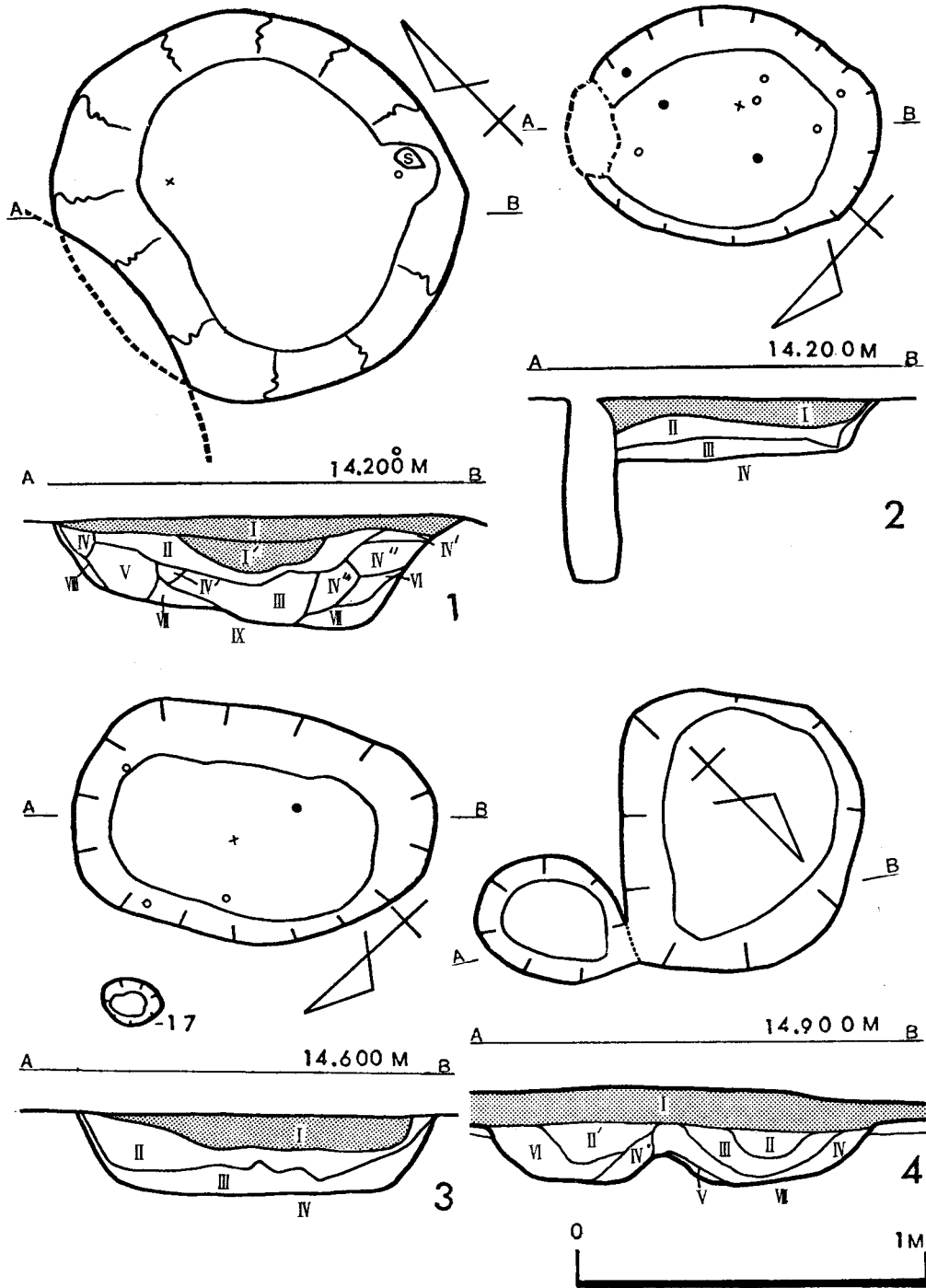
坑口 69×63 cm の不整円形のピットである。深さ 19 cm で、壁はかなり急傾斜に立ち上がり、底面はほぼ平らである。覆土は第 I 層、黒褐色土。第 II 層、暗黒褐色土で粘土粒を若干含み、第 III、III' 層は茶褐色土で、III' 層は粘土粒をかなり含む。第 IV 層、暗黄褐色土。第 V 層、暗黄褐色粘質土。第 VI、VI' 層は暗茶褐色土で、VI' 層にはかなりの粘土粒がみられる。第 VII 層は地山である。第 I～III' 層は坑底面に沿って皿状に堆積し、第 IV～VI 層は壁に沿って堆積している。第 VII 層は坑底面を覆っている。覆土上面に、黒色土は認められない。

遺物は全く出土していない。

(伊藤加代子)

第 39 号ピット (第 48 図 6)

坑口 97×77 cm の不整五角形のピットである。長軸は、北東一南西方向。遺構確認面からの深さは 8 cm で、断面形は皿状で、ゆるい立ち上がりである。層は、第 I、II 層、各々黒褐色土、黄褐色土で、ピットに沿って皿状に堆積しており、第 III、III' 層は、各々暗茶褐色土、暗黄褐色土で壁に沿って存在する。第 IV 層は地山である。覆土上面に黒色土は認められなかった。石組が上層に認められる。ピットの北東部側に、大きな扁平河原石 1 個と、小さな河原石 4 個、及び、南側隅に 1 個の河原石がある。また、北西部にピットに連結して、小ピット 1 個がある。遺物は何ら検出されていない。(上野 秀一)



第49図 第40号(1), 第41号(2), 第42号(3), 第43・44号(4)ピット実測図

第40号ピット (第49図1)

横口120×115cmで、深さ32cm、壁はややゆるやかな立ち上がりである。底面は北方向に向かって傾斜している。覆土は、第Ⅰ、Ⅰ'層が各々黒色土A、Bで、Ⅰ層は乾くとブロック状になり、第Ⅰ'層は粘土粒が点々と混入している。第Ⅱ層は黒褐色土。第Ⅲ層は暗茶褐色土で粒子は細かく、木炭粒を含んでいる。第Ⅳ、Ⅳ'、Ⅳ''、Ⅳ'''層は黄褐色土でⅣ層は粒子があらく、第Ⅳ'層は黒色土が点々と混入し、第Ⅳ''、Ⅳ'''層は粒子が細かく、第Ⅳ'''層は吸湿性に富んでいる。第Ⅴ層は茶褐色土中に黒色土を混入している。第Ⅵ層は暗黄褐色土で粒子が細かく第Ⅳ'''層より暗い感じがする。第Ⅶ層は灰白色粘質土で炭化粒を含んでいる。第Ⅷ層は暗茶褐色土で粒子は細かく、比較的粘性はない。第Ⅸ層は地山である。

遺物は礫が2点、出土している。他に、Ⅲ層より砥石の一部と思われる物が出土している。骨片と思われる遺物が第Ⅵ層より出土した。(大原 勢司)

第41号ピット (第49図2)

横口は90×70cmで楕円形のピットである。深さは20cmで、立ち上がりはやや急傾斜である。底面は平らで、北東の壁の立ち上がりの部分は新しい小ピットの攪乱で切られている。層は、第Ⅰ層、黒色土Aであり、クラックが入り、第Ⅱ層は黒褐色土で若干の粘土粒が入っている。第Ⅲ層は茶褐色土で黒色土が混入している。第Ⅳ層は地山である。

遺物は、土器片3点、礫5点、木炭片が1点、第Ⅰ～Ⅱ層より出土している。(大原 勢司)

遺物 (第50図1～6、図版20A)

第50図1～6に示したものは、本ピット出土遺物である。1は、底部に近い胴部片で、表裏共無文である。色調黄土色。2も、胴部片で擦痕が表は縦、裏は横に走っている。色調、暗茶色。3は、内湾気味の胴部片で、地文として擦痕が、表には縦、裏には横に入っている。段を有し、その直上に櫛目押圧文(?)がある。4は、焼けた幅広剝片、5は、矩形剝片に若干の二次加工の入ったもの、6は、削片である。共に黒耀石。あと、石斧の素材に使う千枚岩 (phyllite) の剝片が1点出土している。(上野 秀一)

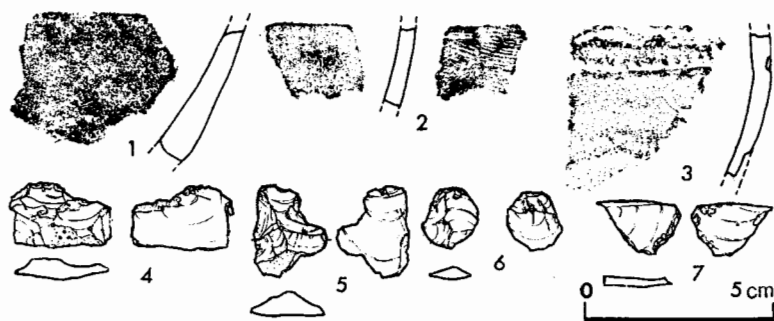
第42号ピット (第49図3、第50図7、図版15B、20A)

横口103×68cmの楕円形のピットである。長軸は北東—南西方向で遺構確認面よりの深さは23cm、底面は平らで立ち上がりは、やや急である。第Ⅰ層は黒色土Bで、粘質を帯び、第Ⅱ層は黒褐色土で炭化物を含んでいる。第Ⅲ層、黄褐色土。第Ⅳ層は地山である。層の堆積は底面、壁に沿ってなだらかであり、自然堆積の可能性もある。

遺物は骨片1点、土器片1点、石片2点、礫1点が検出されているが、すべて第Ⅰ層からである。第50図7に示した剝片には、二次加工が若干入っている。なお、ピット外30cm北に17×14cm

の小ピットが存在する
が本ピットとの関連、
性格は不明である。

(内山 真澄)



第50図 第41号(1~6), 第42号(7)ピット出土遺物

第43, 44号ピット (第49図4)

第43, 44号ピットは、接する状態にはあるが、切り合う関係ではない。

第43号ピットは、壙口 $80 \times 70\text{cm}$ の隅丸の長方形を呈する。長軸方向は北東—南西である。層準は、第Ⅰ層、クラックが入る黒色土A。第Ⅱ層、黒褐色土。第Ⅲ層、黄褐色土混入の褐色土。第Ⅳ層、黒色土混入の黄褐色砂質土。第Ⅴ層、黄褐色土で底面に沿い皿状に堆積している。第Ⅶ層、地山で本遺跡に部分的に認められる黄褐色の砂層である。壁は、軟弱でありなだらかに傾斜して立ち上がる。遺物は一切認められない。

第44号ピットは、壙口 $50 \times 35\text{cm}$ で、楕円形である。深さは 20cm である。長軸方向はほぼ南—北である。層準は、第Ⅰ層、黒色土A、第Ⅱ'層、黄褐色土混入の黒色土。第Ⅳ'層、炭化物を含む黒色土混入の黄土色砂質土。第Ⅵ層、黄褐色粘質褐。ピット43, 44共に黒色土Aは、ピット内に陥ち込んでいない。壁は軟弱であり、なだらかに傾斜する。遺物はやはり一切認められない。

(羽賀 憲二)

第4表 N 162 遺跡ピット一覧表

ピット番号	区名	平面形	規模		配石	小ピット	長軸方向	ピットのタイプ	時代	覆土器	覆土器・石片	礫	木炭	骨片	備考	ピット番号	区名	平面形	規模		配石	小ピット	長軸方向	ピットのタイプ	時代	覆土器	覆土器・石片	礫	木炭	骨片	備考
			堀口	深さ															堀口	深さ											
1	E-I-21	円形	76×73	27	9 (底, 中)			S	(b)	3	50	7	5	27<	粘土塊	23	F-II-24.25	楕円形	106×82	15			ENE-WSW	Ac	(b)	1		2			
2	E-I-11.12	円形	76×73	25	14 (全面)			S	(b)	3	14		(+)			24	D-III-9.10 14.15	不整楕円形	190×140	22		皿ピット 1 (中)	N-S					(+)			
3	D-I-19	円形	91×88	17	16 (全面)			S	(b)	6	6					25	D-II-2.3	不整五角形	123×105	21		2 5 (内) (外)	NNW-SSE	B	(b)	22	5				
4	E-I-21	円形	108×105	52	8 (中位)			S	(c)	17	51	24		27		26	B-III-4.9 10	不整四角形	97×77	20		1 4 (壁) (外)	NW-SE	B		1	3				
5	E-I-11	不整円形	88×82	14				Ab			4	6				27	G-I-18~23	不整円形	130×117	22		4 (外)	NW-SE	Ab	(a)	4	2				
6	H-I-10	円形	85×80	28	3 (中位)	9 (外)		S	(b)	11	30		(+)	(+)	粘土塊	28	H-I-25	不整円形	93×83	33			NE-SW	Aa			1	1			
7	D-I-14	円形	68×62	28	5 (西)	1 (壁外)		S	(c)	8	6	3				29	F-I-8	不整四角形	93×80	22			NW-SE	B	(a)	5	3	2			
8	E-I-11	不整円形	98×88	36	9 (中位)		NE-SW	S	(b)	7	3		(+)	多数		30	H-I-14	不整楕円形	165×115	25			NNW-SSE			2	1			粘土塊	
9	D-III-1~3	長楕円形	277×64	40			WNW-ESE	C	(d)	11	3	12		1		31	G-I-18.19	不整楕円形	100×(75)	20			WNW-ESE	Ac		1					
10	D-I-22.23	不整長方形	160×102	17			WNW-ESE	B?		5	3	11				32	C-I-16.21 D-I-20.25	不整円形	108×95	15			WNW-ESE	Ab	(a)	1					
11	D-I-22.23	円形	118×(117)	15				Ab		2		7				33	F-II-22	不整円形	83×79	22				Aa			1				
12	D-I-23	不整円形	73×62	31			E-W	Aa		1		3				34	H-II-11.16	不整四角形	73×67	9		1 (中)		B	(b)						
13	B-I-11.12 16.17	楕円形	358×250	28			NE-SW			23	2	5				35	C-I-25	不整楕円形	92×63	13			NNW-SSE	Ac							
14	Pit13の中	不整円形	60×60	40				Aa		8	6	12				36	F-II-18	円形	70×65	8				Ab							
15	Pit13の中	不整円形	97×80	10			ENE-WSW	Ab					1			37	F-II-20.25	円形	68×68	23				Aa							
16	A-I-5.15 B-I-16.11	楕円形	(116)×100	19		1 (中)	NE-SW	B?				2				38	F-II-8.9	円形	69×63	19				Aa							
17	A-I-5.15 B-I-6.11	不明	116×115	17		1 (中)		B	(a)	9	5	6				39	B-II-18.19	不整五角形	97×77	8	6 (中位)	1 (北西壁際)		S							
18	A-I-5.15 B-I-6.11	不明	(90)×(75)	16	1	2 (中)		B?	(a)	8	2	12				40	F-I-1	円形	120×115	32				Aa?		1	2		(+)		
19	A-I-5.15 B-I-6.11	不整四角形	(83)×80	18		4 (壁際)		B	(a)	1	1			3		41	F-I-4	楕円形	90×70	20			NE-SW	Ac	(d)	3		5	1		
20	D-II-16.17	不整四角形	96×(82)	10			NNW-SSE	B	(d)	2		2				42	G-II-13	楕円形	103×68	23		1 (外)	NE-SW	Ac		1	2	1		1	
21	D-II-16.17	不整四角形	120×101	13			NNW-SSE	B	(a)	3	1	6	1	1		43	B-II-21.22	不整四角形	80×70				NE-SW								
22	H-II-16	不整円形	95×90	45	3			S			9	11				44	B-III-1.2	不整楕円形	50×35	16			NNW-SSE								

(註) ピットのタイプで、「S」とは、配石を有する例である。時代は、第5表参照。

第5章 発掘区出土遺物

第1節 土 器 (第51, 52, 53図, 図版21A)

第1類 第51図11に示したもので、貼付文は網目状に付いている。貼付文上には刻目はない。地文は、横走る縄文が付されている。色調は、表面は化粧土を塗っており、灰褐色、裏面は黒色である。器厚は7mm、焼成は良い。これは所謂「後北C₁式」に相当するものであろう。同様な例が、ピット13(第35図1)、ピット10(第24図12)、ピット4(第26図6)等でも出土している。

第2類 第51図1～9に示したもので、三角形列点文と微隆起貼付文が組み合わさって弧状・縦・横に付され、口唇部直下には貼付帯とその上に刻目がある。ただし第51図1には刻目はない。口唇部は、軽く突起状に盛り上がる例もあり、口唇には刻目が施されている。色調は褐色から灰褐色。器厚は5mmで焼成は良い。これは所謂「後北C₂式」に対比されるものであろう。1～5は口縁部片、6～9は胴部片である。器形は、深鉢と注口土器であろうか。地文として、縞状の特殊縄文が施され、縦・斜・横方向に走る。同様な例は、ピット17(第37図3)、ピット10(第24図13)などでも出土している。

第3類 第51図12～17, 19, 第52図1, 第53図1～6, 8, 9, 11, 13, 14に示したもので、内第53図に示したものは、F-I-10, 15区の落ち込みからまとまって出土した。器形はすべて深鉢形土器と思われ、少し外湾気味である。一般的に口唇部下に円形刺突文が横に一例施される例が多い。口唇部は平坦に断面四角形に整形されている。地文は、無文のものが多いが、文様要素の検討から、
(1) 縄文の付された例(第51図12, 第53図9)
(2) 地文として縄文を付しその上に断面三角形の微隆起貼付文が付された例(第51図15)
(3) 沈線文が施された例(第53図5)
(4) 擦痕が縦ないし横に付された例(第51図14, 16, 17, 第52図1)
(5) 無文で、表面の器面が光沢をもって研磨されている例(第51図13, 第53図1～4, 8, 13, 14)に分類出来る。

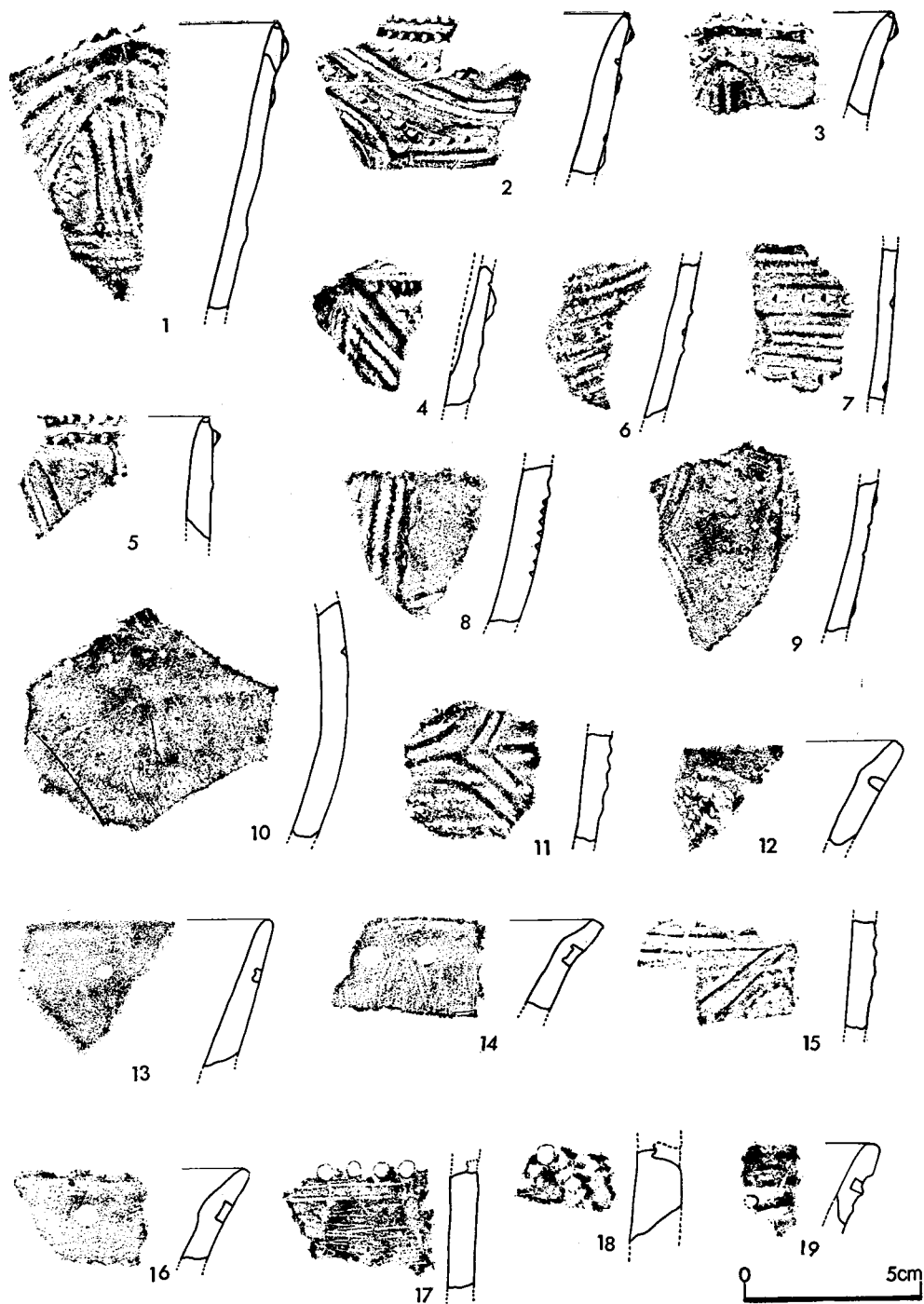
口唇部が平坦でない例としては、第51図13, 第53図1～4等があるが、他は平坦である。円形刺突文が観察されない例は、第52図1, 第53図6がある。

外から内への円形刺突文は、竹管状工具が多いが、丸棒状の中空でない工具で施文されたと思われる例もある(第53図3, 5)。

焼成は良く、色調は黒褐色(第51図12, 15, 17, 第52図1)、暗茶色(第51図13, 19, 第53図1～4, 8, 9, 11, 13, 14)、茶色(第51図14, 16)である。器厚は約6mm前後である。

第51図19は、円形刺突文のある特異な例で口唇部はやや平坦に整形され、折返し口縁で、その下には貼付文が付されている。

第51図10も特異な例で、少し胴張りし、浅い三角形刻点文が横に一例走り、その上に鋭い工具に



第51图 尧墟区出土土器拓影(1)

よる斜・横方向の刻文がある。口縁部を欠くので、全体の器形、文様は不明である。器は厚く、約6mmである。一応この仲間に入れておく。

ピット出土の同様な例として、

(2)と同様なものは、ピット18(第37図2)

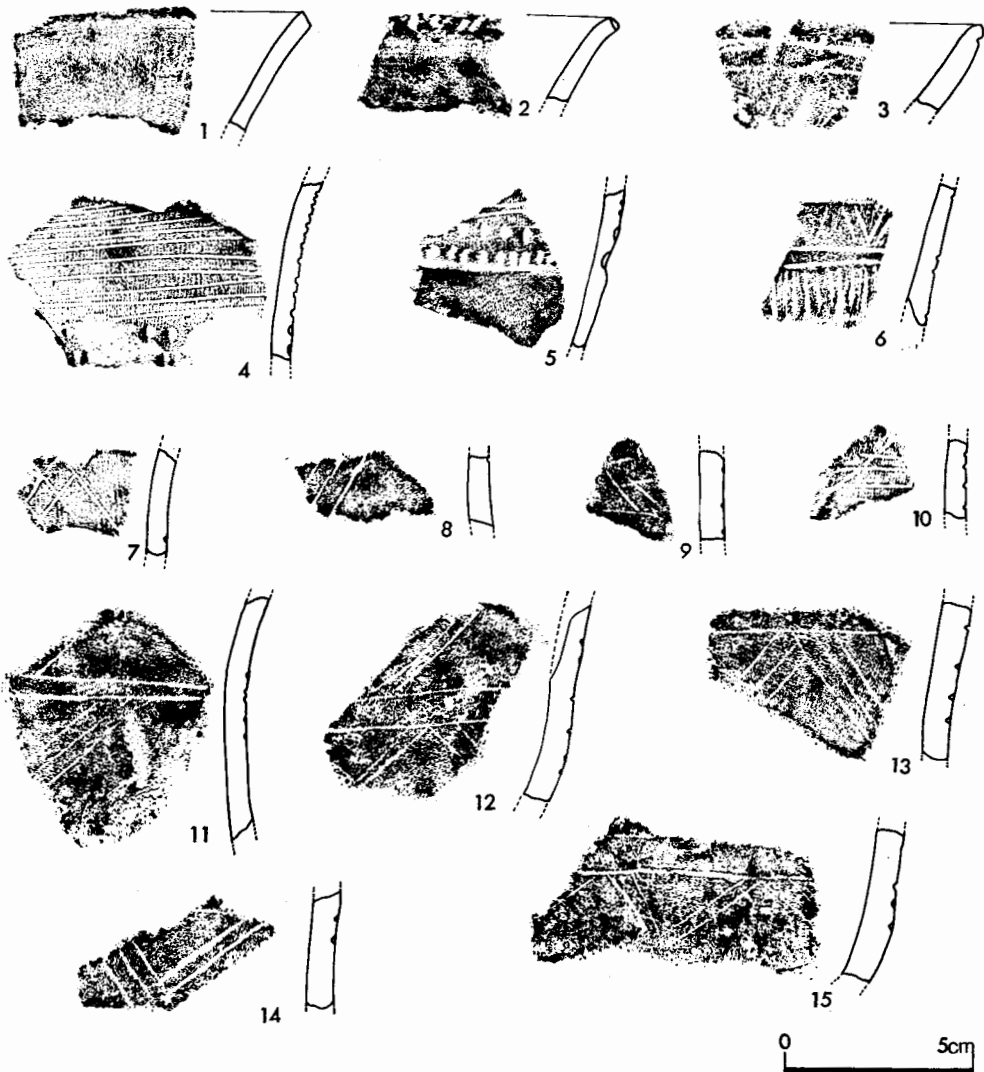
ピット19(第37図1)(ただし縄文はない)

(3)と同様なものは、ピット8(第24図9)

ピット1(第20図1, 2), ピット31(第26図3)

(4)と同様なものは、ピット9(第24図16)

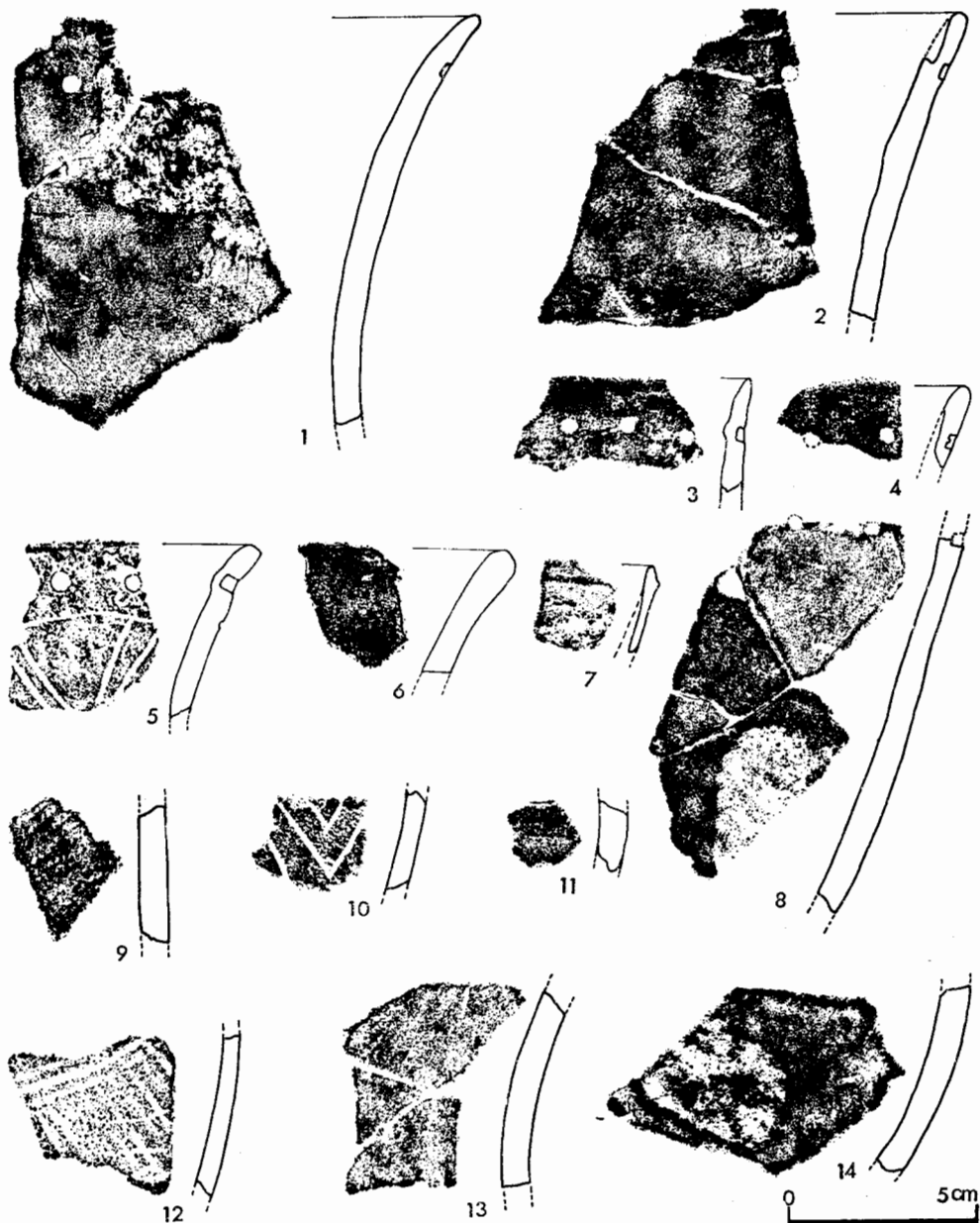
(5)と同様なものは、ピット6(第28図1), 第1号竪穴住居跡覆土(第8図7~9)で出土している。



第52図 発掘区出土土器拓影(2)

ピット1から出土した完形土器も、(5)に類例した円形刺突文の欠除した例かと思われる。

第4類 第52図9, 11~15に示したもので、H-I-14, 19のピット30の周辺攪乱層下部からまとまって出土したものである。焼成はあまり良くなく、器厚は約6mm。色調は灰褐色である。器形は、胴張りし、口縁が外湾する。頸部の破片しかないが、この部分に鋭い工具で施文された2~3本単位の鋸歯状沈線文がありそれを区画するように1本の横走沈線が巡っている。これを一単



第53図 発掘区(F-I-10, 15区)出土土器拓影(3)

位として、複数施文されている。

第5類 第52図2に示したもので、包含層からは数は出土していない。全体に口縁部は外湾すると思われる、口唇部下でも少し外湾する。口唇部には刻目があり、地文として擦痕がある。第1号堅穴住居跡覆土（第8図1～6, 10, 11）、第2号堅穴住居跡覆土（第14図1～11）、ピット6（第28図2）等で出土している。頸部に、平行沈線文が数多く横走る深鉢形土器もこの仲間と思われる。

第6類 第52図4, 5, 10に示したもので口唇部は、すべて欠損するが、口縁部に鋭い工具に拗って施された連続横走沈線文があり、その下に半月形の刻文を二列程巡らしている。地文として擦痕が縦に施されている。10例には、斜の沈線が交叉する。

焼成は、あまり良くなく赤褐色を呈し、器厚は5mm弱である。器形は少し胴張りし、口縁部は外湾するものと思われる。

同様な例は、ピット9（第24図17, 18）、ピット41（第50図3）、第2号堅穴住居跡覆土（第14図12～15）などをあげえる。

第7類 第52図3, 6, 7, 8, 9に示したもので、横走る連続沈線文は消失している。

更に、(1), 3・6・9例と(2), 7・8例に二分出来るかもしれない。前者は、口縁部は、少し内湾し、口唇部直下に一条の沈線文が巡り、口縁部文様帯には、二本単位の鋸歯状沈線文ないし、短冊状の沈線文が横環して施され、その間を2本の横走る沈線で区画している。色調は、灰褐色を呈し、器厚5mm前後である。裏面はよく研磨されており、6例は黒色研磨している。地文には、擦痕がある。一方、後者(2)は、地文として擦痕があり、口縁部は少し外湾し、口縁部文様帯部分に、斜めないしは交叉する沈線文がある。色調は、暗褐～黒褐色で、器厚は4～5mm。

類例は、ピット20の第39図2、第1号堅穴住居跡覆土の第8図13などがある。

尚、第51図18は、伊達山式土器の破片であるが、本遺跡から1点しか検出されておらず混入の可能性もある。

この外、発掘区では出土していないが、所謂「後北B式」と思われるものが、ピット13（第35図2）で出土している。
(上野 秀一)

第2節 石 器 (第54図, 図版21B)

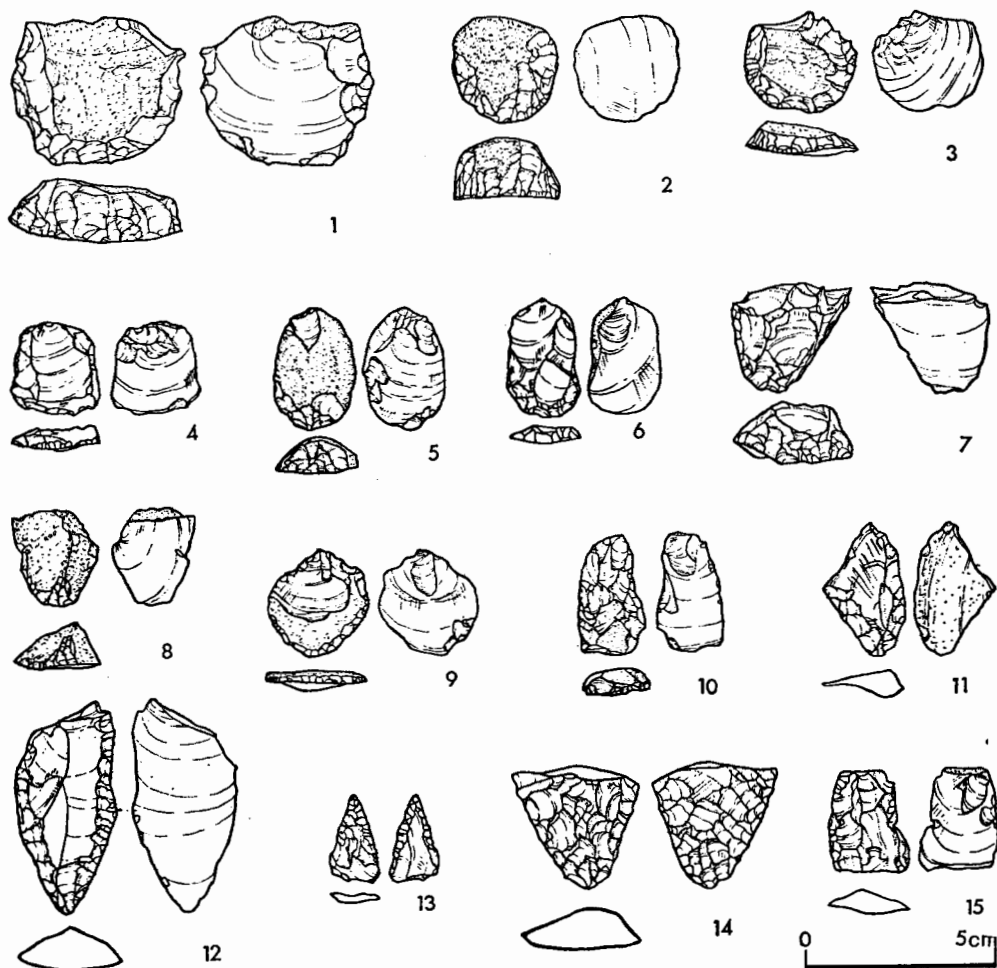
第54図に示したのが、発掘区出土の石器である。器種は搔器類が主体を占めている。12例を除いて、あとは全例黒耀石である。

搔器 (1～10) 1～3, 9は背の高い剝離が一端のみではなく、その両側にも沿って巾広くあるもので、所謂「円形搔器」(round scraper) といわれるものである。4～6, 8及び10は、一端にのみ背の高い剝離が入ったもので、小形である所から、所謂「拇指状搔器」(thumb scraper) であろう。1, 2, 5, 8は、背面に巾広く原石面を残しており、部厚い素材を使っている。3, 4, 6, 9, 10は、背面に原石面を残すものもあるが、巾広・矩形の剝片を素材にしている。7は、部

厚い剥片を素材にしているが、扁平石核の残核の可能性もある。一端の刃部は狭く、明瞭な刃部作出の剥離（二次加工）は入っていない。しかし両側辺には、背の高い剥離が顕著に認められる。

削器 (11, 12, 15) 11は、左側図が主要剥離面で、バルブがある。右側図は、原石面ではないが、かなりパティが発達している。左側図の左下部に二次加工が入っている。右側辺は、打面である。12は硬質頁岩製で、両側にきれいな二次加工を入れ、一端を尖頭器状にしている。15は、少し加熱をうけており、縦長剥片の背面左側辺に簡単な二次加工をしている。下部は、加熱以前に欠損している。

尖頭器類 (13, 14) 13は二等辺三角形に近い石鏃と思われる。基底部分が一部欠損している。半両面加工で、側辺に沿った加工以外は、きわめて雑である。14は、両面加工の石槍の基部破片と思われる、パティナが発達し、全体に著しく磨耗している。加工は入念である。 (上野 秀一)



第54図 発掘区出土石器実測図

第6章 考察

今迄、述べて来た事実を基に、以下で、それらについて個々に、考察を加えてみたい。

第1節 ピット群について

§ 1 ピットの形態について

本遺跡からは、約44個のピットがみつまっているが、それらは配石の有無、ピットの平面形、断面形などを基に6つに分類出来る。

まず、配石の有無から大きく二つに分けられる(第55図、第4・5表)。

1 配石を有するピット

複数の配石を有するものは、ピット1, 2, 3, 4, 6, 7, 8, 22, 39の9例を数える事が出来る。

ピット39例を除いて、平面形は円ないし不整形で、墳底面は平らで、垂直に立ち上がる。断面形は、おおむね釜を縦にたち切った形である。墳口は68~108cmの大きさで、70~90cmの大きさが平均的である。深さは17~52cmで、20cm前後の所に集中する。

ピット39のみは、平面形が不整形五角形で、深さ8cmであり、特異な形態を有する。

これらは、すべて単独ピットである。

配石の入り方から、

- (1) 墳内全面に亘って、人頭大の石が、黒色土内とその下、墳口から墳底迄びっしりつまっている例……ピット2, 3
- (2) 壁の一方に偏って、人頭大から拳大の石がある例……ピット4, 6, 7, 8, 22, 39, これらは、更に配石と覆土の関係から、以下の三つに分けられる。
 - (a) 黒色土内のみにある例(覆土上面)……ピット7, 39。
 - (b) 黒色土内とその下にまたがってある例(覆土上面~中位)……ピット6, 8。
 - (c) 黒色土の下のみある例(覆土中位~底面)……ピット4, 22。
- (3) 特にまとまりなく、人頭大から拳大の石が、黒色土の下、墳内の中位から底面にかけてある例……ピット1。

の三つに分類出来るであろう。

ピット7と39例には、小ピットが、ピットの壁外に接して1個あり、ピット6例は、ピット外縁に環状に9個ある。また、ピット1と5では、底面近くに接して粘土ないし混粘土の土の半円球形のブロックがあり、ここより多くの骨粉の出土をみた。骨粉の多かったのは、ピット1, 4, 8で

ある。

遺物は、ピット 39 例を除き、配石をもたないグループに比べて、一般的に多く含まれ、北大式土器を出すものとして、ピット 1, 2, 3, 6, 8, 擦文時代初頭の土器を出すものとして、ピット 4, 7 があり、おおむね、北大式～擦文時代初頭の所産として理解出来るであろう。なお、ピット 1 からは完形土器（後述する北大式 F 型）1 個体が出土した事は、前述した。

なお、ピット 39 例を除き、これらのピットは、平面形及び断面形からは、後述する A 型、とりわけ Aa 型のタイプとしても分類可能である。

2 配石等を持たないピット

このグループには、30 (35) 個のピットがあり、平面形を基に 3 つに分類した。

- A 円形ないし不整円形及び楕円形ないし不整楕円形
- B 不整四角形ないし不整五角形及び不整長方形
- C 長楕円形

A 型

このタイプは、本遺跡で最も多く 18 例で、約半数を占める。単独ピットが多い。更に、平面形及び断面形から、以下の三つに細分出来る。

(1) A a 型

ピット 12, 14, 28, 33, 37, 38, 40? の 7 個が入る。ピット 40 例を除いて平面形は、円形ないし不整円形で、断面形は、壙口の割に深さがあり、釜の形を呈するもので、壙口の長軸と深さの比が 2～4 の枠内に収まる。壙底面は、平らか、浅い皿形である。

壙口の大きさは、60～93cm で、かなりまとまりがある。深さは 19～40cm で、20～30cm が最も多い。なお、ピットの内外に小ピットのある例はない。

底面には遺物がなく、覆土中にも、小礫以外は、一般に少ないか全くない。ただ、ピット 14 は、土器片、石片が 14 個出土した特異な例である。続縄文～北大式頃の土器を出土しているが型式は明確ではない。木炭、骨粉は何ら検出されていない。

なお、ピット 40 も、形態からは、この仲間に入るが、壙底面が傾斜し、壙口が 120×115cm あって大きく、底面直上から骨粉が 1 点出土していて例外的な存在である。

(2) A b 型

ピット 5, 11, 15, 27, 32, 36 の 6 個がある。

平面形は、円ないし不整円形で、壙口の割りに、深さが浅いもので、断面形が平底のフライパン型を呈する。壙口の長軸と深さの比は 5～10 の枠内に収まる。壙底面は平らか浅い皿形である。

壙口は、70～130cm の大きさで、特に集中する傾向がなく、大略 1 m 前後の大きさと考えられる。深さは 8～22cm であり、極めてまとまりがある。ピット内に小ピットのある例はなく、ピット 27 は外に 4 個あって特異な例である。なお、このピット 27 には壁寄りの底面に、1 個の人頭大の円礫一個があった。所謂「枕石」に類するものであろうか。

底面には遺物はなく、覆土中からも、平均して少ないが、ピット 25 からは 22 片の土器片が出土している。木炭、骨粉は、ピット 15 で木炭が 1 点底面から出土しているのを除いて顕著ではない。

このタイプで、覆土の遺物から時期の推定出来るのは、ピット 27, 32 の統縄文時代末期の 2 例のみである。

(3) A c 型

このタイプは、ピット 23, 31, 35, 41, 42 の 5 例がある。

平面形は、楕円形ないし不整楕円形を呈し、断面形は、殆ど平底のフライパン型である。壙底面は、ほぼ平らか、浅い皿状を呈する。平面形は Aa, Ab 型と異なるが、これとは厳密には区分しがたく、A 型の中に入れた。

壙口の大きさは 80~106cm で、1 m 前後の所に集中する。深さは 13~23cm でかなりまとまりがある。

長軸方向は、大略 NW-SE の方向であるが、最大例のピット 23 だけ、ENE-WSW の方向である。底面には遺物はなく、覆土中にも一般的に少い。時代を推定しうるものは、ピット 23 で、北大式? が出土しているのと、ピット 41 で、東大編年擦文第 II 型式が出土している位である。

なお、ピット 13, 24, 30, 44 の 4 例も、平面形は、この仲間であるが、ピット 13, 24, 30 に関しては、立ち上がり不明瞭で古い時代の人為的なピットとしての確証はない。特にピット 30 は、底面は斜めである。ピット 44 は規模は小さく、一応除外した。

B 型

このタイプは、ピット 10?, 16?, 17, 18?, 19, 20, 21, 25, 26, 29, 34 の 11 例を数える事が出来る。

ピット 10 例を除いて、平面形は、不整四角形ないし不整五角形で、断面形は殆ど平底のフライパン型で、浅いものが多い。壙底面は、ほぼ平らか、浅い皿状である。

壙口の大きさは、長軸で 73~120cm 迄で、特にまとまりはないが 90cm 前後の大きさが多い。深さは 9~22cm で、10~20cm の所に集中している。

この仲間の 1 つの特徴は、重複したピットが多い事である。ピット 16~19 の四連ピット、ピット 20, 21 の二連ピットなどがあり、ピット 25 には、浅い二つの皿状のピットが付属している。従って中にはピット 18 の如く全体形をうかがい得ないものもあるが、恐らくこの仲間かと思われる。

また、第 2 の特徴として、このタイプには、ピットの内部の壁際ないし中央に小ピットがあるという事である。ピット 16 には壁際と中央に各 1 個の小ピットがあり、ピット 17 には壁際に 1 個、ピット 18 には壁際に 2 個、ピット 19 には壁際に 4 個、ピット 20 には壁際に 2 個 (重複)、ピット 21 には壁際に 1 個、ピット 25 には壁際と中央に各 1 個の小ピットが認められるのである。また、ピットの外縁部にも多くの小ピットを有する例が多く、ピット 16~19 の四連ピットの周辺には 24 個、ピット 20, 21 の二連ピットには 39 個、ピット 25 では 5 個、ピット 26 では 4 個の小ピットが認められる。

なお、ピット 10 は、平面形が不整長方形を呈するが、この仲間に入れてよいものである。平面形に角がある事、断面形が平底のフライパン型を呈する点、内部に小ピットを有する点、重複ピットである点など、前述のものと共通性が強い。

遺物は底面には一切認められないが、覆土中には、ピット 34 例を除いて、少ないながら含んでいる。また、骨粉は、ピット 19, 21 において認められ、木炭はピット 21 で 1 例認められただけで顕著ではない。

このタイプで、覆土の遺物から時代を推定しうるものは、ピット 10 が統繩文～北大式、ピット 17, 18, 19, 21 と 29 が統繩文時代、ピット 25 が北大式頃、ピット 20 が擦文時代初頭(第Ⅱ型式)と考えられる。

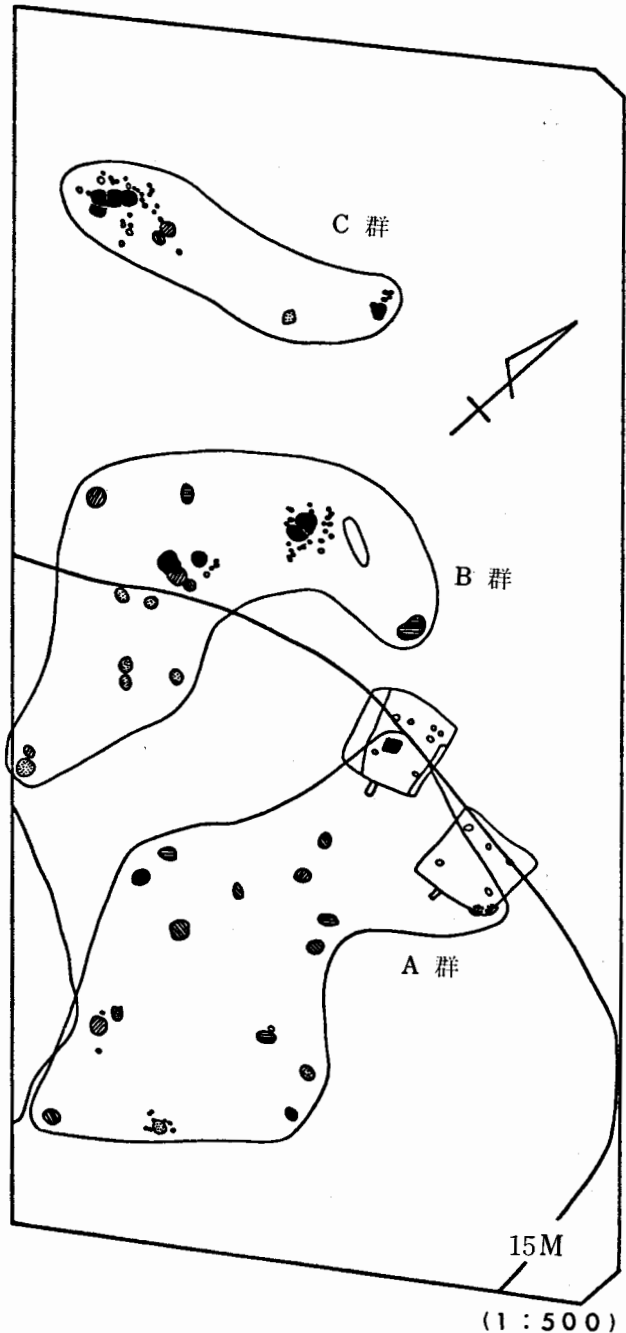
なお、ピット 43 も、この仲間に近いが、規模も小さく、古い時代の人為的なピットであるかどうかという確証がないので除外した。

C 型

このタイプは、ピット 9 の 1 例のみで、平面形は長さ 277cm の隅丸の長楕円形である。深さは 40cm。長軸は WN W-ESE の方向である。もし、墓壙と考えうるなら、前述した A, B 型と異なり、伸展葬の可能性が高い。

覆土内より擦文第Ⅱ型式の土器片の出土をみているので、それ以降の所産であろう。

なお、ピットの長軸方位の問題は、各タイプを通じて、NE-SW が 6 例、ENE-WSW が 2 例、E-W が 1 例、



- 〈凡例〉
- ⊙印：配石を有する例
 - 印：A c 型
 - 印：A a 型
 - 印：B 型
 - 印：A b 型
 - 印：C 型

第 55 図 ピット形態別分布図

NW-SE が 2 例, WN W-ESE が 4 例, NNW-SSE が 4 例で, 特にまとまりはない。

§ 2 ピットの層堆積について

層堆積に関しては, 覆土最上面に黒色土層が落ち込んでいる例とそうでない例とで, 二つに大別出来る。

(1) 黒色土の落ち込みが認められる例……34個

(2) 黒色土の落ち込みがない例……7個, 不明1個である。

黒色土には, 乾くと激しいクラックの入る黒色土Aと黒色土Aより黒く, 全体に粘性のある黒色土Bとがある。黒色土Bの方が, 時期的に古い堆積と思われるが, AとB相互の関係は, 今回の調査では判然としなかった。

この黒色土は, 本来の遺構の覆土ではなく, ピットを埋め戻した後, 時間の経過と共に覆土がくぼんだ所に自然堆積した土層である。恐らく土壙墓の場合には, 内部に埋置した屍体の腐植化で, その分だけ本来の覆土がくぼんだ事が充分考えられる。

配石を有する例では, 殆どのものに黒色土の落ち込みが認められるが, 特に, 黒色土A, Bの両者がある例が5例あり多いといえる。黒色土がないものは1例(ピット39)である。

配石のない例では, 黒色土A, B両者ある例は殆どなく, ピット40(A a型)1例のみである。後は, 黒色土AないしBのみのものだけである。

黒色土がないものは, Aa, Ab, Ac型各1例ある。B型では, 黒色土のない例は, 3例(ピット19, 20, 34)で多い。尚, ピット43にも黒色土があるが落ち込みは認められない。C型では1例のみで, 黒色土Aのみである。

この覆土最上面に, 黒色土の落ち込みがない例は, 覆土を盛り上げていた可能性もあるし, また埋葬用のピットでない事——所謂「不在葬」の可能性も充分考えられる。B型のピット19では, 黒色土が認められなかったが, 骨粉及び木炭が検出されている。ピット19例を除いては, 骨粉ないし木炭粉の出土したピットは共通して黒色土がある。

覆土の堆積状態は, 各層共小ブロック状ないしはレンズ状に堆積する例が多いが, 若干自然堆積の如く整合的に皿状に堆積している例もある。

単純に考えると, 小ブロック状の堆積の例は, 一度に埋め戻したものと考えられるが, 皿状堆積の例は, 自然堆積とも考えうる。しかし, 堆積している土層は, 小ブロック状のそれと軌を一にし, 自然堆積とは考え難い。特に, 本遺跡の土層は, 乾くと粉末状にサラサラになる性質があり, 人為的に埋め戻しても, 皿状に堆積する可能性もある。従って, ここでは, 皿状の整合的な堆積であるという事実をもって, 人工的なピットではないとは断定出来ない。

尚, ピット1と4は, 覆土の堆積の中で, 一線を画する事が可能な面がある例である。その面を界に, その上の層と下の層とでは, 堆積している土層そのものも著しく異なっている。しかも, ピット1では, 完形土器と配石を, ピット4では, 配石が, この面の直上に置かれている。この事実には, 屍体を埋置し, 或程度埋めた後, 一旦踏み固め, この上に配石ないし完形土器などをおいて,

その後完全に埋め戻したものと考えられる。即ち、副葬品の置き方として、屍体と共に底面に置くという例だけでなく、土壌の中位——屍体の上に置く例があるという事である。また、配石の入れ方についても、屍体の上に直接配置するのか、或は覆土最上面に配置するのかなど、明瞭ではないが、ピット4の如き例があるという事実は、注意を要する。

§ 3 ピット内出土の遺物について

ピットから、明らかに副葬したという形で遺物が出土したものは、ピット1の例しかなく、あとはすべて覆土内からみつかったものである。

ピット1の例では、底面に食い込む様な形で円球状のスリ石が出土し、また壙口の黒色土層内とその直下に、一個体の完形土器が出土している。この完形土器の底部は欠除しており、意図的に破壊したものと解せられる。

覆土内にある例として、その深度は、配石を有する例、及びAa型、C型——即ち深いピットは、中位から底面直上であり、Ab、Ac、B型——即ち、浅いピットは、殆どがその上層に遺物の出土が認められる。

一般的にあって、配石を有する例では、ピット39例を除いて、全例、比較的多くの遺物を含み、特に、ピット3、4、6においては、土器の出土が著しく、またピット1、2、4、6において、黒耀石の削片、剝片が、おびただしい量出土している。その内、ピット6、22から出土した石片は、同一母材から剝がされた例が多く、ピット6では、扁平石核と剝片及び剝片3個が接合し、ピット6でも、剝片2点が接合している。また、ピット8では、一つの搔器が三つに分割され、第Ⅰ～Ⅱ層から分かれて出土した。これらの事実よりみて、ベニガラを死体の上に散布すると同様の意味で、墓壙内に黒耀石の破片を意図的に散布した可能性が充分ある。

ピット内からみつかった石器は、ピット13及びピット30の人為的なピットとして疑わしい例を除き、すべて円形ないし拇指形の搔器である。ピット1、2、3、5、8、10、14などで認められる。この内、ピット1の例は全面過度に焼けている。ピットの形態別では、配石を有する例が4例で、一番多く、Aa型、Ab型、B型は各1例である。

なお、ピット30からは、局部磨製石斧の柄部破片が出土している。また、ピット41からは、石斧の素材になる千枚岩の破片が出土している。

また、焼けた黒耀石片ないし礫を出土したものは、ピット1、4、14、29、41があり、ピット1では、前述した搔器以外に焼けた剝片が3点、ピット4では軽度に焼けた礫が2点、ピット14と41では、焼けた削片が各1点、ピット29では焼けた剝片が1点出土している。

木炭は、ピット1、2、5、8、15、17、19、21、24、25、40、41、42等で認められる。ピット21、25、42に関しては黒色土の下の覆土上層、ピット6、8に関しては、壙底面直上、ピット1は黒色土層直下の第V'、VII層などから出土している。ピット2は、黒色土内に含まれていた。全般的に、特に出土は多くはなく、数片であるが、ピット1と6では、かなりまとまって出土している。

なお、骨粉が出土したピットは、殆どの場合、木炭ないし焼けた石を含んでいる事実は興味深

い。ただ例外として、ピット9では、骨粉しか出土をみていない。

本遺跡では、ピット内外に焼土が認められる例は皆無であったが、以上の事から、本遺跡でも、葬送に関連して火を用いた事も充分考えられる。

礫は、各ピットから平均して出土しているが、多くは半割されたものか、或はその表皮である。礫が、そのまま出土する例は、比較的少ない。

骨粉の出土をみた例は、ピット1, 4, 6, 8, 9, 19, 21, 40, 42の各ピットであり、特に多かったのは、配石を有するピット1, 4, 8の三つである。ピット1では、粘土塊があり、その周辺にまとまって、ピット8では配石の下にまとまって出土している。ピット4は、特異で遺構確認面と第Ⅰ～Ⅴ層までの上面に多くの骨片を含んでいた。

なお、粘土ないし土の半円球状の固まりがピット1, 6, 30で認められた事は前述した。

また、枕石と思われる人頭大の石が底面壁寄りにあった例として、ピット27があるが、これも前述した。

§ 4 ピットの年代について

44個のピットの内、明らかに造られた年代が判明する例は、ピット1の完形土器を出土した例（¹⁴C年代、1760±110B.P.）を除いて、明らかではない。従って年代判定は覆土中に含まれる、型式の判る土器をもっておおまかな時期を類推する方法しかない（第56図、第5表）。

配石を有する例は、土器の出土が多く、また時期的にかなりまとまりがあり、北大式土器を中心に擦文式土器第Ⅰ型式位の所に集中している。配石をもたないグループは、土器の出土が僅少な事もあって、覆土中の土器の形式には、かなりばらつきがあり、その傾向性をつかむ事は難しい。

A型は、一般に時期の判る例は殆どない。Aa型では一つもなく、Ab型では続縄文時代末が2個。Ac型では、北大式、擦文第Ⅱ型式各1個である。

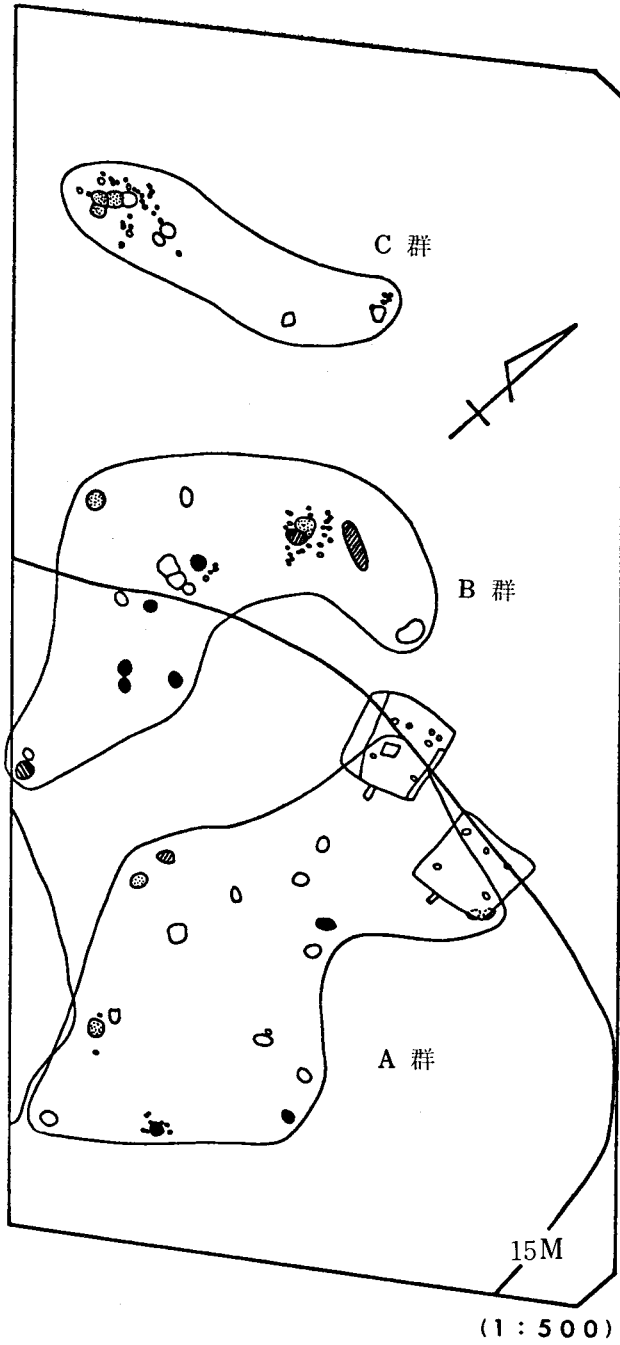
B型では、続縄文時代末期5個、北大式2個、擦文第Ⅱ型式1個で、続縄文時代末期と北大式の辺に集中している。

C型では、1例のみであるが、擦文第Ⅱ型式以降に比定出来る（第5表）。

第5表 ピットのタイプと時代の関係一覧表

時 代	形 態	配石を 有する例	配 石 を も た な い 例				
			Aa	Ab	Ac	B	C
(a)	続縄文時代末期			27, 32		17, 18, 19, 21, 29	
(b)	北 大 式	1, 2, 3, 6, 8			23	25, 34	
(c)	擦文第一型式	4, 7					
(d)	擦文第二型式				41	20	9
	不 明	22, 39	12, 14, 28, 33, 37, 38, 40	5, 11, 15, 36	31, 35, 42,	10, 16, 26,	

(註) 数字は、ピット番号を示す。



第56図 ピット時代別分布図

§ 5. ピットの分布とグループング

44個のピットの遺跡における分布は、14mのコンタラインで示される小谷をとり囲む様に、14m～15m強の所に所在する。

これらは、そのまともり具合から、大きく三つのグループに分けられる（第55、56図）。

A 群

遺跡の東側であって、標高14～15mの所にあるグループ。17個のピットが含まれる。ピット6、22、23、27、28、29、31、33、34、36、37、38、40、41、42それに第2号堅穴住居跡によって切られた2個のピットである。

形態別では、配石を有する例、Ab型、B型各2例、Aa型、Ac型各3例である。

時代別では、(a)統縄文時代末期2例、(b)北大式期3例、(d)擦文第Ⅱ型式期1例である。

形態、時代共に特にまともりはない。黒色土の落ち込みが認められないものは4例である。

B 群

遺跡の中央であって、標高15m前後の所にあるグループ。16個のピットが含まれる。このグループは、更に二つに細分が可能である。

B1 群

B群の内、南側、標高15m以下にあるグループで、7個のピットがある。ピット1、2、3、4、5、7、8である。

形態別では、ピット5を除き、すべて配石を有するものである。ピット5のみは、Ab型。

時期別では、(b)北大式期4例、(c)擦文第Ⅰ型式期2例で、形態・時代共に非常によくまともりがある。

すべての例に、黒色土の落ち込みが認められた。

B2 群

B群の内、北側、標高15m以上の所にあるグループで、9個のピットがある。ピット9、10、11、12、20、21、25、32、35である。

形態別では、配石を有する例はなく、Ab型1例、Ab型、Ac型各2例で、B型が多く4例を数え、C型が1例ある。

時代別では、(a)統縄文時代末期2例、(b)北大式期1例、(d)擦文第Ⅱ型式2例である。

形態・時代共に、特にまともりはない。

なお、ピット20は、黒色土の落ち込みはない。

C 群

遺跡の西側、標高15m以上の所であって、8個のピットが含まれる。ピット14、15、16、17、18、19、26、39である。

形態別では、配石を有する例、Aa型、Ab型、各1例で、B型が多く6例を数える。

時代別では、(a)統縄文時代末期3例のみである。

黒色土の落ち込みがないものが2例ある。

以上、4つのグループに分けて個々に説明したが、B1群を除いて、形態的にも、時代的にも、きわめてばらつきがある。

本遺跡では、ピットの年代が判る例が極めて少ない事もあって、明確なグルーピングと、それらの性格付け、時期による移動といった問題は、明らかにはし得なかった。

§ 6. 比較考察

以上述べてきた事実——とりわけその形態について他の遺跡と比較してみると、以下の如くである。比較の対照は、後北C-D式期、北大式期、擦文時代の墓壇ないし墳墓と思われるピットである。原則として図があるものを取扱った。

後北C-D式期～擦文時代にかけての墳墓で、本遺跡で認められた様な、複数の石が墳口から墳底にかけて或はその一部に、集積した様な状態で出土した例は、国後島古釜府（名取1940）の後北C式期の円形の墓壇一例である。ここでは、墳口直下に一面、敷石状に石を配している。また、天内山遺跡第6号墳（峰山・松下・竹田・金子1971）では、後北C式土器と共に、拳大の礫3個が、中央にややまとまって、墳底面上35cmの所からみつまっている。

あと、配石のある例は、擦文時代初頭と思われる余市郡余市町天内山第4、5、9、10号墳、千歳市ウサクマイ第3、4号墳（菊地1964）、同昭和41年12号墳（藤本1964）などがあるが、すべて、墳底面に2～4個の人頭大の石をピットの長軸の一端ないし壁よりに対称的に並列したものである。これらは、所謂「枕石」或は「耳石」と称せられるものに相当しよう。平面形は、円形のものではなく、四角形に近いものが多いという傾向がある。

本遺跡で、同様なものは、Ab型のピット27で、人頭大の石が一個、南東側の壁よりにあった例があげられよう。

北海道式古墳にも、恵庭市茂漁2、4、7、8号墳（後藤・曾根原1934）で同様な「耳石」があり、この内、2、7号墳は、墓壇が長方形である事が判明している。

配石をもたない例の内、円形ないし楕円形のもの——A型のものは、概して多く、この事は、各時代を通していえる事である。

四角形に近いB型の例は、後北C-D式期では常呂郡常呂町栄浦第7号ハ号跡（東大文学部編1972）天内山第6号、江別市坊主山・町村農場第4号（名取1933）、江別市兵村Ⅷ・16、Tf・T-78、同Tf・T-61（後藤1935b）、北大式期では、天内山第3号、擦文時代では、恵庭市柏木川ピット77（高橋編1971）、天内山第1、5、7号墳、千歳市ウサクマイ第2、7号墳などが上げられ、比較的、この時期に至って増加するという傾向はある。また、これらは、墳内に張出しや柱穴がある例が多い。張出しのあるのは、天内山第6号墳、柏木川ピット77、柱穴があるのは、江別市兵村Tf・T-78（2個）、同Tf・T-61（4個）、天内山第7号墳（1個）、ウサクマイ第2、7号（4個）である。

とりわけ、4隅に各1個のある例は特徴的で、前述の3例以外にも、ウサクマイ昭和41年第12号墳でも認められ、この例に対して藤本英夫（藤本1964）は「東頭位ウサクマイ葬法」なる名称を

与えている。

本遺跡でも、B型のものには、壁際ないし、中央に小ピットを有する例が多く、とりわけ、ピット19は、四隅に各1個あって、前述のものと同様である。また、ピット外縁部に小ピットが多いという傾向も指摘されるが、同様の事が、天内山第1、7号でもいえる様である。このB型は、後北C-D式期から擦文時代初頭にかけての一つの特徴あるタイプといえるであろう。

C型に類似のものは、石附（石附1973a）によると根室トーサンポロ遺跡第1、2号墳（八幡編1966）、標津郡標津町伊茶仁B遺跡第6号住居跡内土壙（石附1973a）、常呂岐阜第二遺跡13号、W2号、W4号、W8号、同ワッカ遺跡4、9号住居跡内土壙（東大文学部編1972）、稚内市恵北遺跡第3号住居跡内土壙（大場・菅1972）、及び興部町秋里遺跡の2例（山崎博信1965）の12例をあげられ、トーサンポロ例を除いて、すべて擦文時代の堅穴住居跡内に穿たれている。

この内トーサンポロ第1号墳からは、東大編年の擦文第三型式の高坏二個が出土しており、伊茶仁B遺跡の例も同様の時期といわれる（石附1973a）。また、それ以外の擦文時代の堅穴住居跡内の例も、石附（石附1973a）は、擦文文化期の「墳墓」であろうと指摘している。

本遺跡のピット9は、トーサンポロ例と同様で、住居跡内ではなく、覆土中から東大編年擦文第Ⅱ型式の土器片が出土している事から、それ以降の所産と考えられ、前述のものとの類似から、擦文文化の所産の可能性がきわめて高い。（上野 秀一）

第2節 堅穴住居跡について

本遺跡でみつかった三軒の住居跡は、遺跡の北東部、標高15mの所に立地している。内二軒は、複合していた。

平面プランは、第1号A・B堅穴は、共に略々方形、第2号堅穴は、平行四辺形に近い方形である。規模は、各々5.7×5.5m、5.2×4.9m、5.80×5.07mである。平面プラン・規模共に、擦文時代の堅穴では平均的なものである。

長軸方位は、第1号A堅穴が、N67°E、同B堅穴がN23°W、第2号がN86°Eである。宇田川（宇田川1966）によると、札幌・苫小牧低地帯を中心とする日本海側では、長軸方位は「大部分が西に偏り、東に偏った場合でもその度合いが小さい」と述べているが、しかし、本住居跡では、第1号B堅穴を除いてあてはまらない。

カマド跡の方向を中心として主軸を求めると、第1号A・B堅穴は、N157°E、第2号はN176°Eで、略々南南東方向を向いているといえる。この傾向は、北海道のカマドを有する住居跡の中では一般的なものである。

柱穴に関しては、支柱穴は、第1号B堅穴、第2号堅穴共に4本である。第1号A堅穴の床面では、柱穴は確認出来なかったが、B堅穴床面の柱穴が二段構造で、建て直したと考えられ、A、B堅穴共、同一柱穴を利用したものと理解できる。第2号の支柱穴は、総て住居跡中央に向かって、若干傾斜している。それ以外に、第1号では、南壁上段に1対の住居跡中央に向かって斜めに掘り込ま

れたA堅穴に伴う柱穴があり、また21個の小ピットが東壁直下の溝中と北側壁よりにある。第2号でも、4個認められるが、カマド付近にあるものは一對をなす。

第1号B堅穴床面の東壁直下には、幅50~60cm、深さ10~15cm程の側溝があり、その内部には11個の小ピットがある。第2号の東壁北側にも側溝があり、北東隅に到って浅い2個のピットと連結している。これらの側溝は、一般的には排水用と考えられるが壁周を巡っていない点、その用途が問題となってこよう。

このように側溝内外に、小ピットが数多く認められる例は、幾つかあり、野付郡別海町浜別海遺跡第4、13号堅穴（北地文化研究会1971）、斜里郡斜里町ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点第9、10、13号堅穴（斜里町教育委員会1972）、紋別郡遠軽町寒河江遺跡第20号堅穴（遠軽町教育委員会1972）等をあげる事が出来る。この側溝ないし周溝に、かなり高いパーセンテージで、小ピットが認められる事は、側溝の上に小柱を伴った設備があった可能性がある。

第1号堅穴住居跡に認められた大きな三つのピットの内、ピット2と3に関しては、ピット2の城底面には、A堅穴の覆土の流れ込みが認められる所から、A堅穴に伴うと解せられるが、ピット3には、それはなく、セクションの観察からはB堅穴に伴った可能性が高いように思われる。共に各堅穴の長軸方向の一端にある事になる。

ピット1は、A堅穴の覆土、第V層を切って掘り込まれ、ピット内には第V層の二次堆積層が充填されている。従って、A堅穴廃棄後、第IV層の黒色土が堆積する以前の所産である。略長方形でコーナ及び底面は極めてシャープで、住居跡の壁の方向とは13°程ずれている。従って、住居跡とは直接関連しない。掘った工具、形態からいって、新しい時代の所産であろう。

さて、前述した住居跡と関連するピットの内、カマドの近くに認められる例は、まま認められる。常呂郡朝日トコロ貝塚Fトレンチ内堅穴（東大文学部編1963）、同郡ワッカ1、5号住居跡（東大文学部編1972）、釧路市緑ヶ岡S T V遺跡第4号住居跡（宇田川1972）、苫前郡羽幌町チライベツ遺跡第7、10、11号住居跡（石附1972）などである。これらは、貯蔵穴と考えてよいであろう。

これ以外に、カマドとは関係なく或はカマドが認められない住居跡で、ピットが認められる例もある。カマドのない例では、浜別海遺跡第4号住居跡、S T V遺跡第6号住居跡、カマドを有する例では、ワッカ遺跡第1、9号住居跡、十勝郡浦幌町十勝太古川遺跡第8号住居跡（浦幌町教育委員会1973）などをあげられよう。

この内、ワッカ1号住居跡は、カマドの反対側、西隅を切り込んで作られ、報告者は堅穴に伴う貯蔵穴であろうかと述べている。また、古川第8号住居跡例は、2個認められるが、その内大きい方は、カマドの反対側北隅を切り込んで作られ、中からフイゴロと鉄滓22片がみついているという。これらも、貯蔵穴と考えられる。

本遺跡の第1号住居跡内のピット2と3の用途に関しては、貯蔵穴ないしA堅穴構築の際の粘土張りのための粘土採掘穴であろうかと述べたが、以上の例から推して、貯蔵穴の可能性もあるが掘り込み・形態が極めて不定である事から、断定は出来ない。

また、石附（石附1973 a）が挙げている伊茶仁B遺跡第6号住居跡をはじめとする10例の住居

跡内の長方形ないし長楕円形のピットも、住居跡内ピットの特徴のある一つのタイプである。これらは、すべて住居跡の壁に平行している。これらの事実は、住居跡床面に直接掘られたか、或はその外形が判る時点で穿たれたものであろう。その意味で、本遺跡第1号住居跡のピット1とは性格を異にしている。

カマドは、共に南壁にあって、壁中央より、若干西に偏してある。主軸との振れは、第1号、第2号各々4°W、8°Eである。煙道は、共に所謂「角道」(宇田川1966)である。第1号は、総てトンネル状の掘り込みであり、第2号は、焚口付近は上から掘ってあり、煙出付近はトンネル状掘り抜きである。第2号では、明瞭な袖は認められなかったが、第1号には認められ、左袖は大きな円礫で補強している。

焚口の層堆積は、第2号では、「焼土」→「灰層」→「炭層」の順であり、第1号では、「焼土」→「灰層(1)」→「焼土+若干の灰」→「灰層(2)」という順序であって、第1号の方は二度に亘って用いられた事が判る。各々、B堅穴、A堅穴に伴うものであろう。共に土器の底部位破片を逆さにおいて支脚にしている。

さて、第1号住居跡には、西壁側に巾60~90cmのテラス状張り出しと、南壁から東壁中央にかけて、巾10cm程の張り出しのない段があり、このテラス状張り出しと対応する面に貼床が認められ、二枚の床面がある事が判明している。この事は、一段深く小さいB堅穴を放棄し、人為的に埋め、更に拡張してB堅穴のあった部分を貼床し、A堅穴を構築したもので、第1号堅穴住居跡はA堅穴とB堅穴の複合住居跡と理解出来る。

今まで、北海道の擦文時代の堅穴住居跡で改築ないし重複したと報告されている例は、管見の範囲では千歳市蘭越遺跡第1号堅穴(大場・石川1967)、稚内市恵北遺跡第2号堅穴(大場・菅1972)の二例である。蘭越の例は、第1跡と第2跡が交叉状に設けられて、カマドは共有していると述べられているが、平面図及び断面図からは、それらの関係は判然としない。遺物は、出土層位が一切明記されていないが、両住居跡とも略々同様の東大編年擦文第Ⅰ~Ⅱ型式の土器を出土しているようである。

恵北遺跡の例は、「窯の東から中央に向かって段が認められ、南東の部分では、床が二重になっている」と説明されているが、そのプランまでは明らかにされていない。出土土器は、擦文式土器とだけあり、具体的にどのようなものであるか、報告からは読みとれないのは遺憾である。

この二例は、もし報告者のいう通りであれば、重複した例であろう。

ところで、当時代の住居跡には二段構えのベンチないし段が、壁にそってあると報告された例が幾つかある。即ち、中川郡美深町紋穂内遺跡第1号、第2号住居跡(山崎1970)、常呂郡常呂町ワッカ遺跡第1号堅穴(東大文学部編1972)、十勝郡浦幌町十勝太古川遺跡第1号、第2号、第6号、第8号、第9号、第10号堅穴住居跡(浦幌町教育委員会1973)である。図のある例について個々にみていくと、紋穂内第1、2号住居跡は、壁の四周にベンチ状の構造があり、第1号では、柱穴が内部の立ち上がりの四隅に1個づつあったとされている。セクションで観察すると、第1号は、内側の段の内部には、黒色土と黄褐色土が堆積し、外側のベンチに対応する面には、褐色土と灰褐色

土が堆積していて両者の堆積の間には、一線を画する事も可能である。一方、第2号は、土層は上の段から下の段にかけて流れ込み状に堆積していて、セクションでは、段を有する単一時期の住居跡と理解される。

ワッカ遺跡第1号堅穴では、北西と北東壁の内部に一段床面の下がった面があるが、埋土の堆積状態からは、両者の切り合い、張り床といったものは検出されなかったという。

十勝太古川第1号住居跡では、北壁に二段構えのベンチがある。ただし、中央部約1m程は、それがないという。同第8号では、カマドを有する南壁を除いて、三周に幅40~60cmのベンチがある。報告者は、「(このベンチは)緩傾斜地を考慮して作出されたと思われるが、該ベンチは生活上種々利用されたものと考えられる。」と述べている。層堆積は、セクション図が示されていないので、判然としない。

この内、紋穂内遺跡第1号堅穴住居跡の例は、柱穴のあり方が一般的な擦文時代の住居跡としては例がなく、また、層堆積の面からも、二つの床面を想定しうる事から、二軒の住居跡が複合している可能性が極めて高い。4つの柱穴は、上の段の住居跡に伴うものであったろうか。十勝太古川遺跡で幾つかみられた例、とりわけ第8号住居跡も、セクション図がないので判然としないが、複合住居跡の可能性があるとされるように思われる。

本遺跡第1号住居跡例は、支柱穴、カマドを共有している事から、重複というより改築されたものと解せられるが、前述のように道内における擦文時代の住居跡の改築の問題は不明瞭な点が多く、今後充分検討してみなければならぬ問題であろう。即ち、擦文時代の住居跡が改築された例が少ないという事実から、オホーツク文化の住居跡において重複する例が多い事と対照的に語られて来ている。結局、この事は擦文時代人とオホーツク人との生業のあり方、文化面で明確に異なる事を示しているであろう。擦文文化における「焼家」の問題(なお、第1号A堅穴の床面で、焼土と炭化材がみられた事は、第4章で述べた。)定住性の問題等と共に今後明確にされねばならない。また、果してベンチを有する住居跡が擦文時代にあるのか、といった点もやはり今後の課題であろう。

それでは、今回の調査でみつかった三軒の住居跡は、いつの時代のものであろうか。第1号A堅穴に関しては、後述するように床面出土の土器より擦文第Ⅰ型式期初頭に比定される。第1号B堅穴では、床面・覆土から何ら遺物を検出しえなかったので、時代を決する事は難しいが、改築している事からみて、A堅穴とは大きな時間的差はないものと思われる。第2号堅穴住居跡も、同様に床面からは土器は出土していない。覆土の遺物は、擦文第Ⅰ型式の土器が主体を占め、それに第Ⅱ型式が若干含まれている。第1号A堅穴の覆土の土器に比べて、坏が僅少である事は大きな違いである。第1号A堅穴覆土の土器は、坏が多くその胴部には、一条の沈線が巡り、段は消失している。底は、平底である。即ち、桜井第二型式のそれに対比される。また、北大式の小片が若干あり、一方擦文第Ⅱ型式に対比しうるものは1片しか出土していない。また、擦文第Ⅰ型式の深鉢の大形破片が多い。また、¹⁴C年代測定の結果では、第1号A堅穴、第2号堅穴住居跡は、各々1050±60 B.P. (A.D. 900)、810±135 B.P. (A.D. 1140)という年代を得ている。

ともかく、第2号住居跡も、第1号A、B堅穴とはほぼ同時期である可能性が高い。

本遺跡の住居跡に最も近い時期の類例は、江別市飛鳥山、志分別遺跡（後藤1935 a）がある。第1号、第3号竪穴住居跡共、5 m前後の大きさの方形の住居跡で、カマドは南東ないし南々東にある。支柱穴は、4本柱を基本とするようである。従って、本遺跡の例と極めてよく合致している。この擦文時代初頭の住居跡の問題は、別な報告（加藤邦雄『札幌市文化財調査報告書』Ⅳ，1974）で述べられているので、詳細はここでは触れない。

さて、ピット群は、前述した通り、大まかに後北 C-D 式期から、北大式、擦文時代初頭（第Ⅰ、Ⅱ型式）の間の所産である。

それでは、それに隣接して発見されたこれらの住居跡とピット群は、擦文第Ⅰ型式の時期においては、極めて近接して併存した事になる。具体的に、ピットの覆土内の遺物から、この期に推定しうるものは、ピット4とピット7である。なお、ピット9、ピット20、ピット41も、ほぼ近い時期の所産である。ピット4と7は、住居跡群から17～20m離れている。一方、ピット9、20、41は、8～13mでやや接近している。

一般に、この時代には住居跡と墳墓は、各々群集して、別個に存在するのが通例とされる。しかし、ここでは近接して存在するという事は、いかに解釈したらよいのであろうか。今後、問題となるらう。

（上野 秀一）

第3節 土器群について

第5章、第1節で、発掘区出土の土器について、7類に分けて説明した。以下、個々に編年的問題、類例を探ってみたいと思う。

第1類、第2類およびピット13の第35図2の資料は、従来「後北式」ないし「江別式」（河野1935、1958、1959、河野・名取1938、名取1939）と称せられ、続縄文時代の土器とされている土器群である。

ピット13例は、後北B式、第1類、第2類は、各々後北C₁式、C₂式に相当しよう。後北D式に対比されるものは検出されなかった。この後北D式は、森田知忠（森田1967）により、後北C₂式と共に、「館浜文化」として一括されたものである。また、石附（石附1973 b）は、「微隆起線の有無によって形式的にⅢ-b式とⅣ式とは分類し得るが、実際の共伴関係例からみると両者の同時間的併存の度合は著しいようであり、江別Ⅳ式のみがどの程度純粋に存在したものか、十分に検討の余地がある……土器形式上、江別Ⅲ-b式からⅣ式への移行が十分になされる暇がないうちに、江別文化ひいては続縄文式文化が終末をとげた」と述べている。これらの考え方は、後述する北大式A型グループの問題を考える上で興味ある意見であろう。

さて、第3類として分類されたものは、円形刺突文（所謂「突瘤文」）を指標として、一般的に「北大式」と称せられるものである。

最近、菊池徹夫氏は、擦文式土器の基本形態の形成を論じた中で、北大式土器を幾つかに細分している（菊池1972）。それを参考にしつつ、以下土器のグルーピングと問題点を指摘してみたい

と思う。

円形刺突文を有するという事をメルクマールに、広義の意味で北大式土器の範疇に入るものは、文様要素・整形・器形などの違いから、五つにグルーピング出来る。更に、円形刺突文を欠くが、それらと関連の深いグループを加えて、以下六つに分けて説明する。

A 型

後北C₂-D式に円形刺突文が付加されたものである。略々完形に近い土器が、勇払郡早来町から出土している(野村1973a)。底部は欠損しているが、胴張りはなく、胴部から口縁にかけては、直口する。口唇部直下には、横に二本の微隆起線が巡り、この間に円形刺突文が付されている。地文として、特殊縄文が鋸歯状に施され、口唇部には刻目がある。

同様な例は、網走市モヨロ貝塚(大場1961)、常呂郡常呂町トコロチャシ1・2号 堅穴表土・埋土ほか(東大文学部編1964)、斜里郡斜里町禅竜寺(石附1973b)、野付郡別海町 浜別海遺跡4号 堅穴覆土(北地文化研究会1971)、夕張郡由仁町中三川(野村1973b)、余市郡余市町 フゴッベ洞窟(フゴッベ洞窟調査団編1970)などで出土している。

この仲間が果して、北大式土器の概念の中で捉えうるかどうかは、北大式土器そのものの概念規定とも関連して、大いに疑問の余地があろう。しかし、北大式土器に特徴的な円形刺突文を有するという点から、特に北大式の発生の問題を考える上で重要な意味をもつ土器グループと思われる。

B 型

平行細隆起線文を有する例である。釧路郡釧路村細岡(大沼1970)で完形品が出土しており、岩内郡共和村発足洞窟(小樽市博物館編1963)でも、ほぼ完形に近い土器が2点報告されている。前者は、底径が口径の1/3程で、底部の張り出しはない。多少胴張りするが、胴最大幅は、頸部下にある。口縁部はやや大きく外湾する。口縁部から頸部にかけては、横走の平行細隆起線文と、一列の円形刺突文がある。胴部全面に亘っては、LRの縄文が鋸歯状に帯を作って巡り、その間には、平行微隆起線文が施される。後者例は、発足洞窟の報告で第Ⅲ群1種とされたもので、底部を欠損するが、器形は、細岡列と略々同様である。ただし、小波状縁と小山形縁をもっている。その内、報告の第4図14は、胴部には文様はなく、15は縄文の替りに集合条線文が施されている。

同様な例が、勇払郡穂別町穂別中学校付近(河野本道1965)、トコロチャシ2号 堅穴埋土・発掘区(東大文学部編1964)、渡島郡八雲町八雲駅鉄道敷地(千代1965)、野付郡中標津町(大沼1968)、山越郡長万部町豊野(松下1965)、フゴッベ洞窟(フゴッベ洞窟調査団編1970)、斜里郡斜里町宇津内遺跡A地点堅穴外出土(米村・金盛1973)そして札幌市北大構内(菊池1972)などで認められる。また、青森県下北郡東通村浜尻屋遺跡(江坂1961)、宮城県玉造郡岩出山町(興野・佐藤1966、興野・遠藤1970)でも出土している。従って分布域は、道内全域と東北地方の宮城県迄といえる。

さて、このグループに認められる平行細隆起線文に関しては、森田知忠(森田1967)は、館浜文化(後北C₂-D式)の伝統の貼付文に由来すると述べている。

このA型・B型を、菊池（菊池 1972）は、「江別式末期の特徴と突瘤文とを兼ね備えた例」とする。

C 型

この仲間は、普通縄文と沈線文を有するグループである。種々のタイプがあるが以下に述べる四つの略々完形の土器にそれらは、集約出来るであろう。

(1)は、札幌市北大農場出土の資料で、千代（1965）の第Ⅴ図7の資料である。底部は欠損している。胴部最大径が、胴中央よりやや下にあり、口縁部は、ゆるく外湾する。口唇部直下にLRの縄文帯が横置き、ここに二本の横走沈線文と円形刺突文が一行ある。また、胴中央部にも、縄文帯と三本の横走沈線文がある。

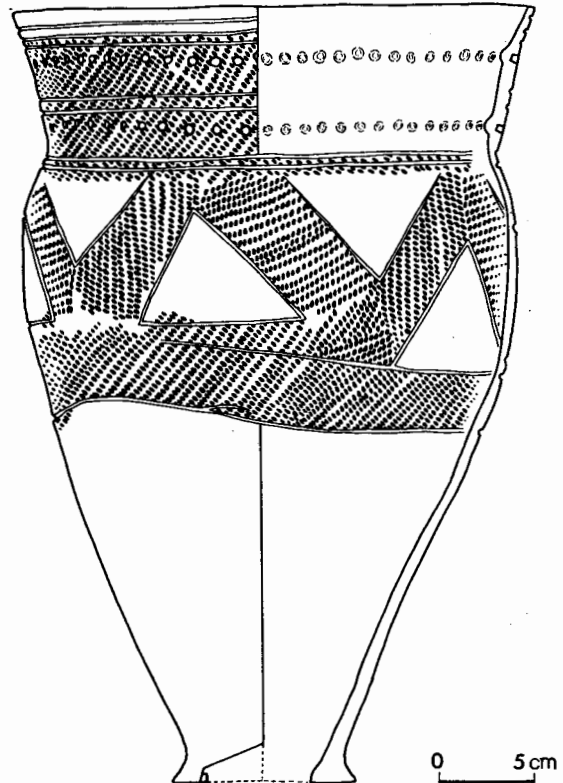
同様な例は、幾つかあると思われるが、小破片のため判然としない。

(2)は、余市郡余市町出土のもので、千代（1965）の第Ⅴ図6の資料である。底部には軽い張り出しがあり、底径は口径の約1/3強である。軽く胴張りするが、口縁部の開きはあまり大きくはない。口縁部から胴上部にかけて全面にLRの縄文が施され、その中口唇部直下と胴中央部に三本単位の鋸歯状沈線文が巡っている。

(3)は、野付郡中標津町から出土したもの（大沼1968）で、器形は、前述（1）、（2）例と同様である。底部を欠く。この例は、沈線文がなくRLの普通縄文が全面に亘って施されている。

類例は、シュクシタカラ遺跡第Ⅲ群第5・6類の沈線文ないし爪形文が欠除した例、白糠郡音別町ノトロ岬遺跡（富水 1970）、エトロフ島トシモエ包含地、オベボソ川下流包含地（滝口1953）などで認められる。

その(4)は、札幌市北大第一農場から出土したもので、現在、時計台に陳列されている資料である（第57図）。器高41cmで高く色調は灰褐色～灰茶色である。器形は、底部が口径の1/3程の大きさで、軽い胴張りがあり、頸部には明瞭なくびれがある。口縁部は外反し、底部には強い張り出しがあって、口唇部は平坦に整形されている。文様は、口縁部に二～三本の横走沈線を巡らし、その間に二列の円形刺突文がある。胴部には、LRの縄文帯を鋸歯状に巡らし、その間を三角形の沈線文で区画している。その下にも、縄文帯が横置きしている。胴下半部は無文である。底部は、意図的に破壊しており、欠損する。



第57図 札幌市北大第一農場出土土器実測図

これと同様のものは、阿寒郡阿寒町シュクシタカラ遺跡の第Ⅲ群第4類（岡崎・沢ほか1963）、中標津町（大沼1968）、夕張郡由仁町西三川（野村1973b）などにも見られる。

また、斉藤 傑（斉藤1967）の示した、北大構内出土の弧状に縄文帯を描く例も、このグループに属するものであろうが、未報告なので詳細を知りえない。

なお、菊池（菊池1972）は、この仲間の縄文はLRが主体を占めると述べているが、中標津例の如き例外もある。また、裏面に縄文を有する例もある。

D 型

この仲間は、無文（時には縄文）地に櫛状工具による集合条線文を鋸歯状ないし横走して施こすもので、完形品はない。

モヨロ貝塚（大場1961）の第17図E 36例、シュクシタカラ遺跡の第Ⅲ群第3類、恵庭市茂漁（大場・石川1966）などで出土している。量としては、多いとはいえない。

E 型

この仲間は、縄文が姿を消し、無地となり擦痕、篋整形が出現してくるものである。

- (1) 全く無文のものと、
- (2) 鋸歯状および平行沈線文があるものがある。

(1)の完形土器は、白老郡白老町アヨロ遺跡で「擦文式土器A型」といっているもの（名取・峰山1962）、それに発足洞窟の第Ⅲ群3種の内、報告の第3図9（小樽博物館編1963）などにある。

これらに通じていえる事は、底部には張り出しがあり、底径が口径の1/3程で、胴張りし頸部には段ないしくれびを有し、口縁が大きく外湾する点、及び篋整形がある点であろう。また、亀田市銭亀沢・汐泊遺跡（汐泊川遺跡調査団1965）の円形刺突文を有する例も、底径は差程小さくないが、その他の点では、上述2例とよく一致している。ただ、アヨロ例と汐泊例では、胴部最大径がくびれの所にあるのに比べ、発足例では、くびれの下、胴中央部に認められ、異なっている。なお、余市郡余市町天内山遺跡の報告の第19図の2（峰山・金子・松下・竹田1971）も爪形文を有するが、局視的にはこの仲間に入るものであろう。

類例は多い。恵庭市茂漁（大場・石川1966）、夕張郡由仁町中三川、西三川（野村1973b）、室蘭市祝津（大場ほか1962）、浜益郡浜益町岡島洞窟（大場・石川1961）、シュクシタカラ遺跡第Ⅲ群第1類などがある。

一方、(2)の仲間の好例は、余市郡余市町天内山遺跡の報告第18図1、第19図1（峰山・金子・松下・竹田1971）および発足洞窟第Ⅲ群4種などにある。器形・整形は、沈線文のない(1)のグループと同様である。沈線文は、発足例では、鋸歯状文が逆に組み合わせられてX字状に施され、天内山の第19図1は、やはり鋸歯状文が重複して組み合わせられ、格子目状になり、頸部には、三角形の列点文がある。第18図の1も、鋸歯状文と横走沈線の組み合わせである。

類例は、トコロチャシ発掘区（東大文学部編1964）、浜益町岡島洞窟（大場・石川1961）にも認

められる。

F 型

この仲間は、円形刺突文を欠くが、器形・整形・文様の上で、E型と全く同一か、親接性のあるグループである。これも、

- (1) 無文のもの、
- (2) 沈線文があるものがある。

完形品は、天内山遺跡の第1号、第7号ピット出土一括土器及びC区墓域外出土の第19図3の資料（峰山・金子・松下・竹田1971）、発足洞窟第Ⅳ群の報告第4図16、17（小樽博物館編1963）、汐泊遺跡（汐泊川遺跡調査団1965）そして寿都郡樽岸町朱太川左岸河口付近出土の報告第22図9・35の例（大場・棚瀬・金子1963）などがある。

器形・整形は、E型と同一である。即ち、底部には張り出しがあり、底径が小さく、胴部の最大幅が、頸部からその直下にあり、口縁は大きく外湾するものである。顕著な整形のない例もあるが、天内山、汐泊の例には、擦痕と篋整形が明瞭にある。天内山第1号ピットでは、これに、爪形文を有する注口土器が出土している。器面には、刷毛目痕がある。これは、統繩文的色彩が濃い資料である。また、共伴関係が定かではないが、汐泊遺跡では、これ以外に前述したE型の円形刺突文を有する土器と、坏が共に採集されたという。この坏は、丸底で、胴部に段を有し、桜井第一型式（桜井1958）のそれに近似している。

一方、(2)の資料は、虻田郡豊浦町小幌洞窟A地区出土の報告第8図A138、A77、A135の1、A134（北大解剖教室調査団1963）、アヨロ遺跡の報告第17図2、5、7、9、11（名取・峰山1962）などにある。菊池（菊池1972）によると、千歳市ウサクマイ遺跡でも出土しているらしいが、未報告であるのは遺憾である。

小幌洞窟のA138例は、底部を欠損するが、頸部は心持ちくびれている。文様は、横走沈線と鋸歯状文である。A77例から推察するに底部はやや小さく、張り出しがあったのかもしれない。共に篋整形がある。恐らく(1)のグループに近い器形であったろう。また、A135の1、A134は、汐泊遺跡と類似した段を有する坏の破片であろうか。

以上通観して判断される事は、円形刺突文を欠除するF型のグループを除いて、分布域は、道東、石狩低地帯から道南迄分布し、A～E型迄の間に分布上で大きな差は認められない。F型は、現在の資料では、道東にはなく、石狩低地帯より渡島半島迄である。なお、B型では、東北地方迄分布域を広げている。東北地方では、後北式の末期の土器が、やはり分布している事から、このB型の分布のあり方は、後北式の末期のものと同代的に近い位置にある事を示唆するものかもしれない。

また、器形の点では、全体形を窺いえないD型を除いて、C型・E型・F型は、極めて共通性があるといえる。底径が口径の1/3程で、胴張りし、頸部にはくびれを有し、胴最大幅が、このくびれ部分ないしその直下にあり、口縁部が、くびれ部分から大きく外湾ないし外反するものである。細岡出土のB型の例も底部の張り出しはないが、上述のものと極めて共通性がある。しかし、こ

のB型は破片からの観察では口縁部が内湾する例もあり、全体からみると前述のものとは、差異があるのかもしれない。A型は、明らかに後北C₂-D式の器形であろう。

また、文様の点でも、施文原体は、様々であるが、A型の早来町の例にみられる特殊縄文が、鋸歯状的に施されるのを初源として、一貫してF型迄このモチーフは、変わらない。即ち、B・C型のLRの縄文帯を鋸歯状に胴部に施す例、D型の集合条線文を鋸歯状に施す例、E・F型の沈線文を鋸歯状に施す例として受けつがれていっている。

さて、所謂「北大式」土器を研究史的にみていくと、初期の捉え方は名取武光（名取1939）の後北D₂式、河野広道（河野1955）の後北E式されている様に、続縄文時代の後北式土器文化の流れの中の一型式と考えていたようである。その後、河野（1958）、河野（1959）において、後北E式（北大式）、北大式=後北E式という表現に変っている。そしていう「これは縄文土器から擦文式への移行期の形式である」と。これだけの表現からは、真意を解しかねるが、続縄文時代と擦文時代の間に北大式土器期という独立の時期を考慮しておられたのであろうか。他方、名取武光・峰山 巖（名取・峰山1962）は、アヨロ遺跡の報告の中で、この仲間を「擦文式土器A型」として扱っている。この事もまた重要な指摘であろう。

その中であって、松下 亘（松下1963）は、この土器には、(1)後北式と関係ありそうなグループと(2)擦文式と関係のありそうなグループの二つが存在するとした。その後、沢 四郎（岡崎・沢・富水・藤村1963）、竹田輝雄（小樽博物館編1963）、松下（松下1965）などの細分があるが、それらは形態上の分類であり、擦文式土器、しいはこの頃北海道に波及したであろう土師器との関連等については一切触れられていない。

昭和40年に至って、石附喜三男（石附1965）は、北海道における土師器の分析の中で、従来いわれて来たように擦文式土器と北大式土器が連続的關係を有するとは、器形・文様上の検討からは一概にいえず、擦文式土器は、土師器から直接的に移行したもので、また発足洞窟で、北大式に桜井第一型式に属する土師器の甕に類似する資料が伴っている事から、少なくとも北大式土器の一部は、時間的に擦文式土器と併存した可能性が強いと述べている。

この様に、北大式・擦文式土器を土師器との関連で捉えるという傾向は、その後、森田知忠（森田1967）、斉藤 傑（斉藤1967）の諸論考に引き継がれる。森田は、一番新しい北大Ⅲ式と桜井第一型式との併行関係を考え、また斉藤は、北大Ⅱ式、Ⅲ式は各々桜井第一、二型式と併行関係にあるだろうとする。斉藤のいう北大Ⅱ式とは、前述したC型に属し、森田及び斉藤のいう北大Ⅲ式はE型に属する。

石附（石附1968）は、また擦文式土器の初源の形態に関する研究の中で、この問題に触れているが、前掲の論考とさして変る所はない。そしていう「江別式土器にみられたいかなる要素も擦文式土器中には認められない………実は、北大式土器における擦文式土器につながる要素というものは、土師器に起源を有するとみられ………してみれば、北大式の存在は、初期の擦文式土器と併存関係にあったとみるべきもの」とするのである。そして「江別式土器の終末、ひいては続縄文式文化の終末が八世紀前半まで降る可能性が強い」という。更に、石附（1973b）においても「私のこ

うした考えは、基本的には現在も変わっていない」として、具体的に「江別Ⅲ-b式及びⅣ式土器に土師器が接触し北大式土器が生じた」と述べている。

この石附の考えは、北大式土器には、器形・整形の上で土師器的な要素が濃い反面、擦文式土器における刻文という文様要素と北大式における文様要素が、必ずしもつながらないという事、土師器の北海道への上陸時期と擦文式土器の上限の問題との兼合から、恐らく帰結されたものである。しかし、石附の論考の中で、最も曖昧にされているのが、如何せんこの北大式土器そのものであって、果して北大式が、種々文様上・整形上で変化があるが、これが単一なものなのか、幾つかの形式に細分されるものなのかといった点が明確ではない。もし細分されるのであれば、具体的に、擦文文化初頭の土器群とどういう時間的・分布上の関係があるのか、より詳細に検証してほしいと思うのである。また、分布上の問題に関連して、異なった人間集団が、同時併存した場合、それらの人間集団の生産基盤・経済関係・立地性がどういふ関わり合いをもち、どういふふうにならなっていたのかも明らかにされねばならないであろう。

一方、菊池徹夫（菊池1972）は、このような石附の考えに対して、反論を加えている。氏は河野（河野1959）の観点に立脚して北大式前後の土器を以下の如く四つに分けて説明する。

- (1) 江別式末期の特徴と突瘤文を兼ね備えた例
- (2) LRの普通縄文をもち、それに突瘤文が施文されるグループ
- (3) 縄文を欠き、突瘤文がある例
- (4) 突瘤文をもち、平行沈線による鋸歯文のみをもつ例

(1)に関しては「あくまでも江別式末期に属せしめてよい」とし、(4)は、器形的に桜井第一型式の土師器の影響を受けているが、いまだ縄文的であり「ブレ擦文」と仮称し、擦文式土器Aの直前にくるものとしている。しからば、(2)と(3)は何処に位置づけるものであろうか。氏のこの論文では、北大式土器の明確なグルーピングとそれらが編年的に前後関係を有するか否かといった点は、(1)と(4)を除いて明確には触れられていないが、恐らく(2)と(3)は、(1)と(4)の間に編年されると解される。もし、(2)と(3)の仲間が、(4)よりも古く位置づけるというのなら、特に(3)において器形・整形面で、(4)あるいは桜井第一型式と近似するといった問題はどうか解釈したらよいのであろう。

さて、以上先学の業績と問題点を幾つか指摘したが、これらはいかに解決されるであろうか。結論を先にいうと、私の考えは、基本的には菊池（菊池1972）のそれと大きな違いはない。

A型は、円形刺突文をメルクマールに広義に北大式といった場合に一番古く位置付けられるもので、その後文様の主流を占める円形刺突文という伝統が、後北C₂-D式期の時点で、影響された事を証明するものであろう。その意味では、厳密にいうと「北大式」の範疇からはずれないものかもしれない。しかし、特殊縄文のあり方は、後北C₂-D式のそれではなく、前述した通り鋸歯状のそれである。この円形刺突文は、松下（松下1965）は、十和田式に由来するという考えをもっている。それであるなら、北大式の発生には、土師器の影響というより、オホーツク式土器の古手のものが、関与しているという問題が出てくる。B型も、器形的には、C型・E型と類似する例があるにしても、微隆起線文というそれ以前の文様要素が、色濃く残在し、口縁部が波状を呈する例がある

事からも、A型の次に編年され、北大式の中では古いステージに位置するものであろう。ここでみられる、胴部文様帯のモチーフ——平行微隆起線文の間に、縄文帯（ないしは集合条線文）が、鋸歯状に施されるという文様構成は、前述した通りC型の鋸歯状の縄文帯、D型の集合条線文が鋸歯状に施される例、しいては、E・F型の鋸歯状沈線文に受けつがれていくものであろう。また、器形的にも、この時点で後北C₂-D式的な器形が変質し、C・E型などにみられる器形の崩芽があったとみるべきなのかもしれない。この変質する契機というものは、現時点では明確にしえない。

F型では、桜井第一型式の土師器の影響があったと解してもいいであろう。E型は、発掘区出土の資料でみると、この段階において、整形の上で、擦痕、篋削りが全く認められないもの（第51図13、第53図1～4ほか）とそれが認められるもの（第51図14、16、17）とがあるようであり、E型の段階でも、その一部では、土師器の影響があった事は充分考えうる。従って、その編年の位置は、F型の直前にくるであろう。

資料的に少ないD型は別にして、C型はそれでは、どういう位置を与えるであろうか。器形的には、E型により近く、文樣的には、B型の平行微隆起線文が消失し、縄文帯とそれを囲む沈線文が残ったものとして解する事が可能である。即ち、B型とE型の間に編年されるであろう。

斯く考えると、C型（考え方によってB型の段階で）の時期から、E・F型にみられる如き器形を呈するのは、いかに解決されるかという問題が残る。即ち、古い段階から、何故土師器の甕に類似した器形を呈するのかといった問題である。この点は、未解決であるがただ疑問として、もしこれらの土器に土師器の影響があったというのなら、土師器に内包する土器製作総体——土質選択・混物・輪積み・巻上げ・焼成方法・整形の仕方といった土器製作上の技術、そして器種のセット、更には住居跡構造、農業技術、機織技術等々といった生活技術総体も、本来土師器の甕一人が伝来してくるのではなく、共に伝わると思われるのである。それが少なくともこのB・C型においては、誠に稀薄で、甕の器形という点のみである事は、奇異な感じを覚える。従って、積極的な証拠ではないにしても、前述B・C型の段階では、まだ土師器文化の影響がなかった可能性が強いのではなからうかと思っている。尤も、この様な面での追求は、東北地方の土師器文化の様相の追求、北大式土器の土器製作上の問題、器種のセット関係、住居跡構造といった、より詳細な研究をまたねば出て来ない事は確かである。今後の課題としたい。

本遺跡第1号堅穴住居跡A堅穴床面からは2個のはぼ完形土器が出土した（第6図1, 2）。これはセットして捉えうる。この内、2の資料は、施文原体が篋の連続刺突という点で異なるが、文様構成そのものは、F型の(2)のそれと同一である。器形的には、底部に張り出しがある点と口縁部が大きく開く点も、F型と同じであるが、頸部のくびれが不顕著である点、口唇部に刻目がある点は、より東大編年の擦文第Ⅰ及び第Ⅱ型式以降のそれに近づいているといえる。1の資料は、口縁部を欠くが、江別市飛島山、志別分遺跡（後藤 1935 a）の甕の器形に類似する。この事は、菊池（1972）のいう「プレ擦文」と菊池（1970）のいう「擦文式土器A」ないしは石附（1968）のいう「擦文第一型式」の一部とが同時期である可能性が出てくる。ただ、2の資料は、前述した通りF型の中でも、典型的なそれではなく、多分に擦文化している。この事は逆に「プレ擦文」と「擦文式土器A」

が、同時期というよりも、より近接した時期の所産の結果で、古い文様要素が残在した結果という形でも理解出来るかもしれない。この事は、恵庭市中島松堅穴(大場・石川1966)、浜益郡浜益町岡島洞窟第三遺物包含層(大場・石川1961)などの擦文式土器Aの甕と共伴した坏が、桜井第二型式のそれであり、また恵庭市西島松南B遺跡第一号堅穴では、須恵器を伴ない、一方E～F型の土器を出土した汐泊遺跡で共に採集された坏は桜井第一型式のそれであるという点からも推察される。

斎藤 傑(斎藤1967)は、根拠は明確でないが、北大Ⅲと土師器Ⅱを併行関係においている。前述した通り、E型の段階で、土師器の影響があったと考えられるので、ほぼ正しいものであろう。即ち、E型とF型の段階では、桜井第一型式の土師器と併行関係にあったと思われる。E型になって、それ以前の縄文の要素が消失した事も、この事を裏づける。即ち、土師器の影響があったが故に、A～C型にみられた縄文要素が消失したものと解せられるのである。

そして、本遺跡第1号A堅穴床面で、斎藤の土師器ⅢとE型の系統を引く資料が共存したという事実は、一方では北大式から擦文式土器へのつながりを、菊池(菊池1972)の考えるように一系統的なものとして考え難い事も示している。従って、編年の流れは、菊池のいうそれであっても、なお擦文式土器の発生の問題は、複雑な様相を呈するようである。特に、擦文第一型式にみられぬ、横走する平行沈線文とE・F型の鋸歯状沈線文とは必ずしもつながらない様に思われ、そこに石附(石附1965, 1968, 1973)のいう、「土師器から直接的に擦文式土器へつながる」という意見も、一概には否定出来なくなってくるのかもしれない。しかし、現時点ではこの問題は解決されない。今後の課題である。

本遺跡発掘区出土の第3類土器は、文様要素の検討から5つに分けられたが、この内、(1)はC型、(2)はB型、(3)～(5)はE型に相当しよう。また、ピット1から出土した完形土器はF型に対比される。

第4類とした土器は、無文地に2～3本単位の鋸歯状沈線文があり、それを区画するように、上下に一本の沈線文が横に巡っている。器形は、少し胴張りする。この仲間は、口縁部が欠損するので、円形刺突文の有無は明確ではないが、上でEないしF型としたものの内、沈線文のあるタイプに対比される。

なお、第3類の中で説明した、第51図19例は、破片が小さいためはっきりしないが前述のA型の仲間かもしれない。また、第51図10は、フゴッペ洞窟(フゴッペ洞窟調査団編1970)で類品が出土している(報告の第27図版上段)。口唇部直下に、刻目のある細い貼付帯が2条巡る点からみて、後北D式に近い時期の所産であろうか。

第5類としたものは、発掘区からの出土量が少なく、明確にしえないが、東大編年の擦文第1型式(東大文学部編1964)、或は石附(石附1968)の擦文第一型式に相当しよう。第6類は、同様に石附編年の擦文第二型式、第7類は、東大編年の第Ⅲ型式ないしは、菊池編年(菊池1970)の擦文式土器CないしDに相当しよう。

即ち、本遺跡では、後北B式から擦文第Ⅲ型式までの土器群があり、その内発掘区とピットでは後北C₂式と北大式が主体を占め、住居跡では擦文第Ⅰ型式が多く出土しているのである。

(上野 秀一)

第4節 石器群について

本遺跡の石器群の特色は、縄文晩期から統縄文時代初頭にかけての特徴的な石器組成が完全に失われ、主体を占めるものが小型の搔器類であって、あとは定形的な器種は全くないか、あっても量的に少ないという事が指摘できる。

この事は、この遺跡が営まれた、後北 C-D 式、北大式、擦文時代初頭の時期には、石というものが、生産用具を製作する素材としての意義を失っていた事を示すものであろう。即ち、金属器がその主役になりつつあった事を示しているものと思われる。ただ円形搔器のみが、その用途とも関連して、石を原材としている点は、今後追求してみなければならない問題である。

なお、遺構及び発掘区からは、扁平石核(の残核)と思われる資料が比較的多く検出されている。それらは、定形的なものではないが、扇状剥片ないし矩形剥片を生産している。搔器類の素材は、発掘区出土の石器の項で詳述した如く、背面に幅広く原石面を残す部厚い素材を使っている例もあるものの、幅広・矩形の剥片を素材にしているものもある。恐らく、これらの扁平石核は、後者のような搔器類の素材を生産するために用意されたものであろう。

千代肇(千代1967)は、北大式土器にこの種の円形搔器が多いといっている。

なお、ピット9から出土した側縁に二次加工のある剥片は、二次加工以外は、水和層が厚く、転礫したかの如き傷跡がある所から古い時代に生産された剥片を再利用している事が解る。また、発掘区の攪乱層から出土した1点の両面加工の尖頭器(第54図14)も、水和層が発達し、転礫した際の傷跡(擦痕とぶつかりあった際の傷)があり、同様に、古い時代に両面加工に作られたものを何処からか持って来たものであろう。

これらの統縄文時代終末から北大式、擦文式時代における、生産用具——とりわけ、石器製作技術の衰退の問題は、機会を改めて述べてみたいと思う。

(上野 秀一)

結 語

以上、各項目別に述べたが、N162遺跡は、統繩文時代末（後北C₂）から北大式、擦文第Ⅰ、Ⅱ型式にかけての、土壙墓群と擦文時代初頭の住居跡のある遺跡である。

ピット群——土壙墓群は、副葬品のある例が殆どなかったため、その年代を確定する事は難しかったが、北大式土器時代前後の土壙墓の問題に、新たな例と幾つかの問題を提起した。特に、ウサクマイ遺跡で、特徴的に認められた、B型のピット内外に柱穴のある例は、この時代の一つのタイプという感を強くした。

ただ、土壙墓群のタイプと時代との関連、また分布状態とタイプ・時代との関連は、細かな分析を通して、明確な結論は出なかった。

住居跡は、三軒みつかっているが、その内第1号A・B堅穴は、改築されたものである。この種の例は、今迄擦文時代の住居跡ではないとされて来たものであった。このような問題は、オホーツク文化との対比の中でその生産基盤の違いと関連して追求されねばならない。そして、第1号、第2号堅穴住居跡共に、擦文時代最初頭に位される時期のもので、該期の数少ない好例となる。

ピット群と住居跡は、併存した時期があったと思われるが、墓域と生活地域との関連の問題は、今後の課題として残される。

土器に関しては、第1号A堅穴床面出土の一括資料は、北大式の問題、擦文式土器発生などに大きな問題を投げかけるであろう。そして、北大式土器の編年と位置付けの問題は、本書の考察編で述べた通り、初期にはオホーツク式土器の影響をうけ、末期に至って土師器の影響をうけ、時代的には、統繩文時代と擦文時代をつなぐ土器であろうと述べた。しかし、北大式から擦文式土器へ、或は土師器から擦文式土器へといった、具体的な経緯は、遺憾ながら不明瞭のままである。

石器は、円形搔器が主体を占め、他の器種は消滅したか、数量的に極めて少ないものである。この時代の直接生産用具の追求は、金属器の日常利器としての浸透の問題とも関連して、北大式土器前後の時代の生産基盤の究明、そして内地の土師器文化との関り合いを明らかにする上で、重要であろう。

今回の報告書は、事実をいかによく伝えるかという事に、主眼をおいて書いた心算だが、いかにせん力量不足で、曖昧なまま、或は誤って伝えている部分もあるかもしれない。また、多くの問題点が提出されたが、それは殆ど未解決のまま残されてしまった。その点は、御指摘、御指導頂ければ幸甚である。

この報告書は、該時期の土壙墓、住居跡そして土器の問題を解明する上で、重要な資料を提供するものと確信している。

（上野 秀一）

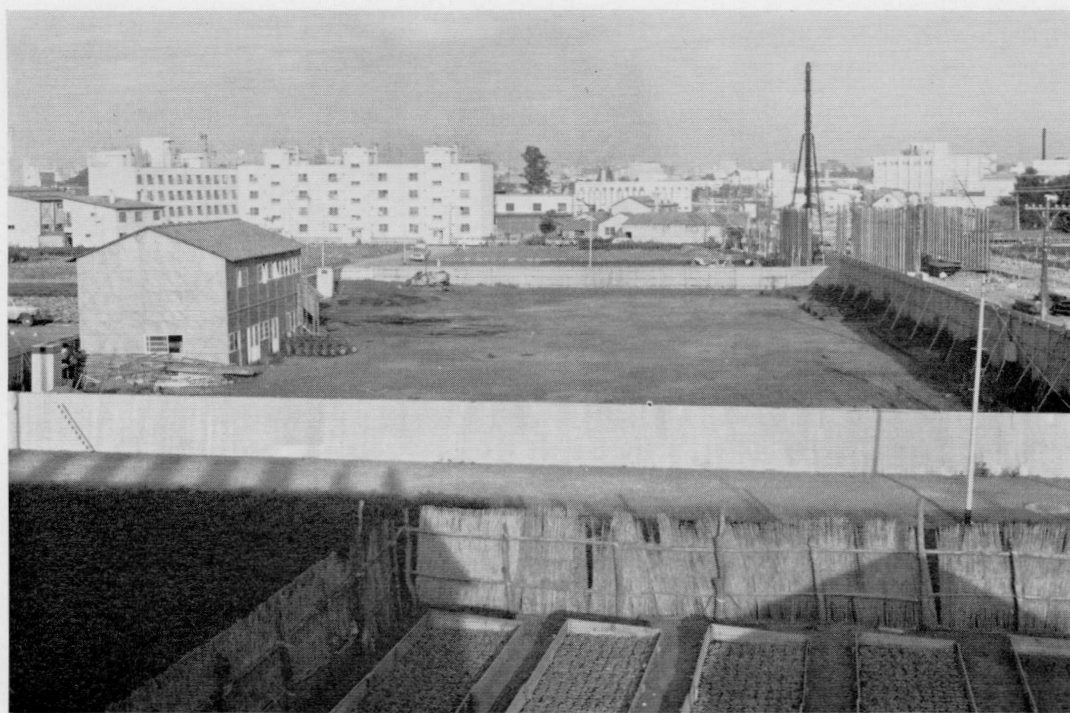
□ 引用・参考文献

- 石附喜三男 1965「北海道に於ける土師器の諸問題」『先史学研究』5所収
- 石附喜三男 1968「擦文式土器の初現的形態に関する研究」『札幌大学紀要』1所収
- 石附喜三男 1972『伊茶仁B地点——第1次発掘調査報告』(単)
- 石附喜三男 1973a「擦文式文化における墳墓の様相」『古代文化』25-2・3所収
- 石附喜三男 1973b「江別式土器の終末年代と所謂『北大式土器』(一)」『札幌大学紀要』5所収
- 岩崎 隆人・宇田川 洋・河野 本道・西野 彰子 1963「札幌市附近の遺跡——収録篇・分布図篇」『郷土の科学』41・42所収
- 宇田川 洋 1966「北海道に於ける擦文式土器時代の竪穴住居跡」『物質文化』8所収
- 宇田川 洋 1972「擦文集落の分析例」『物質文化』19所収
- 浦幌町教育委員会 1973『十勝太古川・若月遺跡調査概報(第一次)』(単)
- 江坂 輝弥 1961「先史時代における奥羽地方北部と北海道地方の文化交流の研究」『民族学研究』26-1所収
- 遠軽町教育委員会 1972『寒河江遺跡』(単)
- 大場 利夫 1961「モヨロ貝塚出土の土器——所謂前北式・後北式・擦文式土器」『北方文化研究報告』16所収
- 大場 利夫・石川 徹 1961『浜益遺跡』(単)
- 大場 利夫・石川 徹 1966『恵庭遺跡』(単)
- 大場 利夫・石川 徹 1967『千歳遺跡』(単)
- 大場 利夫ほか 1962『室蘭遺跡』(単)
- 大場 利夫・菅 正敏 1972『統稚内・宗谷の遺跡』(単)
- 大場 利夫・棚瀬 善一・金子 有明 1963『寿都遺跡』(単)
- 大沼 忠春 1968「北海道東部の北大式土器」『若木考古』92所収
- 大沼 忠春 1970「〔資料紹介〕釧路村細岡出土の北大式土器」『釧路市立郷土博物館館報』204所収
- 岡崎 由夫・沢 四郎・富水 慶一・藤村 久和 1963「北海道阿寒町布伏内シュクシタカラ遺跡発掘報告」『北海道阿寒町の文化財』1所収
- 小樽市博物館編 1963『発足岩陰遺跡』(単)
- 菊地 徹夫 1964「千歳市ウサクマイ遺跡略報」『北海道青年人類科学研究会会誌』3所収
- 菊地 徹夫 1970「擦文式土器の形態分類と編年についての一試論」『物質文化』15所収
- 菊地 徹夫 1972「擦文式土器基本形態の形成」『北海道考古学』8所収
- 興野 義一・佐藤 信行 1966「突瘤文土器を出土した宮城県岩出山遺跡」『日本考古学協会昭和41年度大会研究発表要旨』所収
- 興野 義一・遠藤 智一 1970「宮城県玉造郡岩出町の考古学遺跡」『岩出町史』所収
- 河野 広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6所収
- 河野 広道 1955「先史時代史」『斜里町史』所収(『続々北方文化論』河野広道著作集Ⅲ 1972所収)
- 河野 広道 1958「先史時代篇」『網走市史』所収(『続々北方文化論』河野広道著作集Ⅲ 1972所収)
- 河野 広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』23所収(『続々北方文化論』河野広道著作集Ⅲ 1972所収)
- 河野 広道・名取 武光 1938「北海道の先史時代」『人類学・先史学講座』6所収(『アイヌと考古学』I 名取武光著作集I 1972所収)
- 河野 本道 1965「穂別町の先史時代」『穂別町史』所収
- 後藤 寿一 1935a「石狩国江別町の竪穴住居跡について」『考古学雑誌』25-2所収
- 後藤 寿一 1935b「石狩国江別町に於ける竪穴様墳墓について」『考古学雑誌』25-5所収

- 後藤 寿一・曾根原武保 1934「胆振国千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌』24-2所収
- 小山内 熙・杉本 良也・北川 芳男 1956『5万分の1地質図幅説明書——札幌』北海道地下資源調査所
- 齊藤 傑 1967「擦文文化初頭の問題」『古代文化』19-5所収
- 桜井 清彦 1958「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』所収
- 札幌市史編集委員会編 1956『琴似町史』(単)
- 札幌市史編集委員会編 1958『札幌市史——産業経済篇』(単)
- 斜里町教育委員会 1972『ピラガ丘遺跡——第Ⅱ地点発掘調査概報』(単)
- 高橋 正勝編 1971『柏木川』(単)
- 滝口 宏 1953「エトロフ島の土器」『古代』11所収
- 千代 肇 1965「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』1所収
- 千代 肇 1967「北海道続縄文文化終末の石器について」『北海道考古学』3所収
- 東京ソイル・リサーチ 1973『土質調査報告書——二十四軒マンション新築工事地盤調査』(単)
- 東大文学部編 1963『オホーツク海沿岸、知床半島の遺跡』(上)(単)
- 東大文学部編 1964『オホーツク海沿岸、知床半島の遺跡』(下)(単)
- 東大文学部編 1972『常呂』(単)
- 富水 慶一 1970「白糠郡音別町の擦文文化遺跡調査概報」『北海道考古学』6所収
- 名取 武光 1933「北海道江別兵村に於ける竪穴式墳墓の発掘報告」『考古学雑誌』22-11所収(『アイヌと考古学』| 名取武光著作集| 1972所収)
- 名取 武光 1939「北海道の土器」『人類学・先史学講座』10所収(『アイヌと考古学』| 名取武光著作集| 1972所収)
- 名取 武光 1940「北海道後島古釜府に於ける後期薄手縄文土器期の竪穴様墳墓」『考古学』11-11所収
- 名取 武光・峰山 巖 1962「アヨロ遺跡」『北方文化研究報告』17所収
- 野村 崇 1973a「早来町の先史時代」『早来町史』所収
- 野村 崇 1973b「由仁町の先史時代」『由仁町史』第三編所収
- フゴッベ洞窟調査団編 1970『フゴッベ洞窟』(単)
- 藤本 英夫 1964「ウサクマイ墳墓——第2次調査(略報)」『北海道人類学通信』3所収
- 北大解剖教室調査団 1963「小幌洞窟遺跡」『北方文化研究報告』18所収
- 北地文化研究会 1971『浜別海遺跡』(単)
- 松下 亘 1963「いわゆる北大式についての一考察——続縄文文化の終末と擦文文化の初源との問題」『北海道地方史研究』46所収
- 松下 亘 1965「北海道の土器にみられる突瘤文について」『物質文化』5所収
- 峰山 巖・松下 亘・竹田 輝雄・金子 浩昌 1971『天内山』(単)
- 森田 知忠 1967「北海道の続縄文文化」『古代文化』19-2所収
- 八幡 一郎編 1966『北海道根室の先史遺跡』(単)
- 山崎 博信 1965「北海道紋別郡興部町の遺跡」『道北文化研究』5所収
- 山崎 博信 1970『紋穂内遺跡』(単)
- 汐泊川遺跡調査団 1965「汐泊遺跡(汐泊川遺跡群第一地点)の資料」『Field』2所収
- 米村 哲英・金盛 典夫 1973『宇津内遺跡』(単)



A 遺跡遠景（南東より）



B 遺跡遠景（北西より）



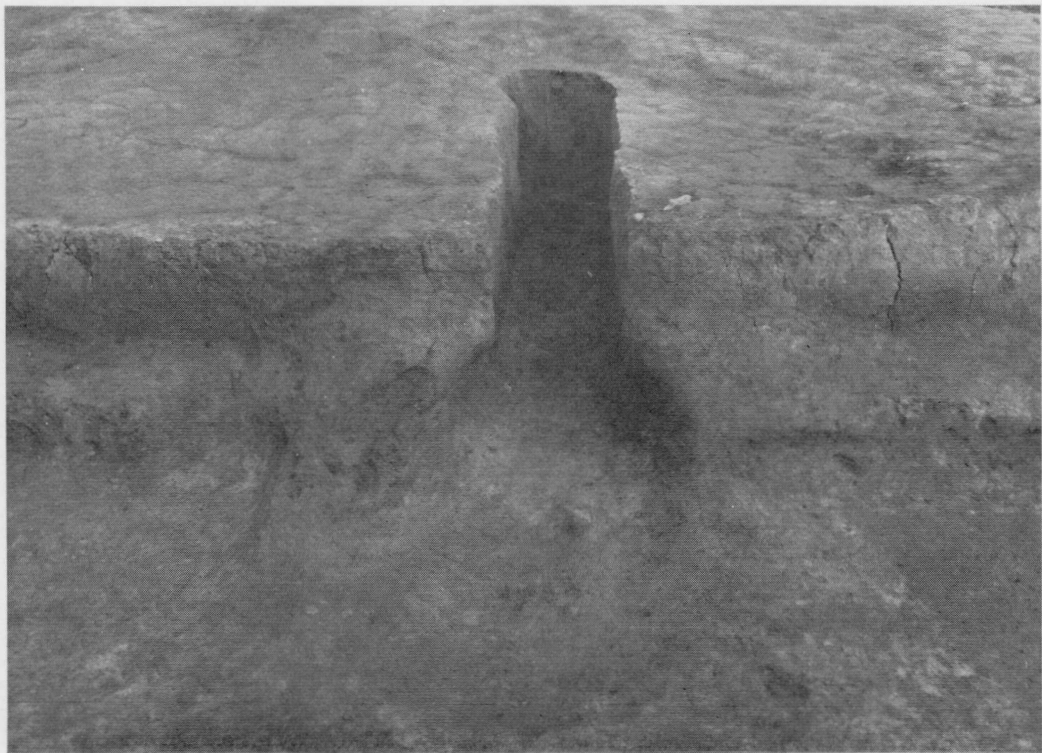
A 第1号, 第2号竪穴住居跡 (北より)



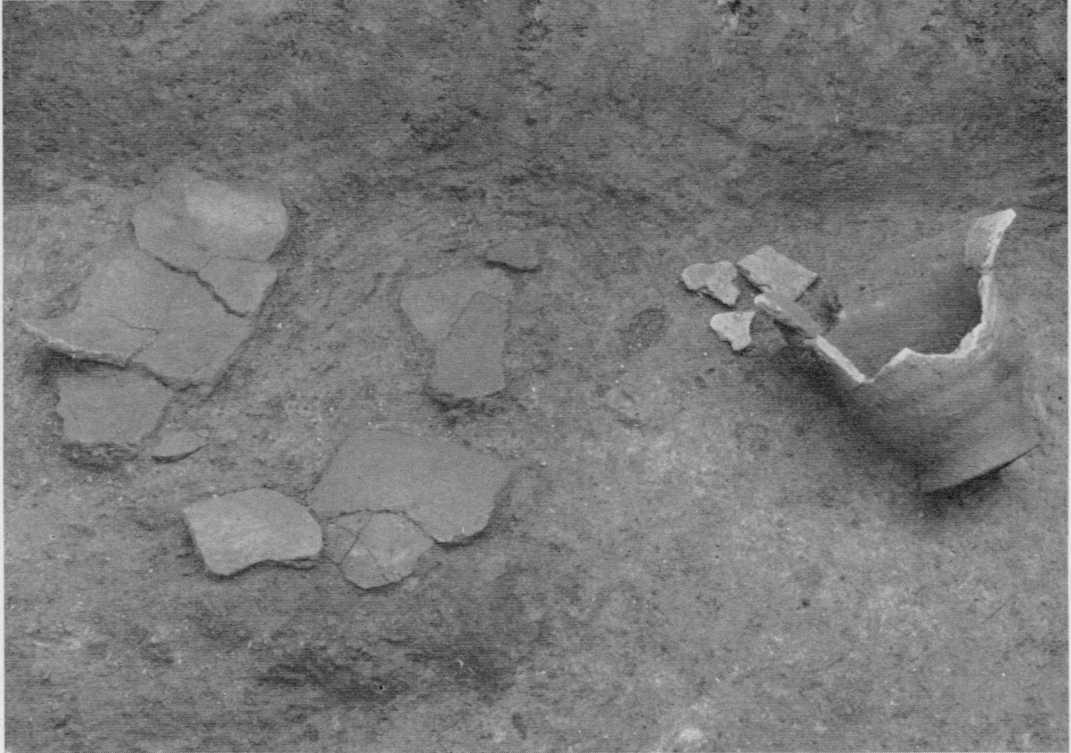
B 第1号竪穴住居跡 (北北西より)



A 第1号竖穴住居跡カマド（発掘前）



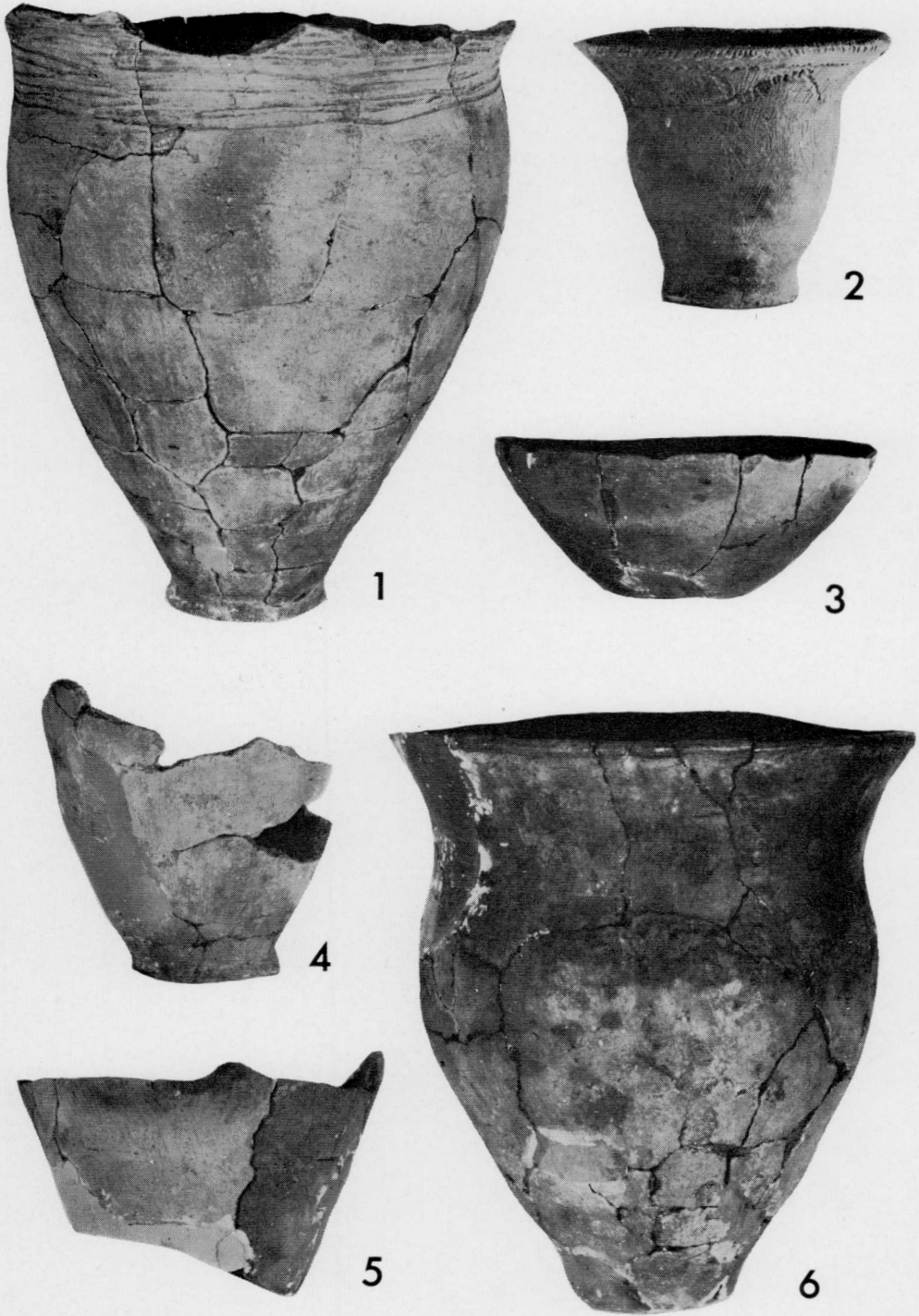
B 第1号竖穴住居跡カマド（発掘後）



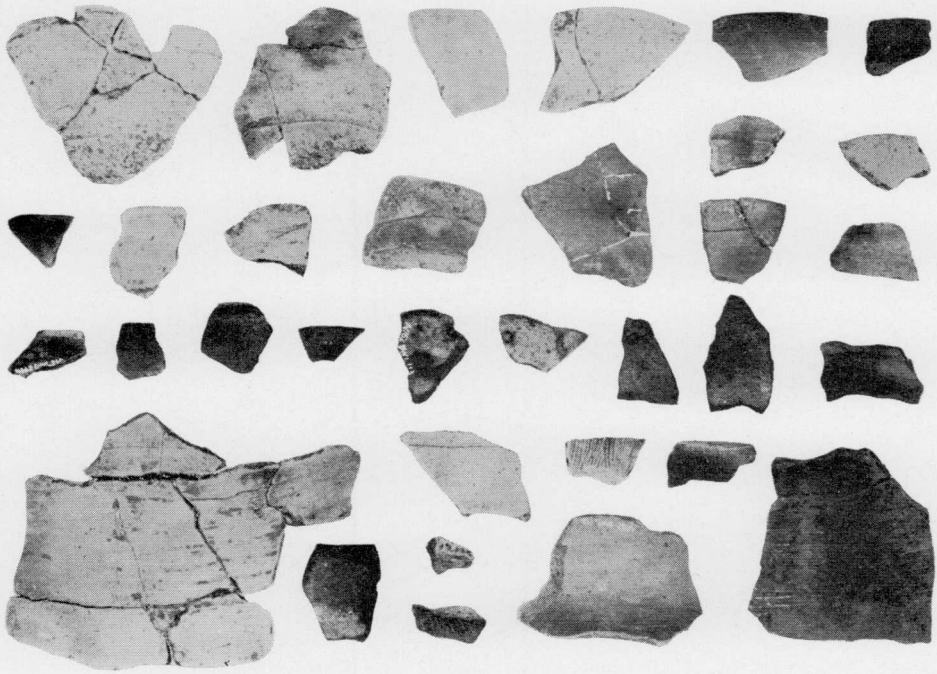
A 第1号A堅穴床面の土器出土状態



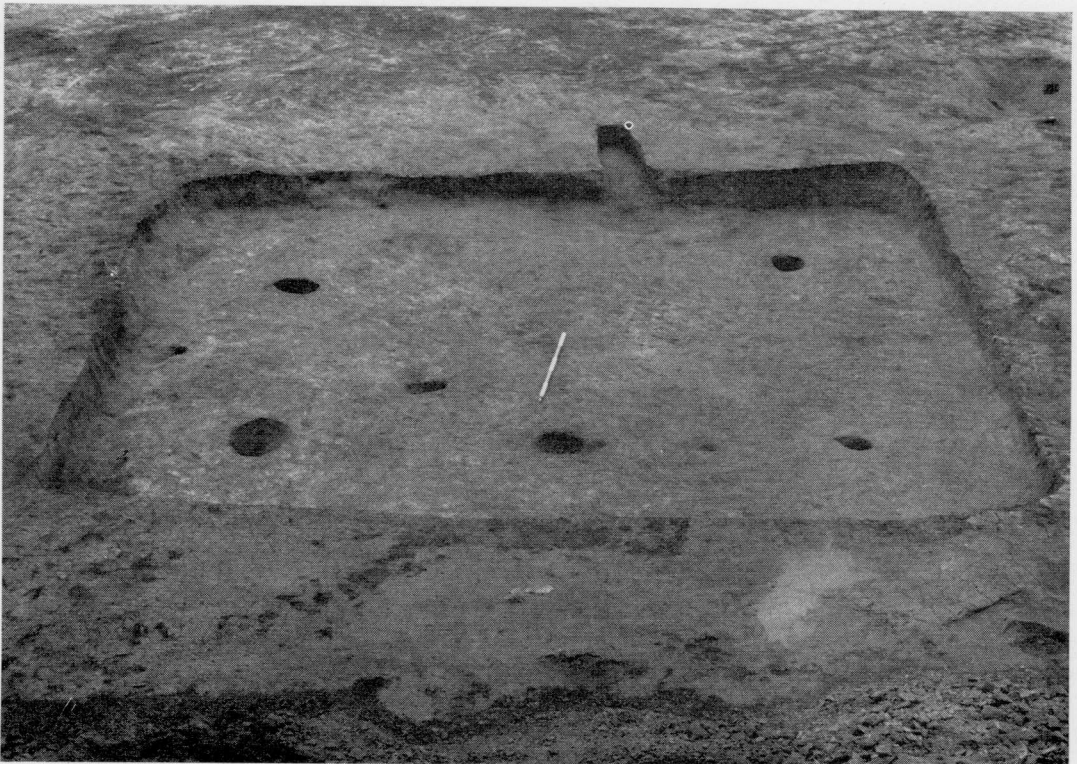
B 第1号堅穴床面の木炭・土器出土状態



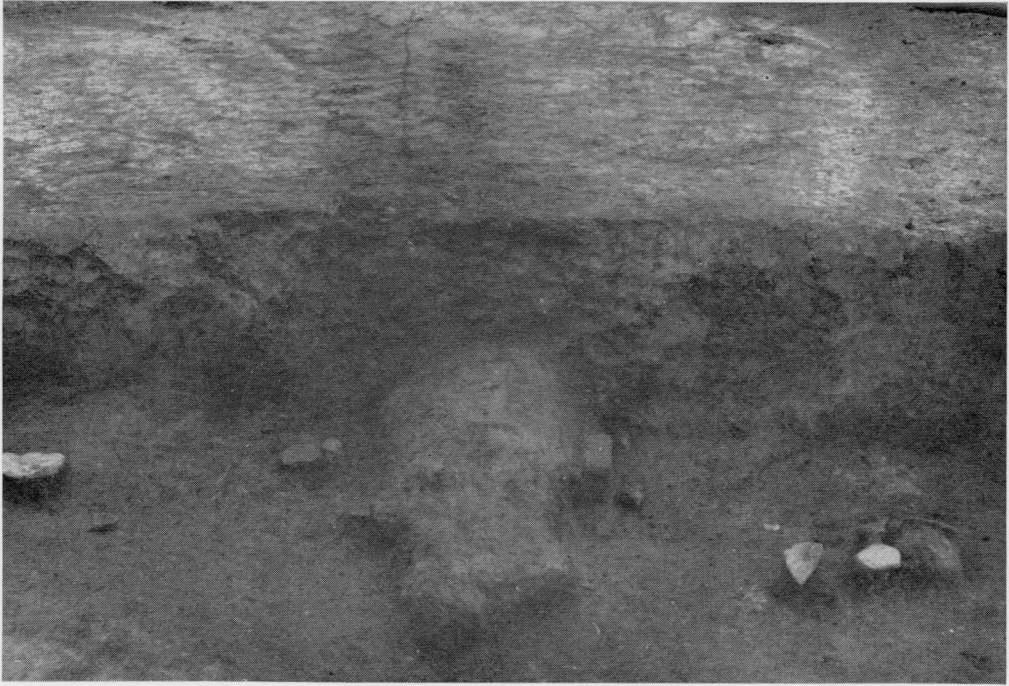
第1号 (1~4), 第2号 (5) 堅穴住居跡, 第1号 (6) ビット出土土器



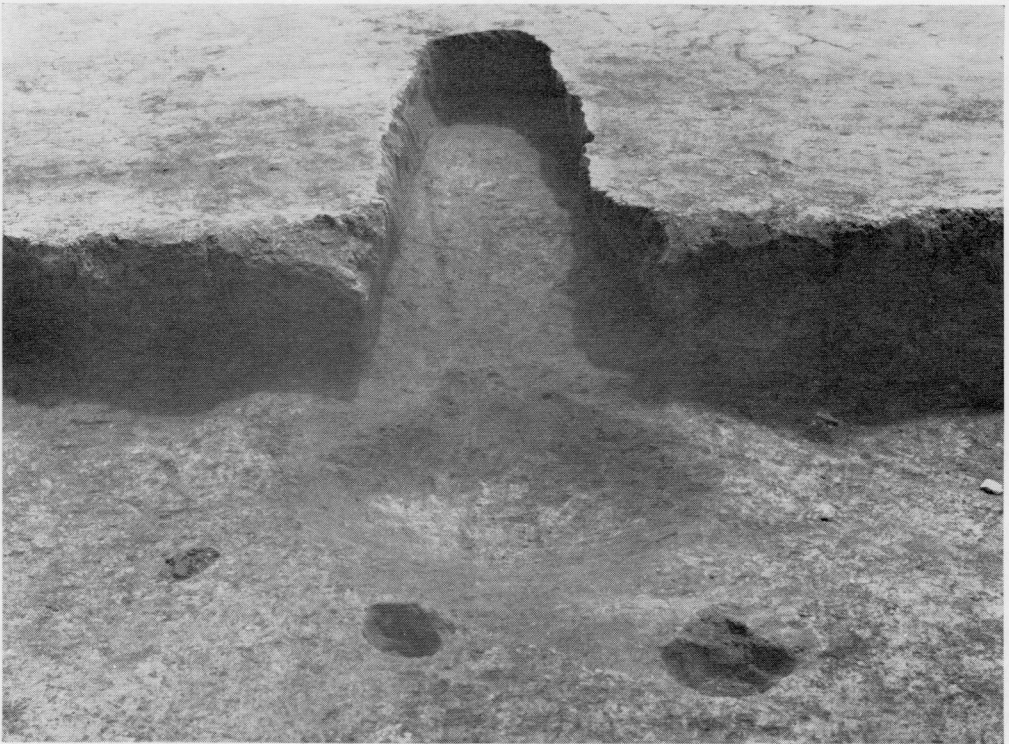
A 第1号A竖穴覆土出土土器



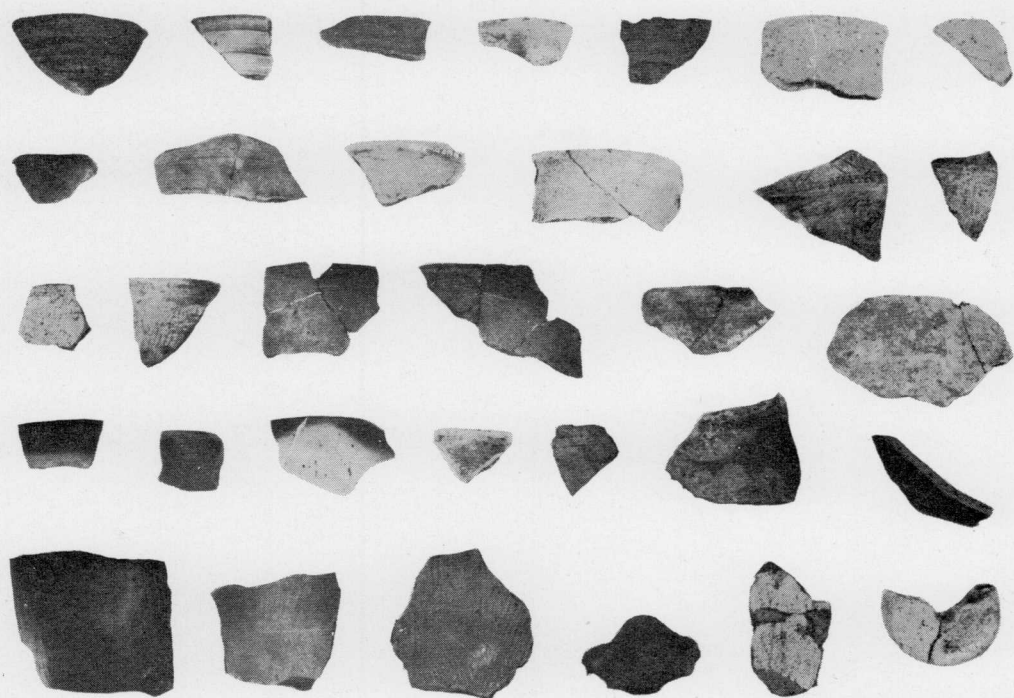
B 第2号竖穴住居跡(北より)



A 第2号竖穴住居跡カマド（発掘前）



B 第2号竖穴住居跡カマド（発掘後）



A 第2号竪穴住居跡覆土出土土器



B 遺構近景(1) (北東より)



A 遺構近景(2) (北東より)



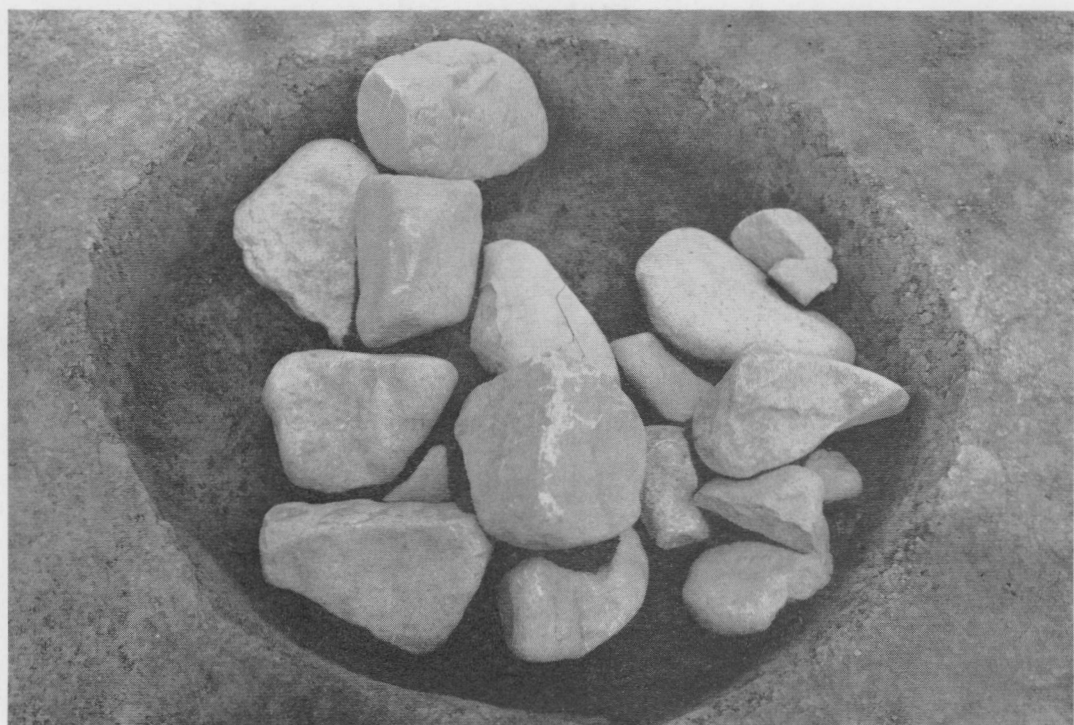
B 遺構近景(3) (北東より)



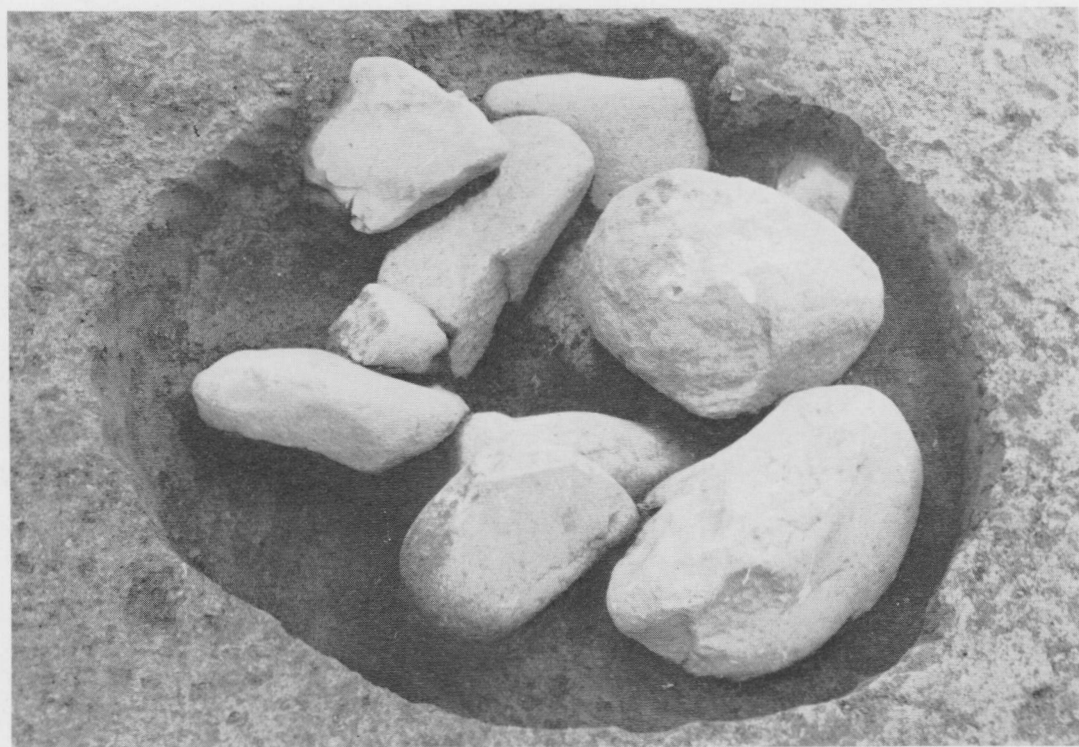
A 第1号ピット(1) (南東より)



B 第1号ピット(2) (南東より)



A 第2号ピット (南西より)



B 第3号ピット (南西より)



A 第4号ピット (1) (西より)



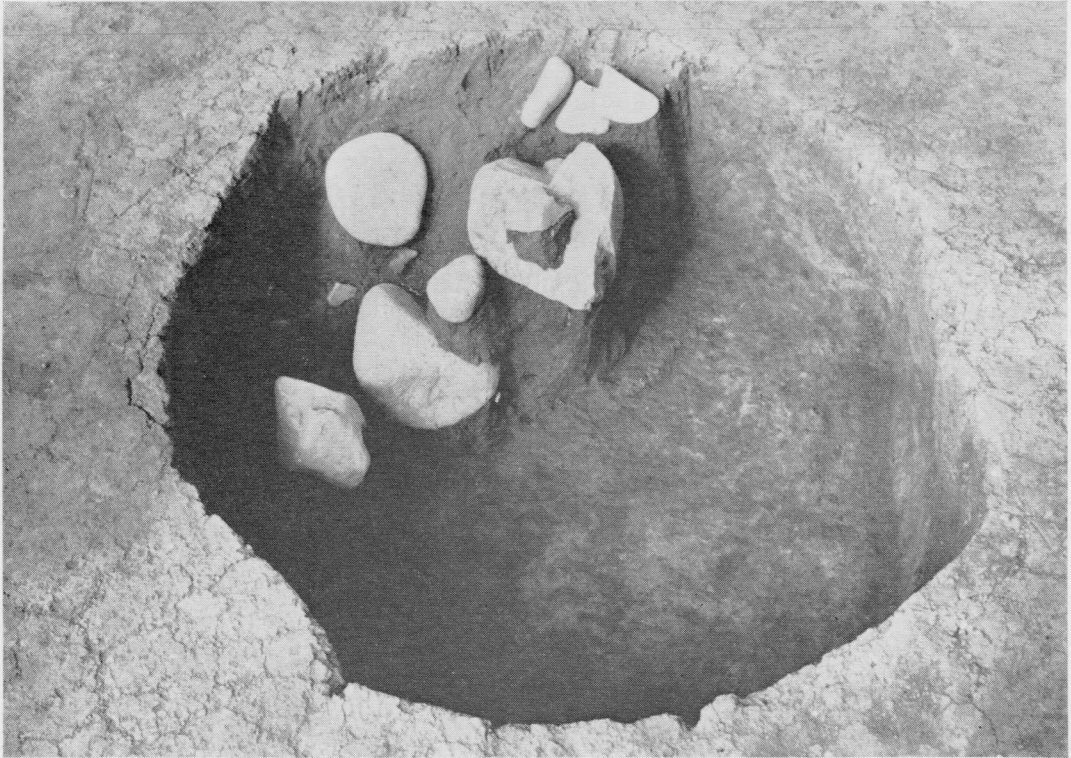
B 第4号ピット (2) (西より)



A 第6号ピット (北東より)



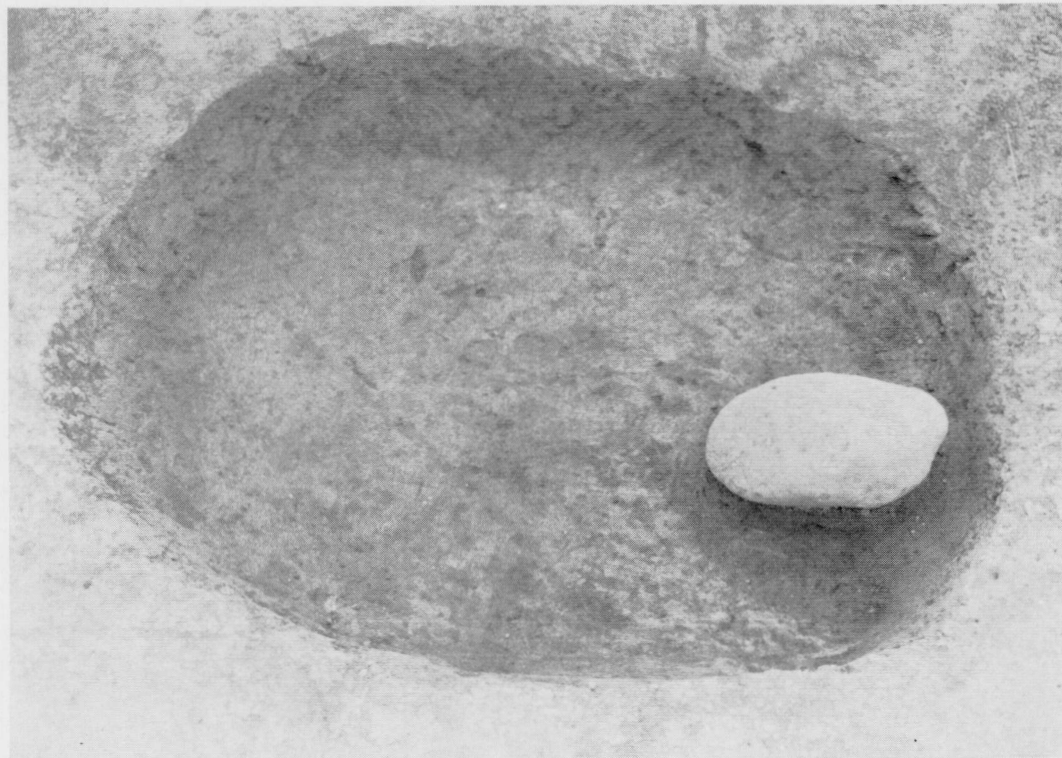
B 第6号ピット及び関連小ピット全景 (北西より)



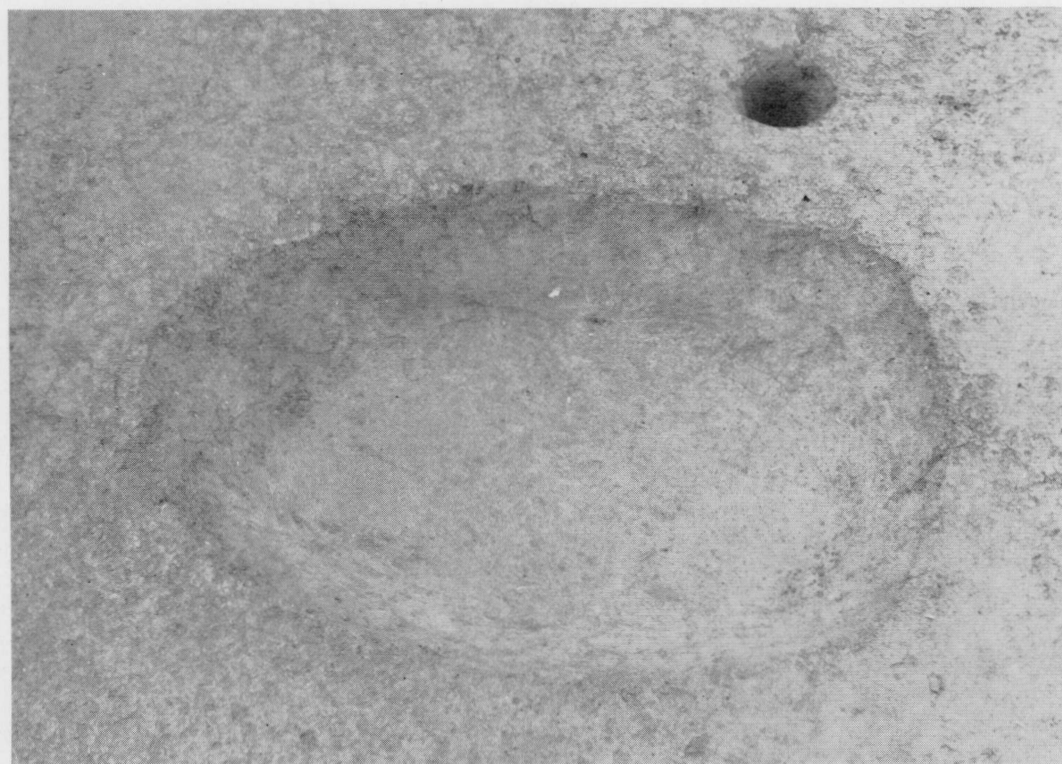
A 第8号ピット (南西より)



B 第22号ピット (南西より)



A 第27号ピット (北東より)



B 第42号ピット (北東より)



A 第9号ピット (北より)



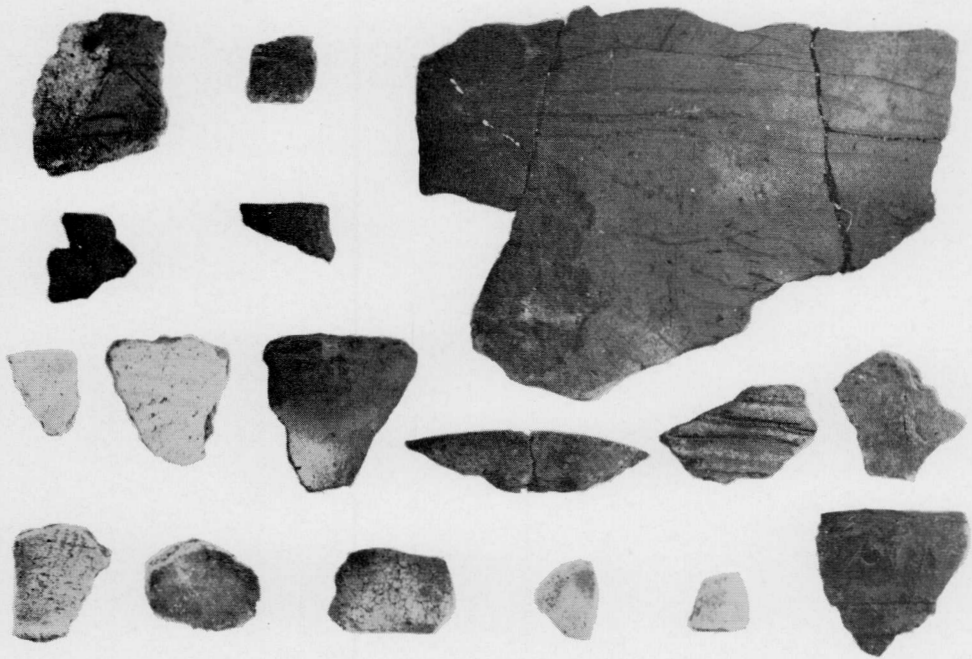
B 第10号, 第11号, 第12号, 第25号ピット (西より)



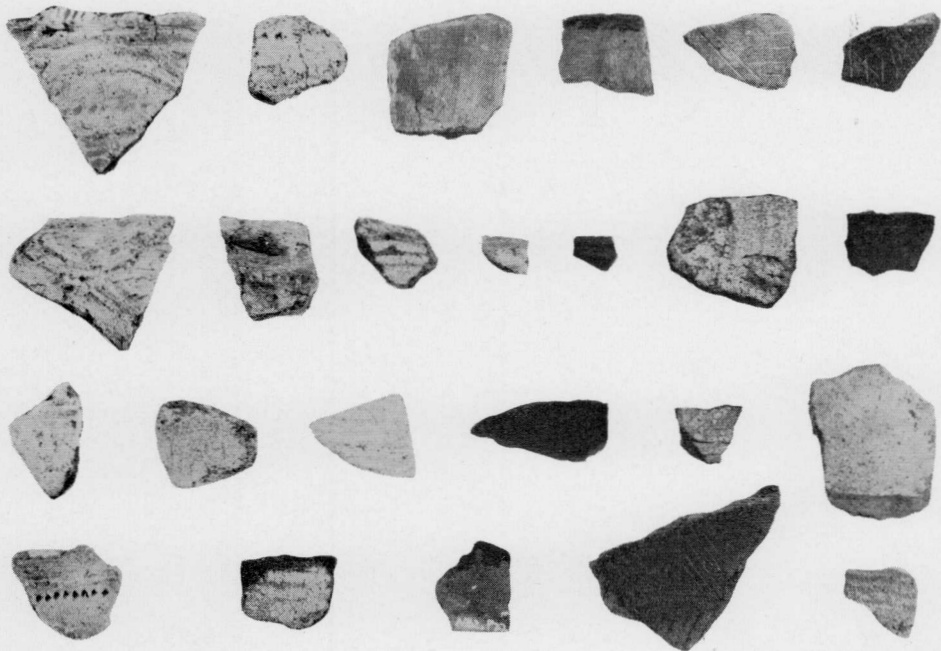
A 第16号、第17号、第18号、第19号ピット（北西より）



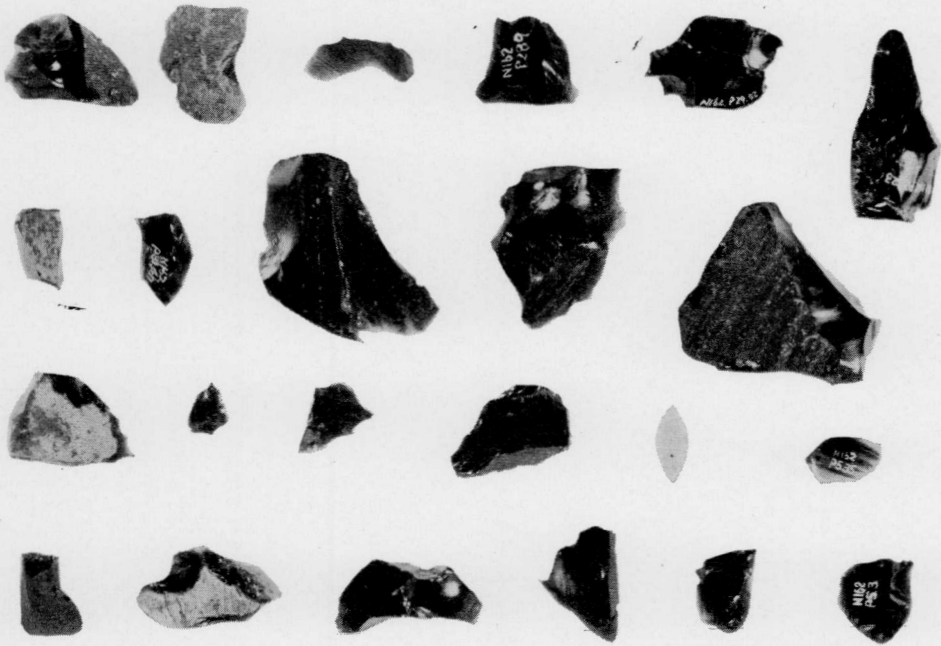
B 第20号、第21号ピット（西より）



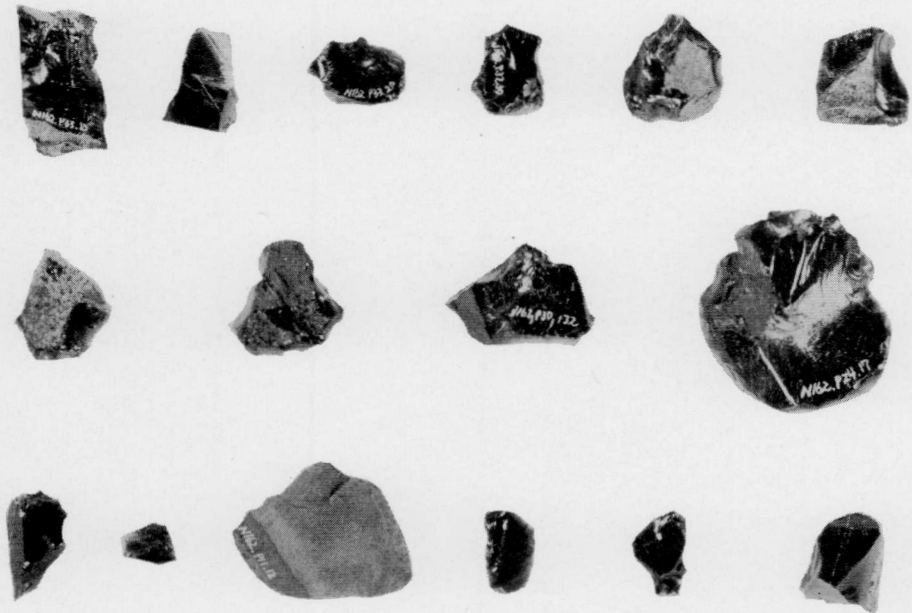
A ビット出土土器 (1)



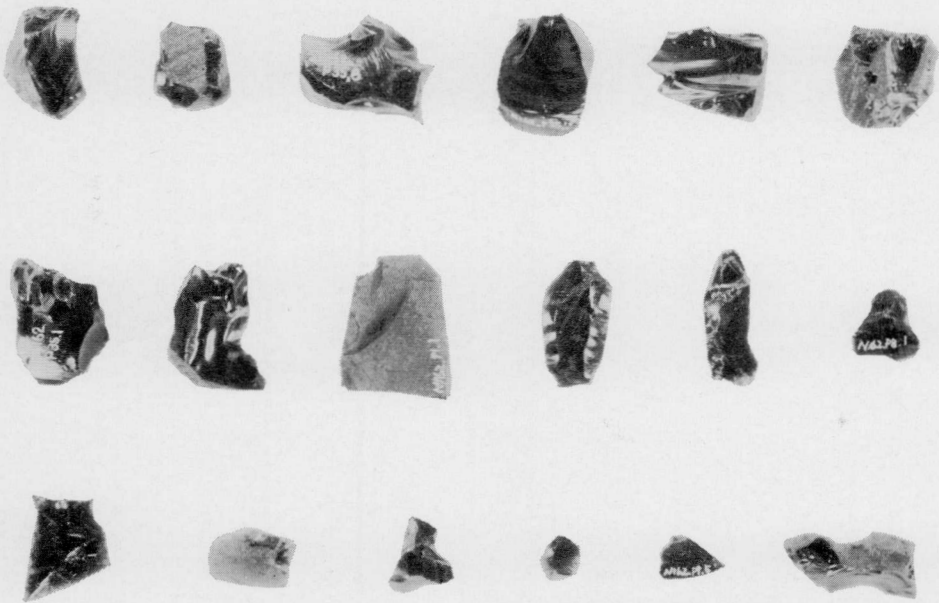
B ビット出土土器 (2)



A ヒット出土石器・石片 (1)



B ヒット出土石器・石片 (2)



A ビット，第1号堅穴住居跡出土石器・石片



B 第1号ビット，第1号堅穴住居跡出土石器 (1/2)



A 发掘区出土土器



B 发掘区出土石器

札幌市文化財調査報告書 V

N 162 遺跡

昭和49年6月15日印刷

昭和49年6月29日発行

発行者 札幌市教育委員会
札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所 三陽印刷株式会社
札幌市西区手稲東3北2丁目